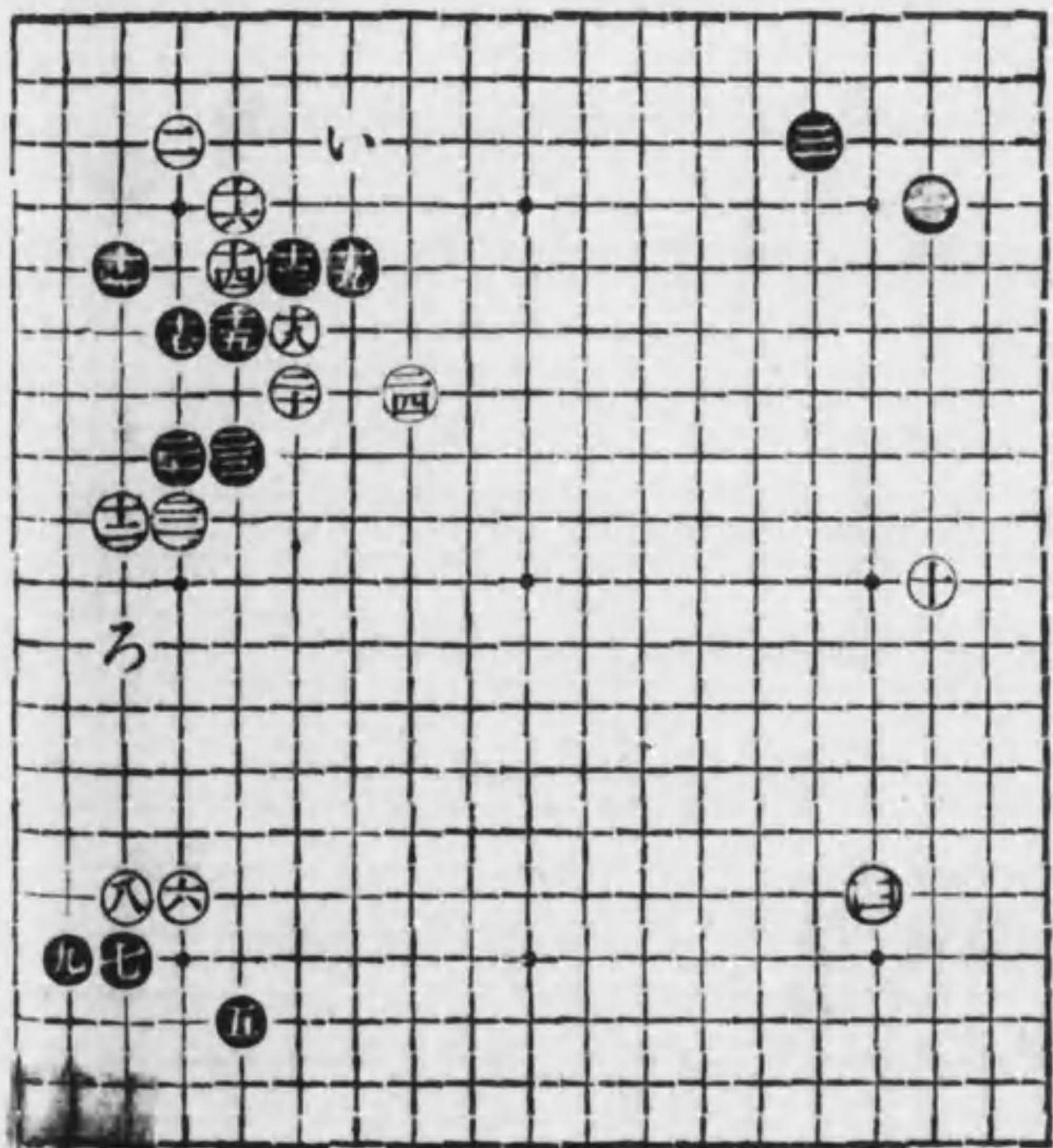


なほ前譜續講——

黒十三は(い)と白に受けさせ次に黒(ろ)と打込みの氣鋭。

それで白十四は以下白二十四まで待望、即ち黒(ろ)と黒に打込まさせない、機先を制して妙。

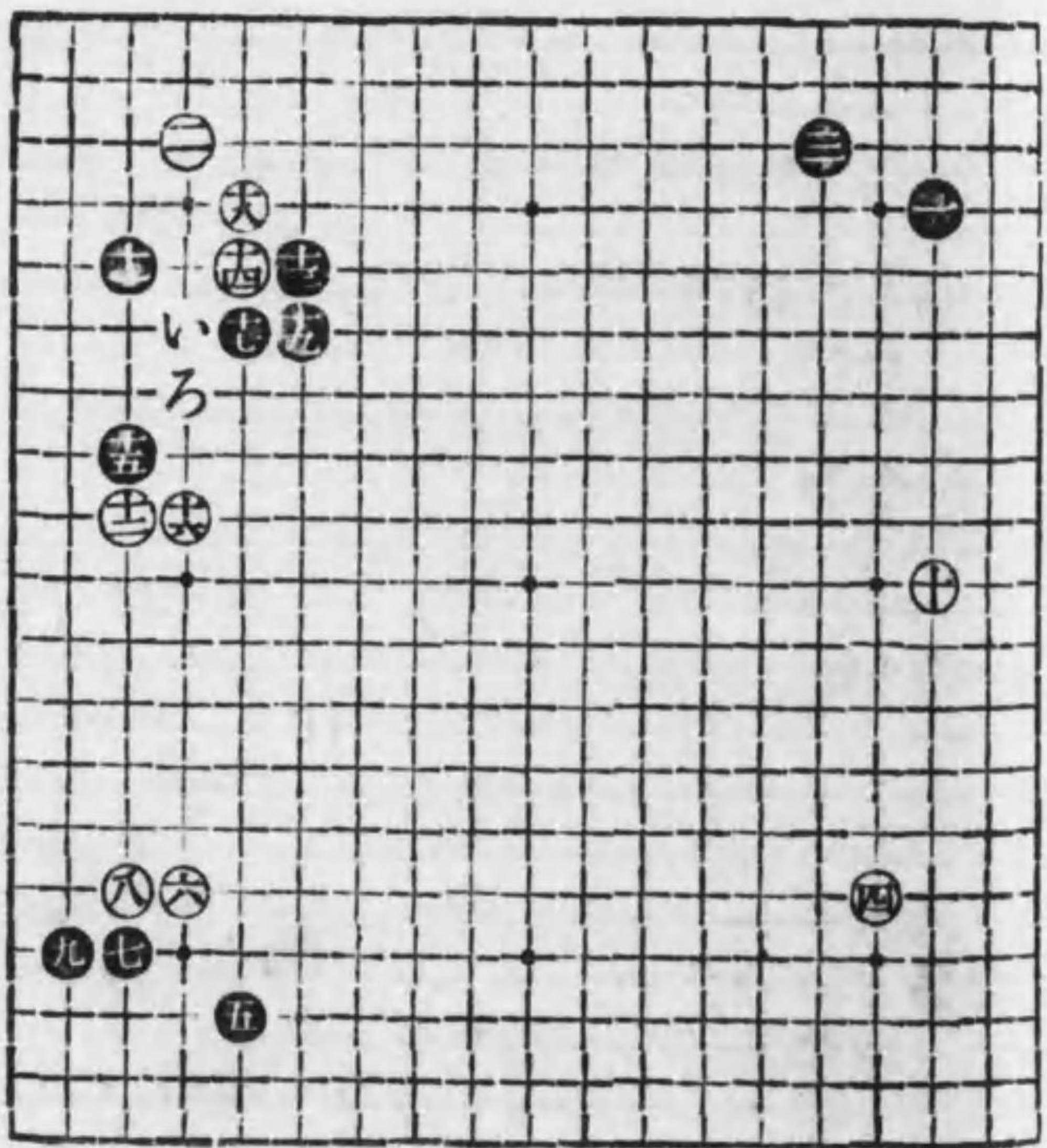
黒十七を十八なら白十七で黒悪果。等で黒十五は——



本圖黒十五が此れも白十四の機先を制して、次に！白十六なら、以下黒十九と成つて——

更に白(い)には、黒(ろ)で、即ち黒十五が巧い前提である。

と斯様な手所が解つて先づ品位初段、戻つて本譜と参照せられよ。更に明瞭である。



本譜も弘化年間、七段安井算知、五段勝田榮助、勝田氏先番

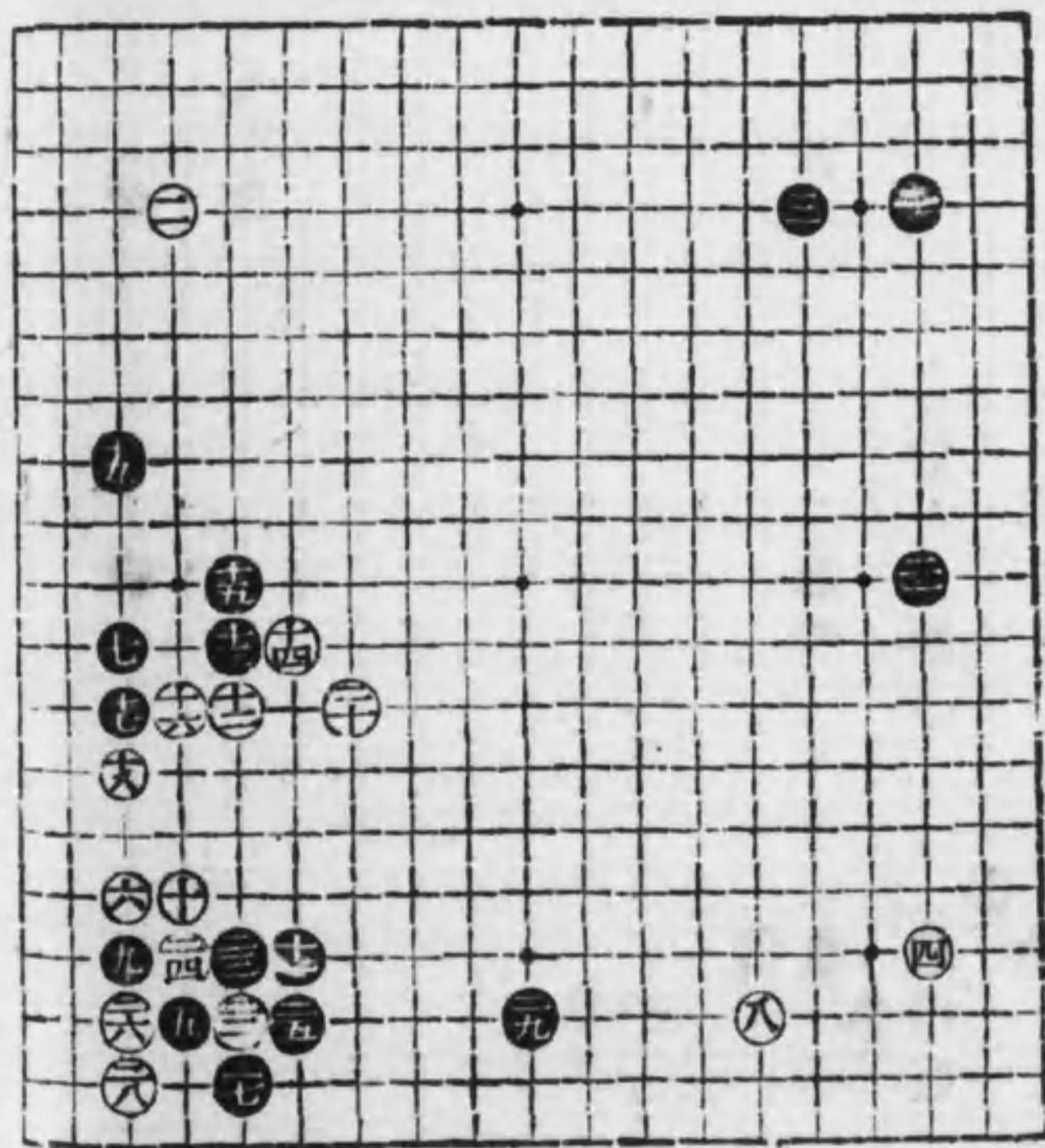
先づ黒二十一は當面第一の大場に占據、そして白二十二以下

黒二十五の時、黒二十五を二十六でない二十九まで

が

白二十の方も堅固、また白二十八と成つた此方も堅固

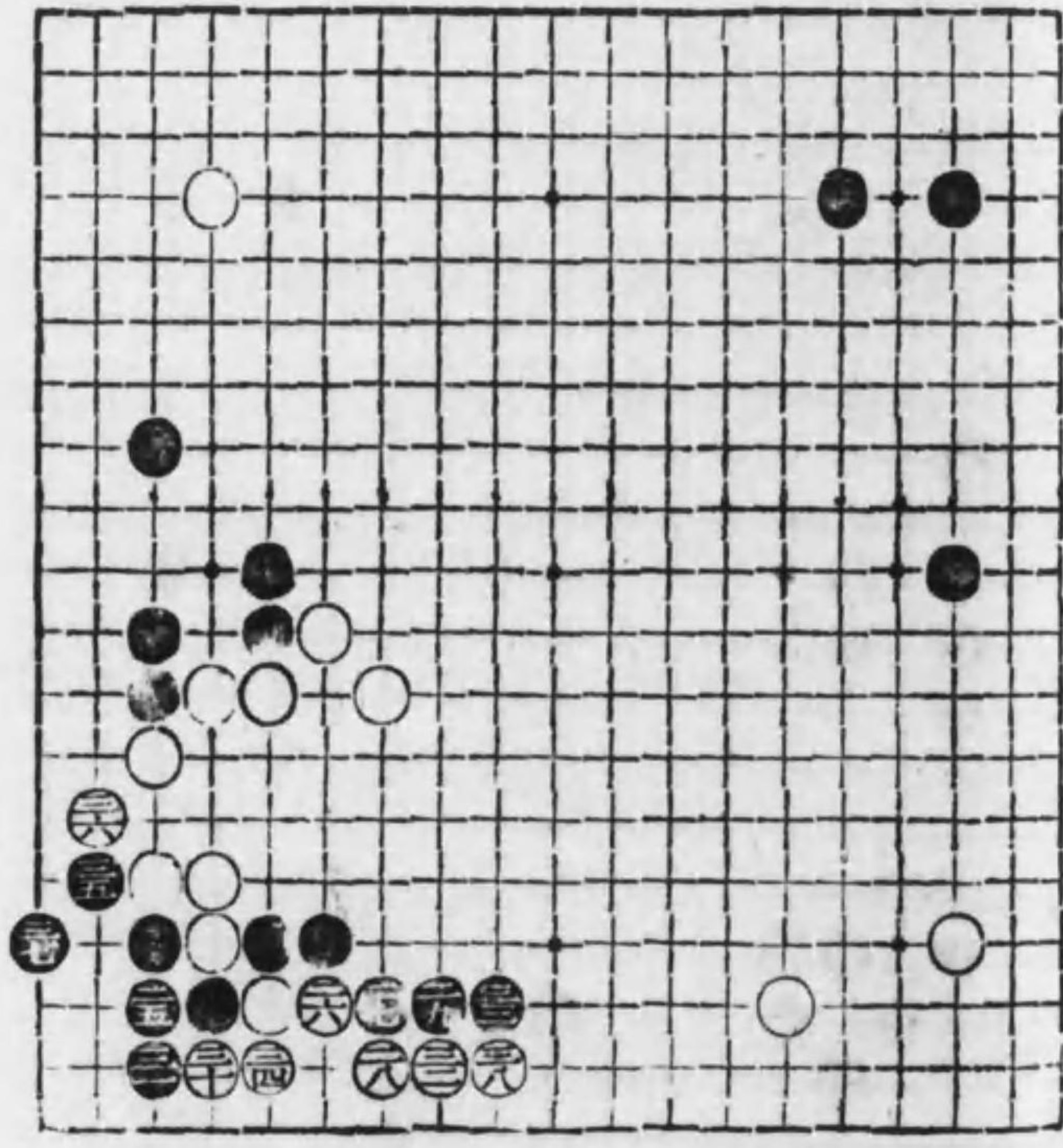
固



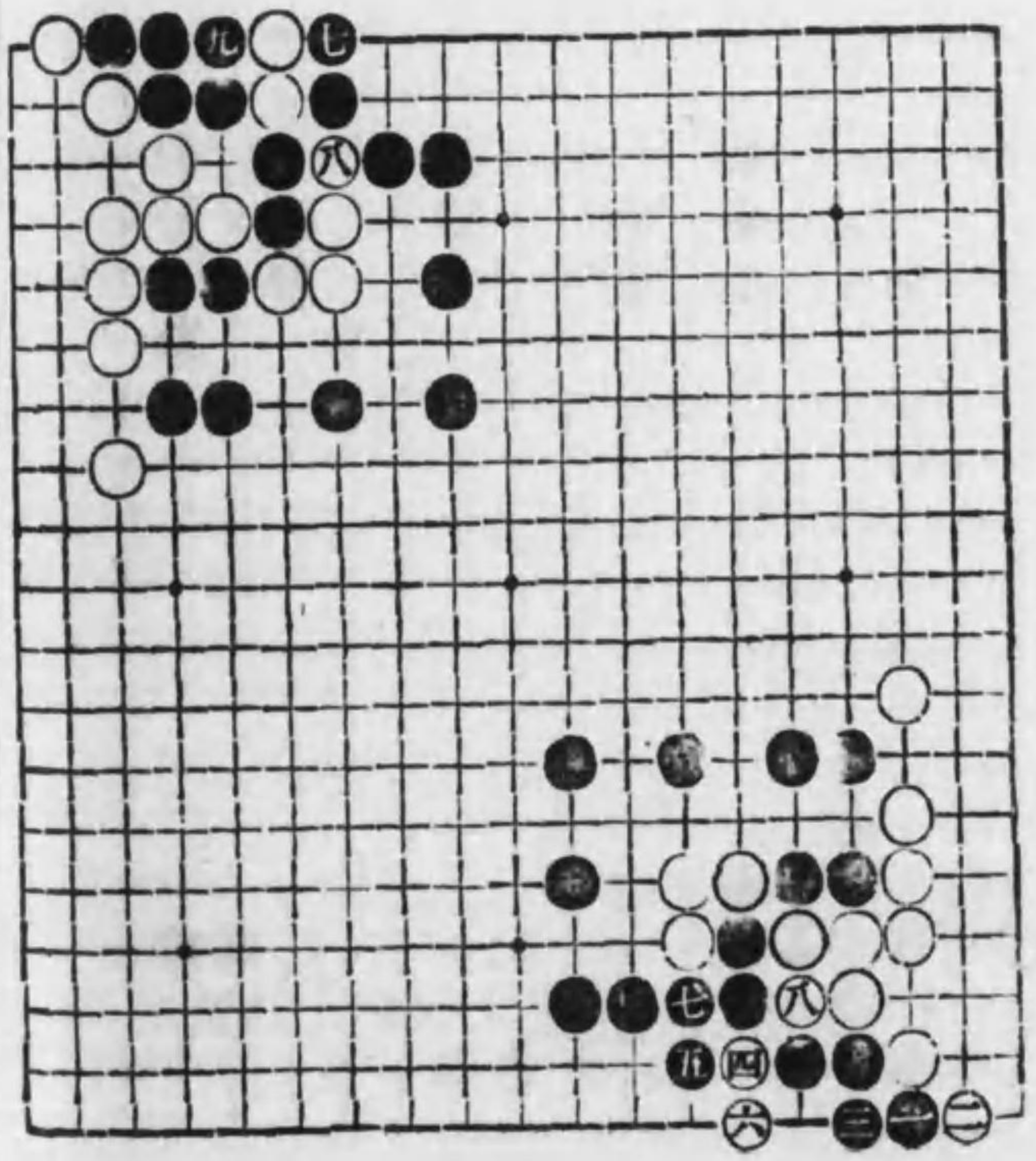
即ち白に堅固を一ヶ所に合流させ、此れを俗に凝らせる」と云ふ勝因の原理である。

黒二十五を本圖二十五だと、以下白三十八まで等、なほ隅に黒一手を要し黒要果。

されば前譜黒二十九までが、融通自在である旨い輕妙の、即ち大勢把握の手段



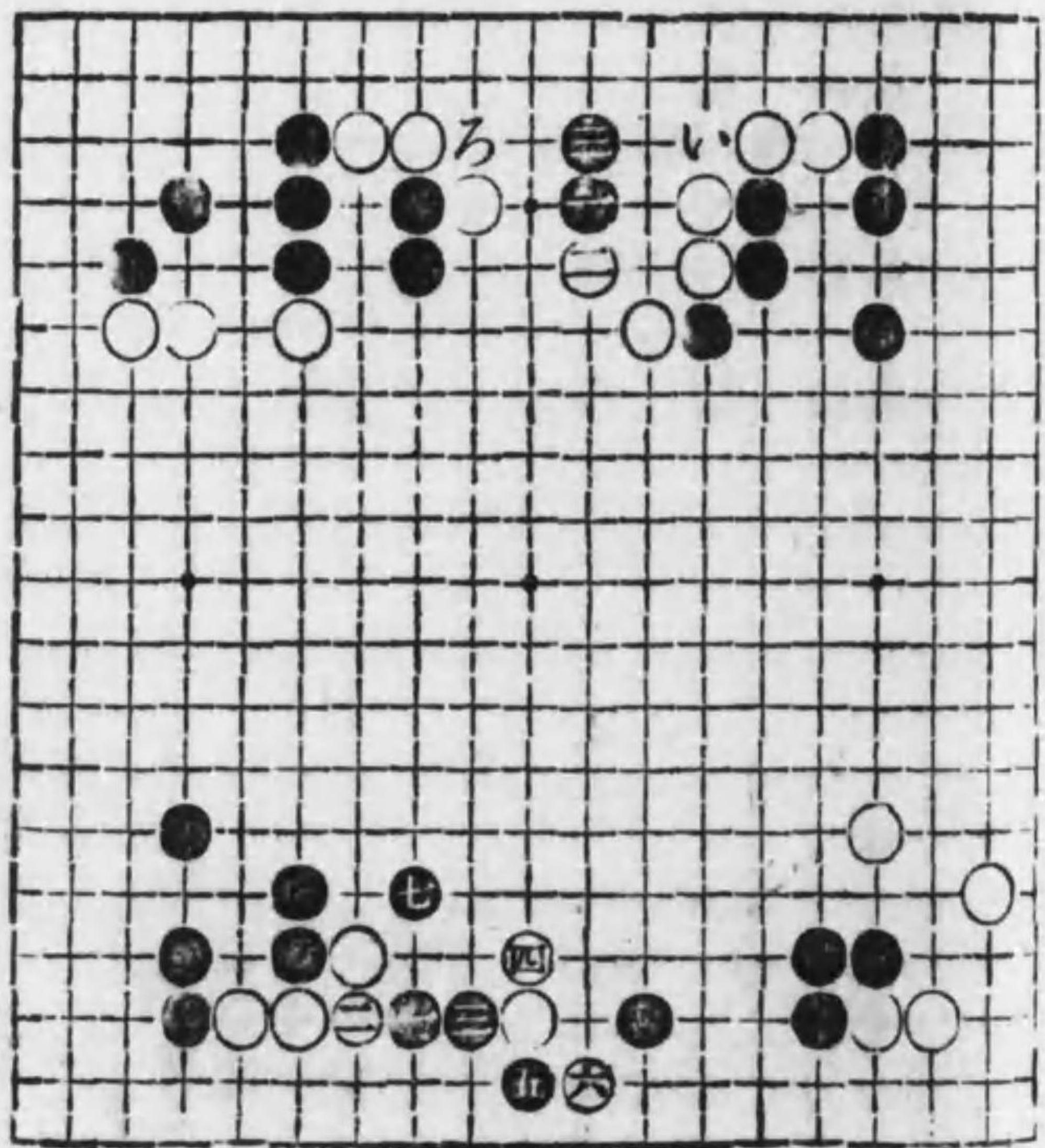
下圖黒一と三は、以下白八と黒四子を取られ黒負け此れは後年名人と成つた秀甫其人も輕勿に打ち——
 黒七を上圖七だと以下黒九と白丸二子打拔の時白から下の白丸に打込まれ。で解る白四の妙手に因る最も注意の觀點である。



今度は置碁に現はれるもので先づ——

上圖黒一と三は殊に黒三は(い)と(ろ)の切りを見て甚だ妙

下圖黒一以下七は白を兩斷、黒七が巧い手所である本圖黒七まで等は白が多く常套手段に用ひ、と實感されやう。
 なほ次圖に續講——



また黒一に白二は以下黒七まで。

即ち黒七と渡つて右の黒四子は大いに強化であつて

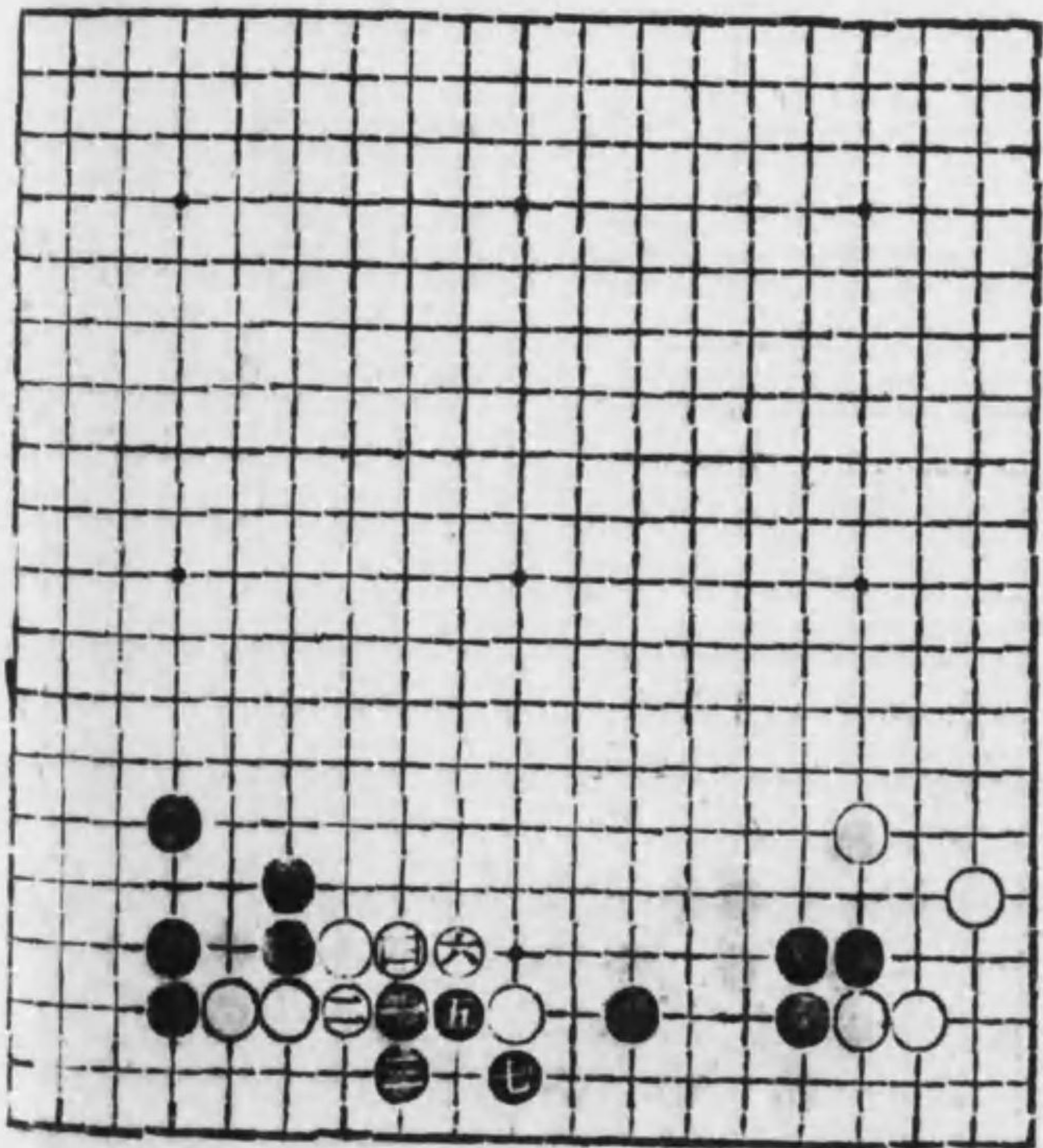
白六以下は白地も無い悪

果である黒三も巧い手所。

と感心してはいけない白

にも巧い對策。

夫れが次圖黒一に白二である。



黒一に白二と打てたら強

いもの——

觀られよ、先づ白十二と

成つて黒十三の切りは、以

下——

黒十五の時白十六は四に

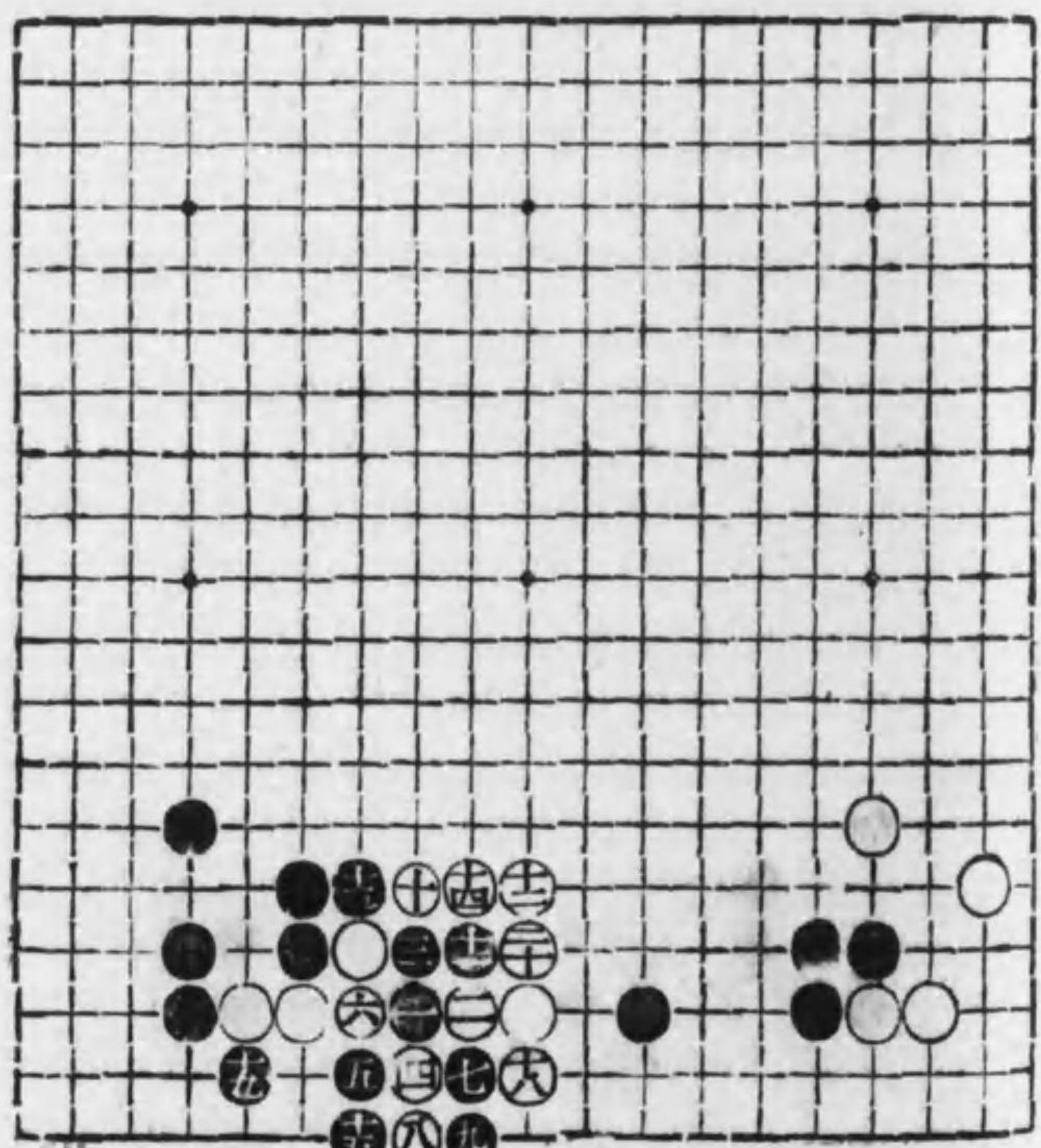
打込み、黒十七は八の所に

共黒十七を取り、そして白

十八以下白二十に——

黒二十一は四に粘ぎ、夫

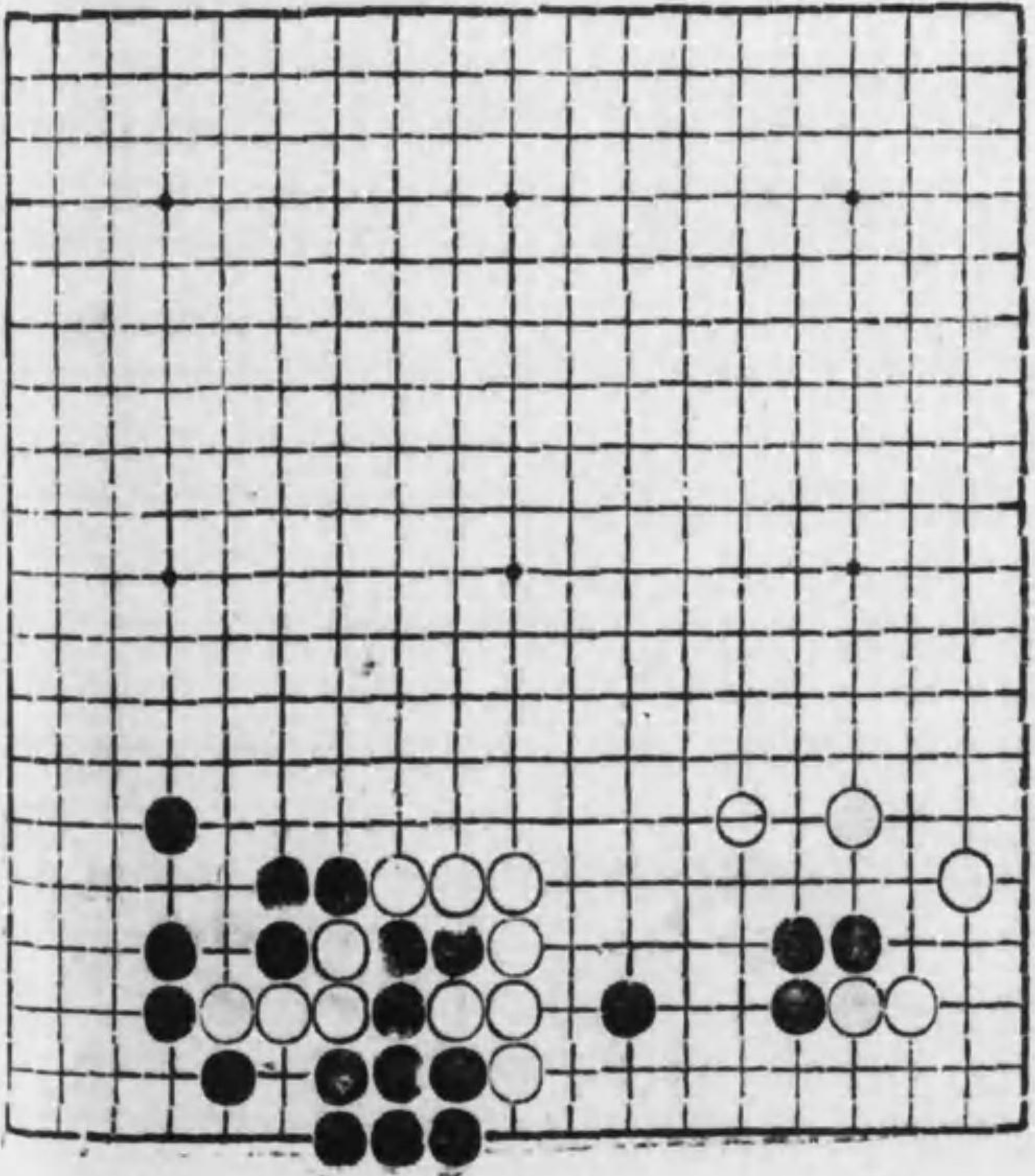
れが次圖——



黒は白四子を取つて喜んではいけない、白に捨てられた

即ち更に白一と成つて黒四子に悪影響。

黒喜ぶどころの騒ぎではない、何と前圖白二の妙手併し前圖白二も右に黒四子取られる時に妙。左の白四子取られて損の時もある



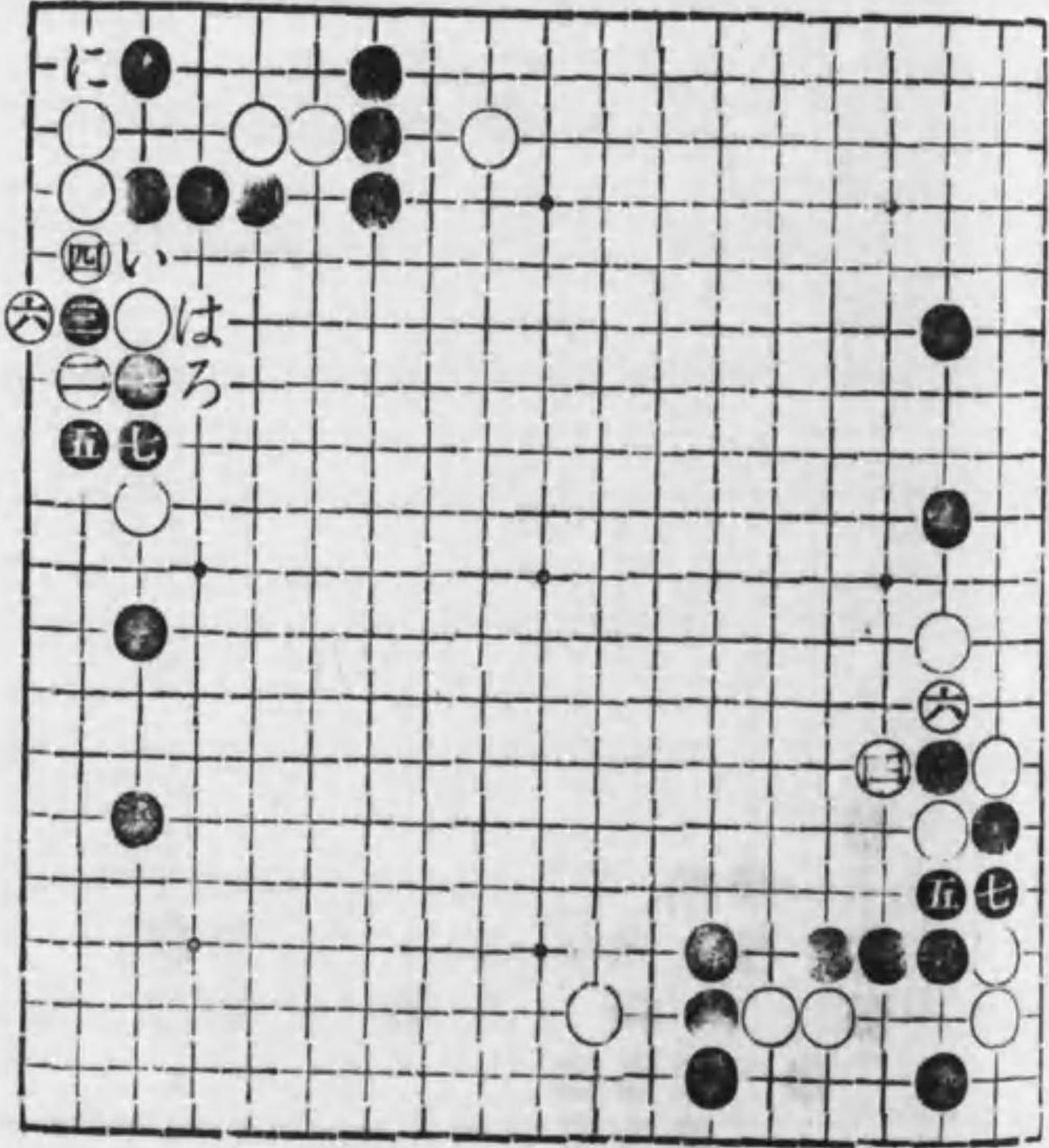
左側黒一と三は以下黒七と白を兩斷。

また白四を右側四なら以下黒七と、此れも同様白を兩斷。

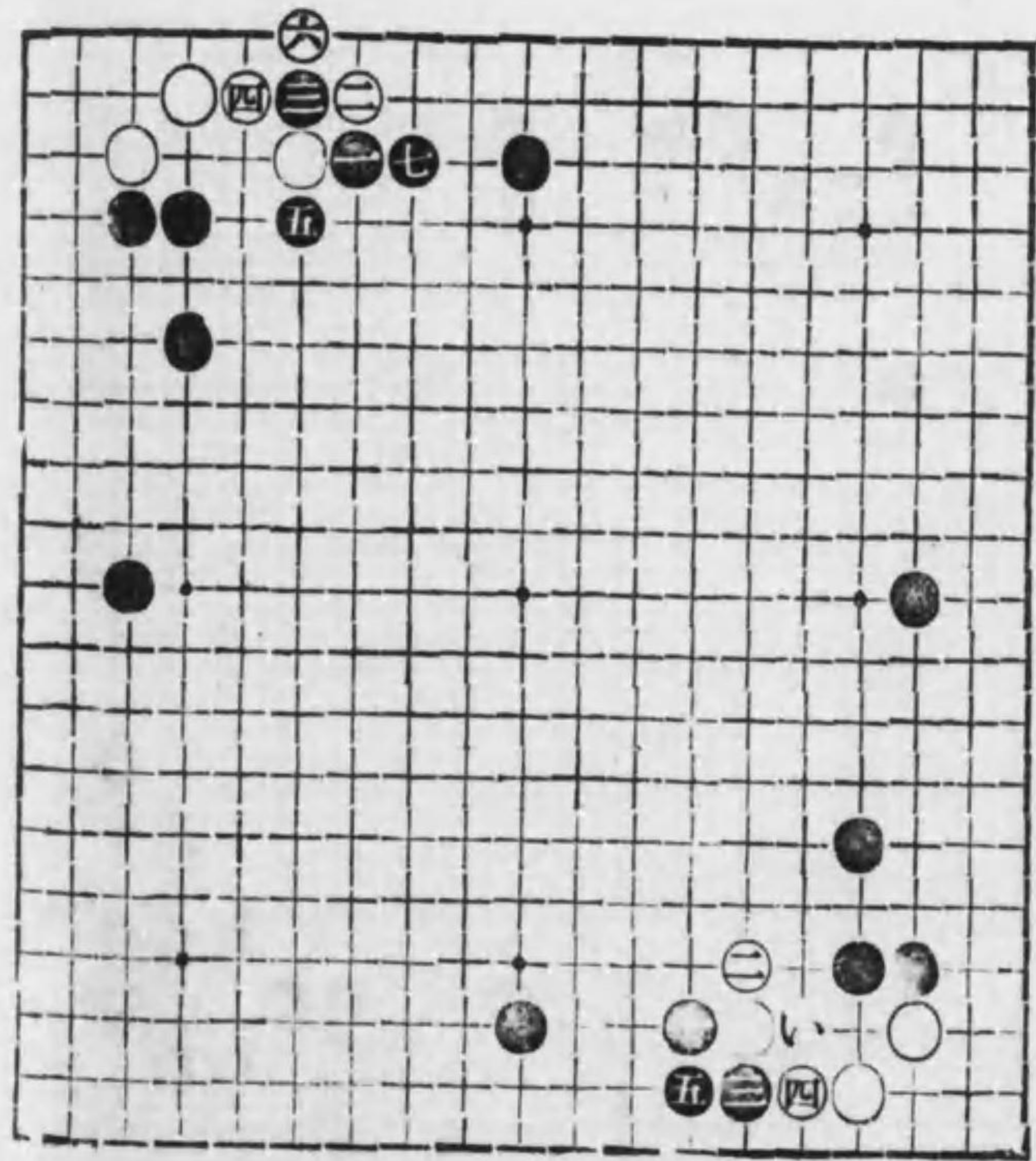
更に左側に戻つて、白二を七なら、黒四。に白(五)は黒二。

に白(ろ)なら黒三白(は)黒(に)。

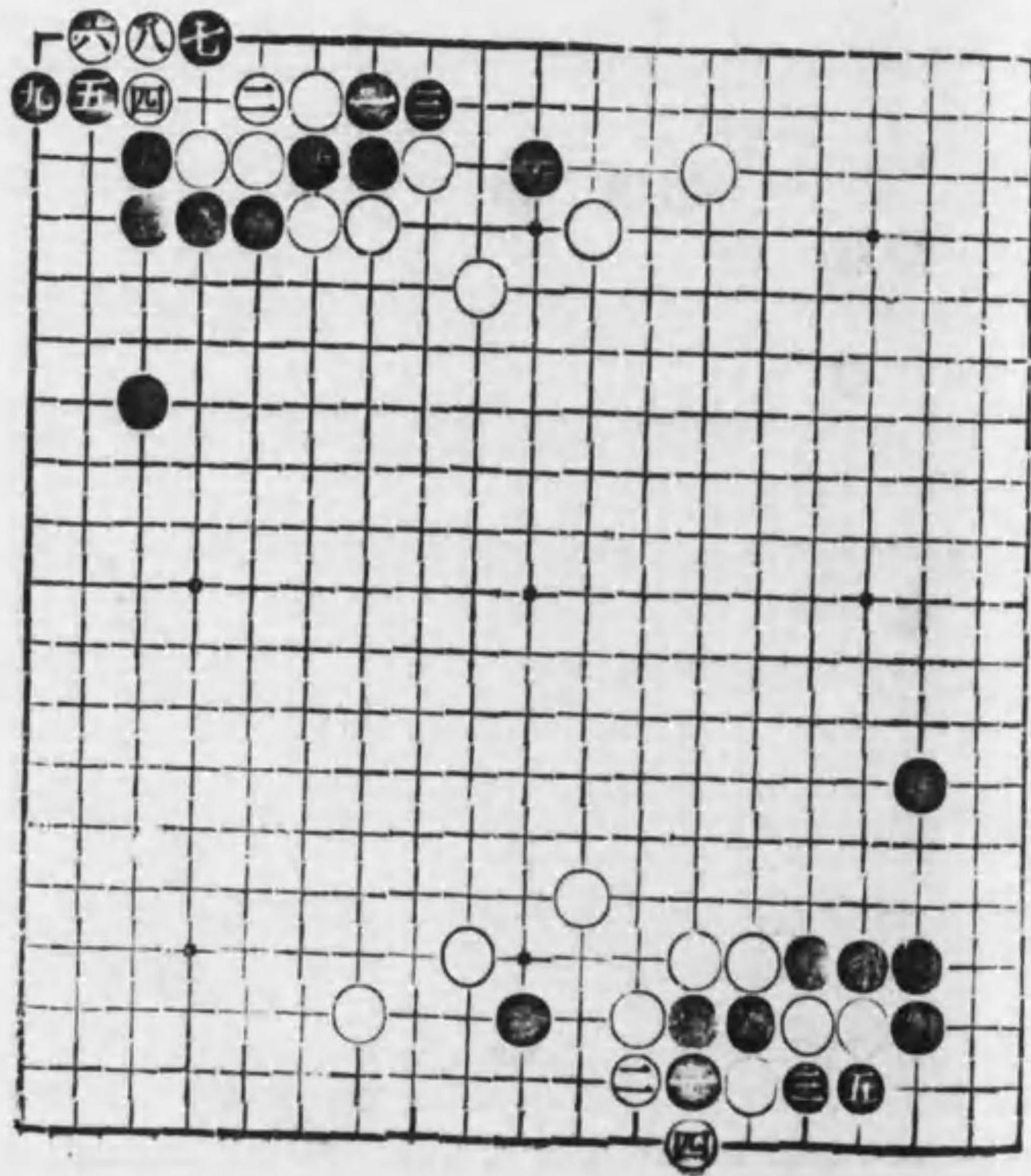
で解る黒一手攻合勝ちである。



上圖黒一に白二なら、以下
 下黒七と一擧黒大模様。
 また白二を下圖二なら、
 以下黒五で黒此方に大利。
 それに(い)と切りも残つて
 此白二は悪い手所。
 等で白二は三であらうか
 ら次に黒二で、何れにして
 も黒一は巧い手所である。



下圖黒一は以下黒五と成
 つて白丸白二子取りも残り
 巧い大利の手所である。
 白二を三なら、夫れが上
 圖白二であつて、以下黒九
 で要するに白攻合負け。
 されば白二は下圖二より
 無い。が黒一は妙である此
 れも捨石の効用顯著。



上圖黒一は――

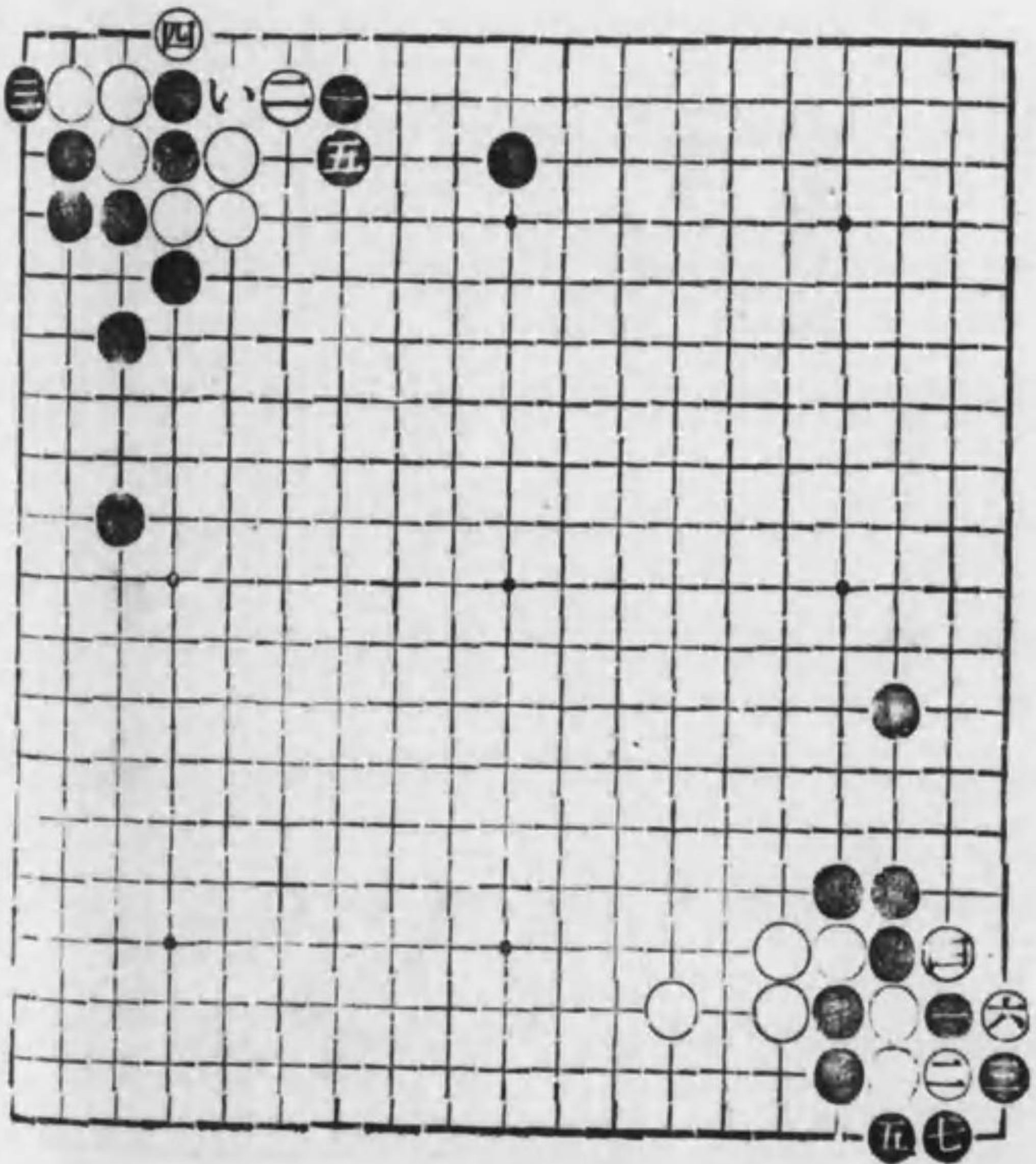
白二を(5)なら黒一に無影響。

斯様白二なら以下白四で左右に黒有利。

そして黒五と巧い手所である。

下圖黒三に白四なら以下黒七で劫争展開。

但し黒劫立て多く即ち劫に勝てる時。と心得られよ



下圖白一に黒二が巧妙の手所。

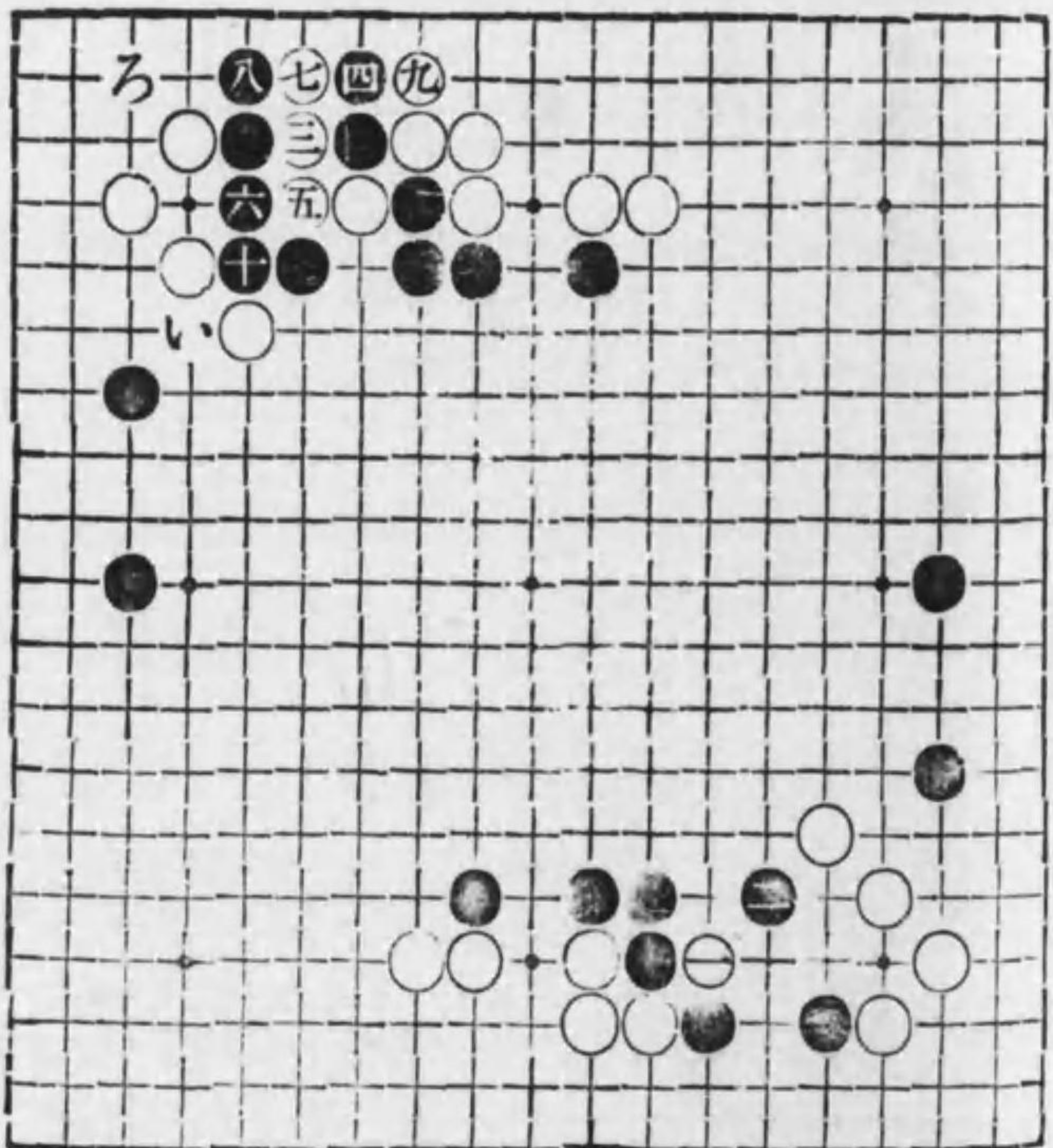
といふのは上圖に移つて次に白三であらうから以下

黒十まで――

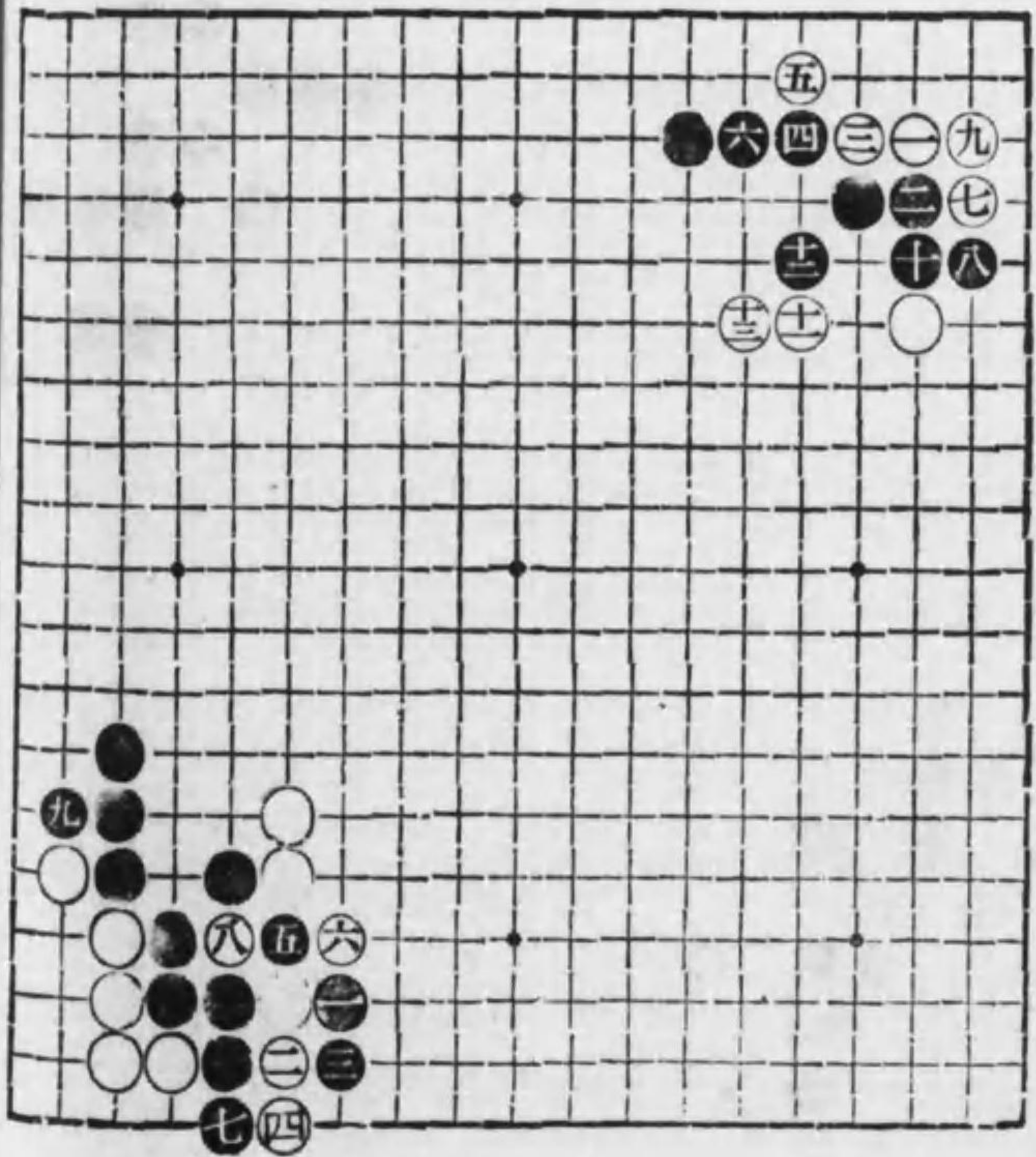
と白は黒二子を取つても

(5)の切り、また(ろ)の飛込みを黒に残して、白惡果だからである。

本圖も黒四と二子にして捨石が妙。

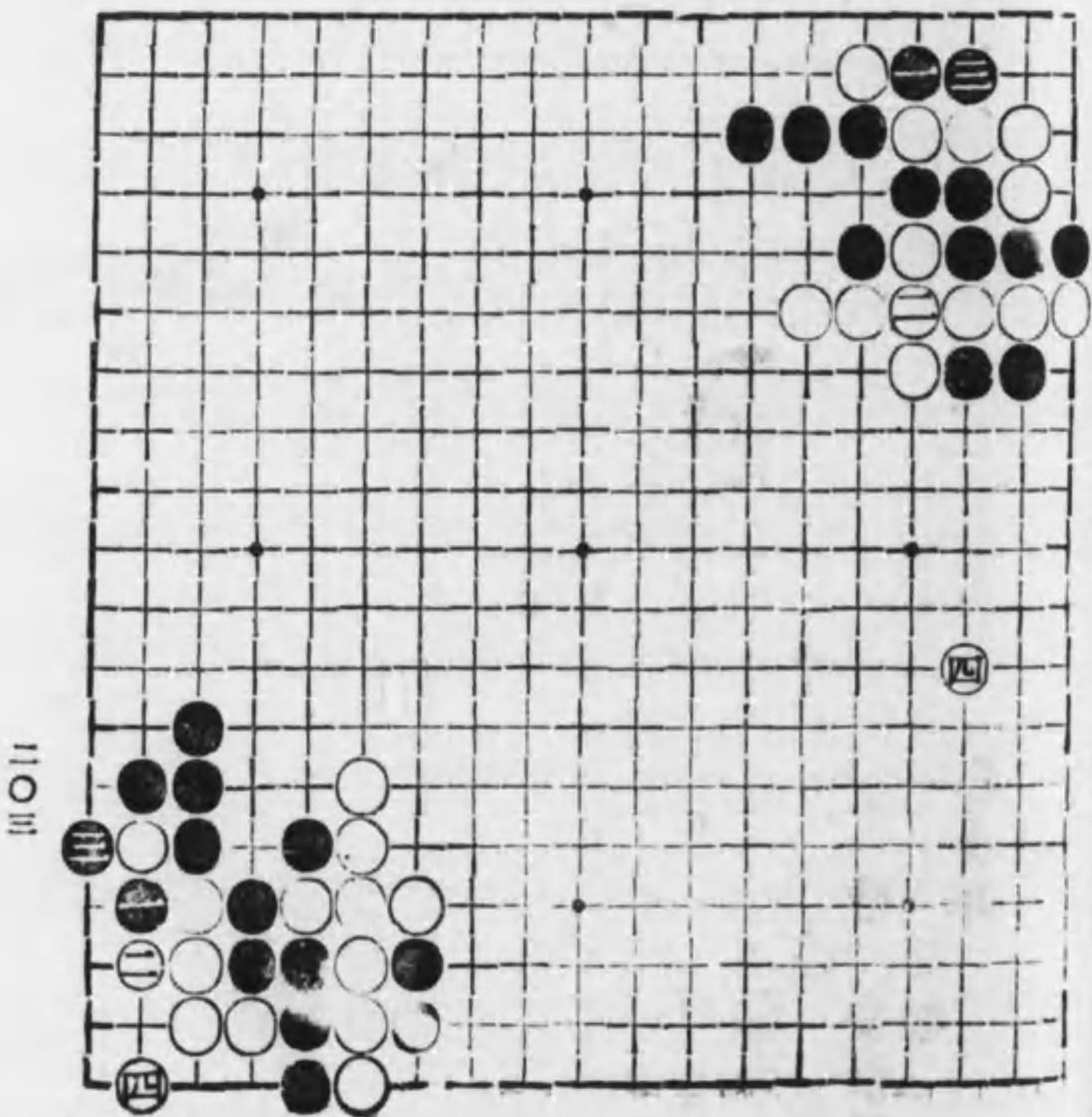


本圖には唐人の泣手といふ挿話もあつて、先づ上圖白一より十三迄は定石——そして下圖に移つて更に黒一より白四の時、白四の旨い手に唐人が一寸泣顔——また以下黒九に、白十は五の所に粘ぎ更に次圖に轉じ唐人の泣顔は——



即ち下圖黒一以下白四と活きられ甚だ黒不結果の夫れ。

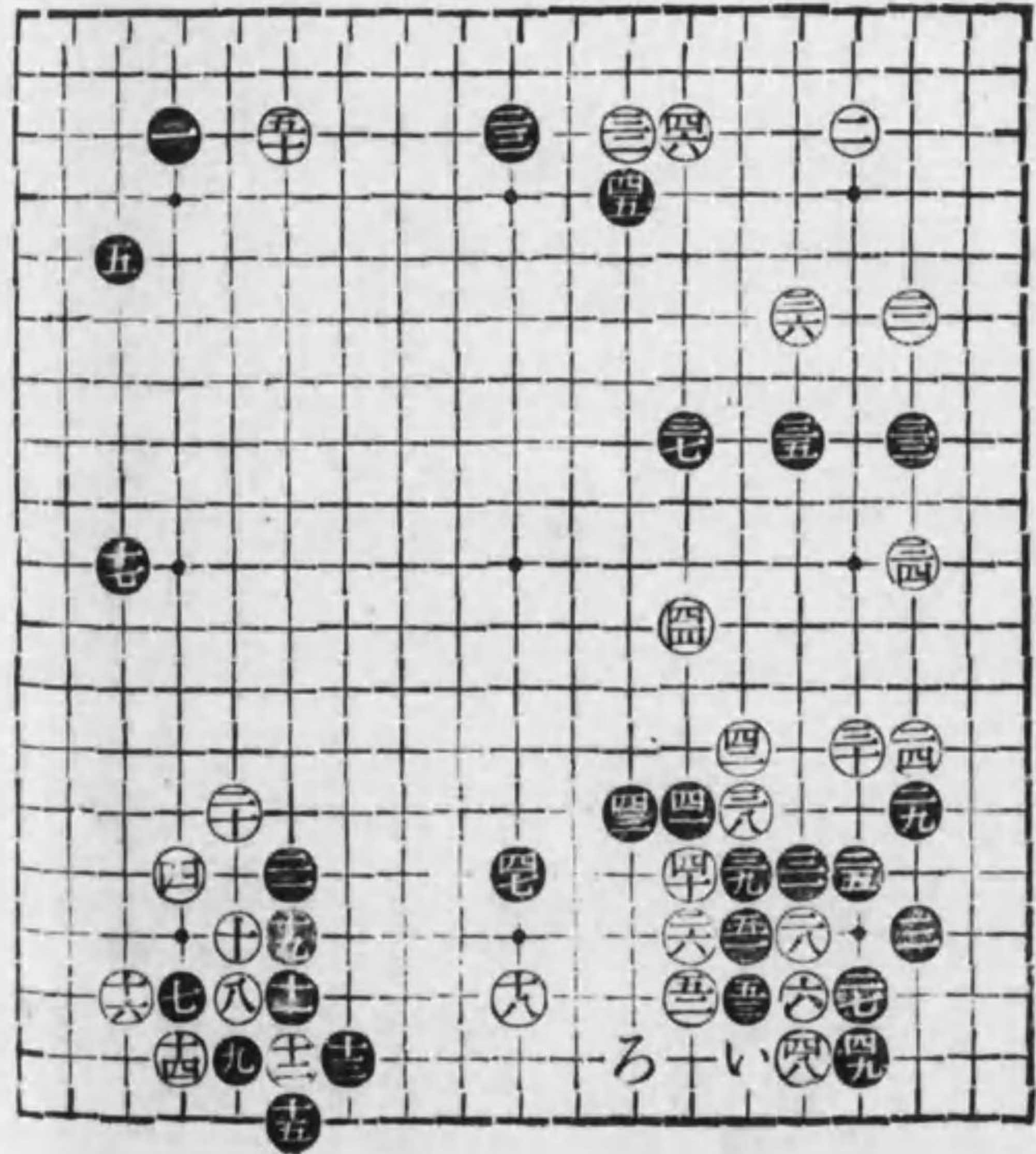
で前圖黒九の劫立ては上圖一が巧い。だが以下白四と成つて黒に面白くない變化。と覺えられよ。唐人といふのは昔清朝の人が江戸に来て時の名人に五子で打つた其人の事。



本譜は享和年間、七段井上春碩、五段小松快禪、快先番の一局で四劫が出来、無勝負に終つた。

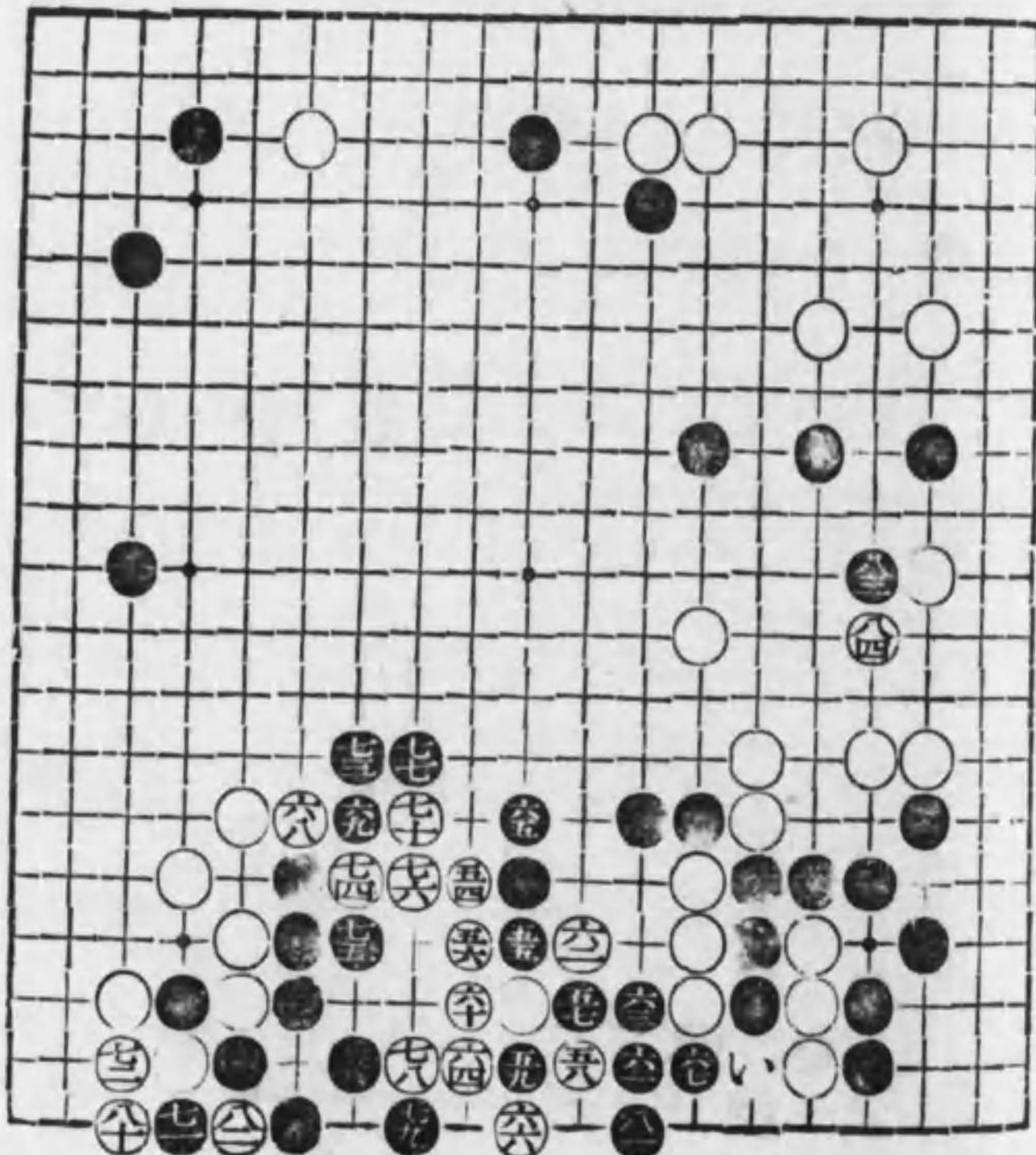
三劫が生じても無勝負、四劫は珍らしい事、大いに参考とならう、快禪は豪力無双

黒五十三は次に白五十四を(い)なら(ろ)で白を慶殺の計。



更に、白五十四を本譜(5)だと、黒六十一白六十七黒五十九で白危険此上もない。

で白五十四と其方へ轉じ以下白六十八は、黒六十七で白六十二以下七子取られた、即ち此方の黒丸黒六子奪取の復讐戦。それが以下黒八十五は七十一に劫取



本譜白八十六は懸命に駄目をツメ黒を攻立て。だが

以下黒九十三まで、即ち

八十七の方に劫、また八十

八の方に劫、なほ――

八十八より右へ三ツ目に

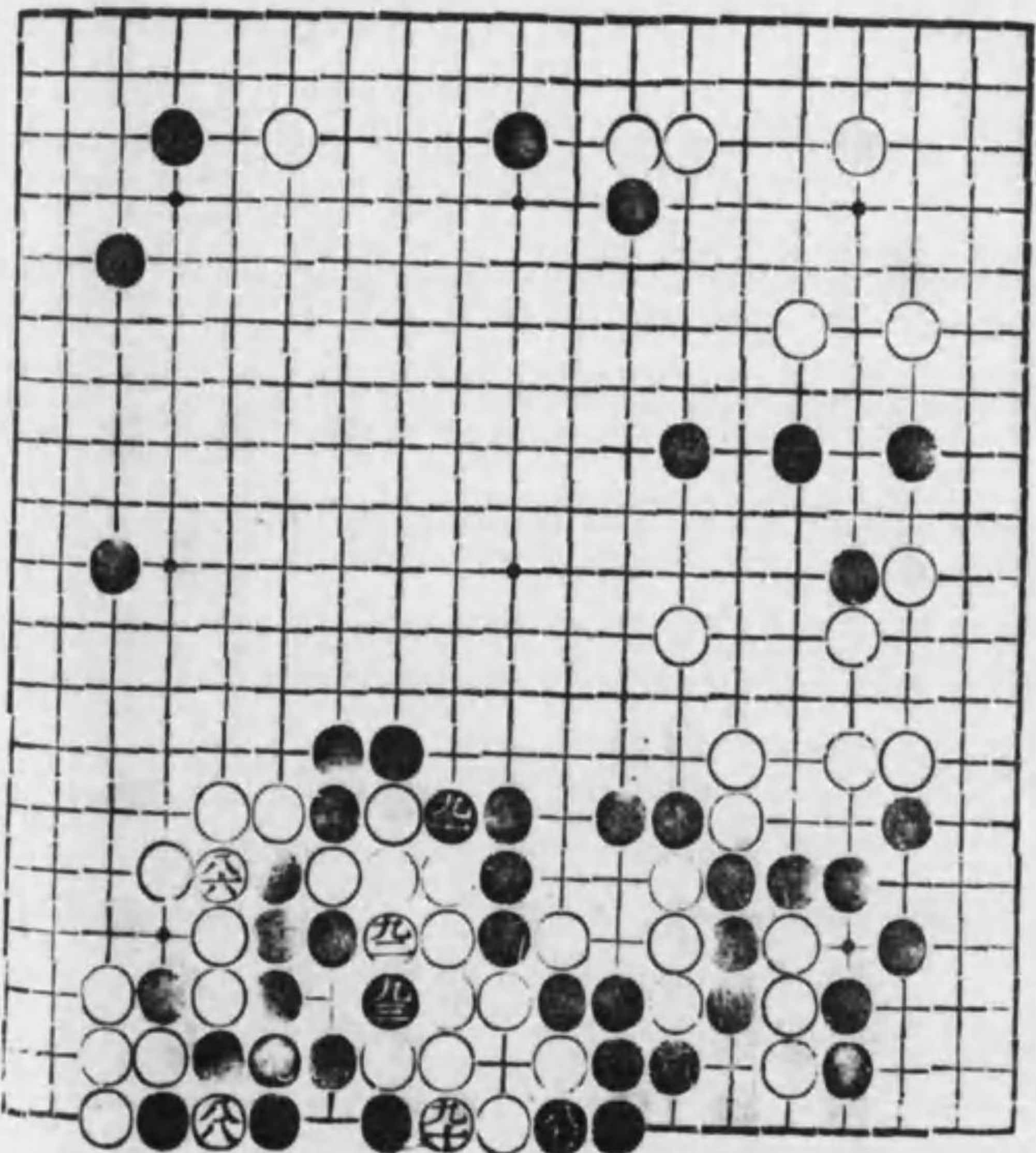
劫、また九十三の所に劫、

の四劫が出来。無勝負の次第。

第。

更に次譜によつて夫れは

明瞭。



明瞭とは白九十四黒九十

五、そして黒九十七なら、

白九十六で永劫永劫、解決

はつかないといふ譯。

處で白は七子右の方で取

られて普通なら白負け。

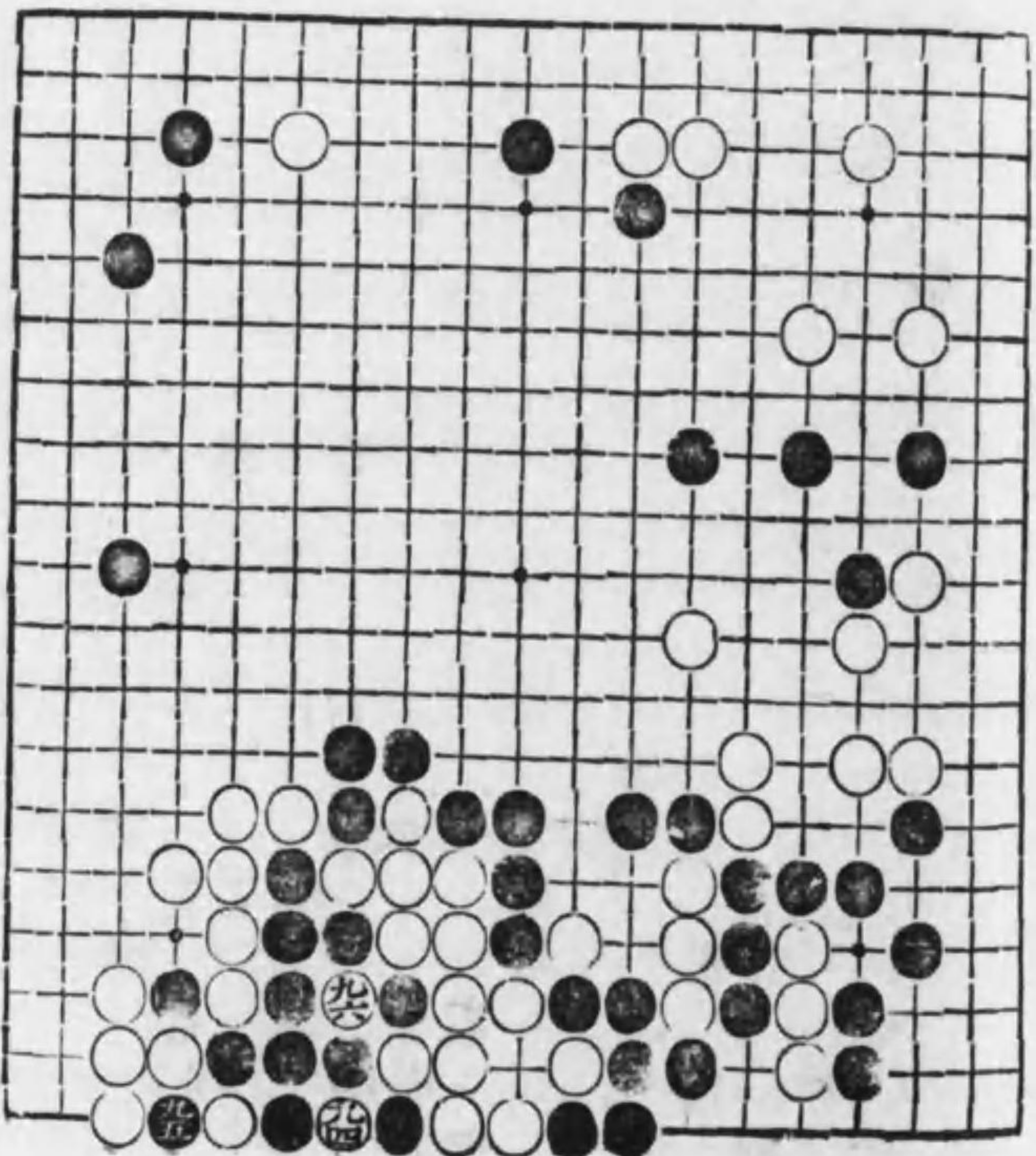
夫れを四劫で無勝負は、

白が大成功である絶妙の手

所。と覺えて貰ひたい。

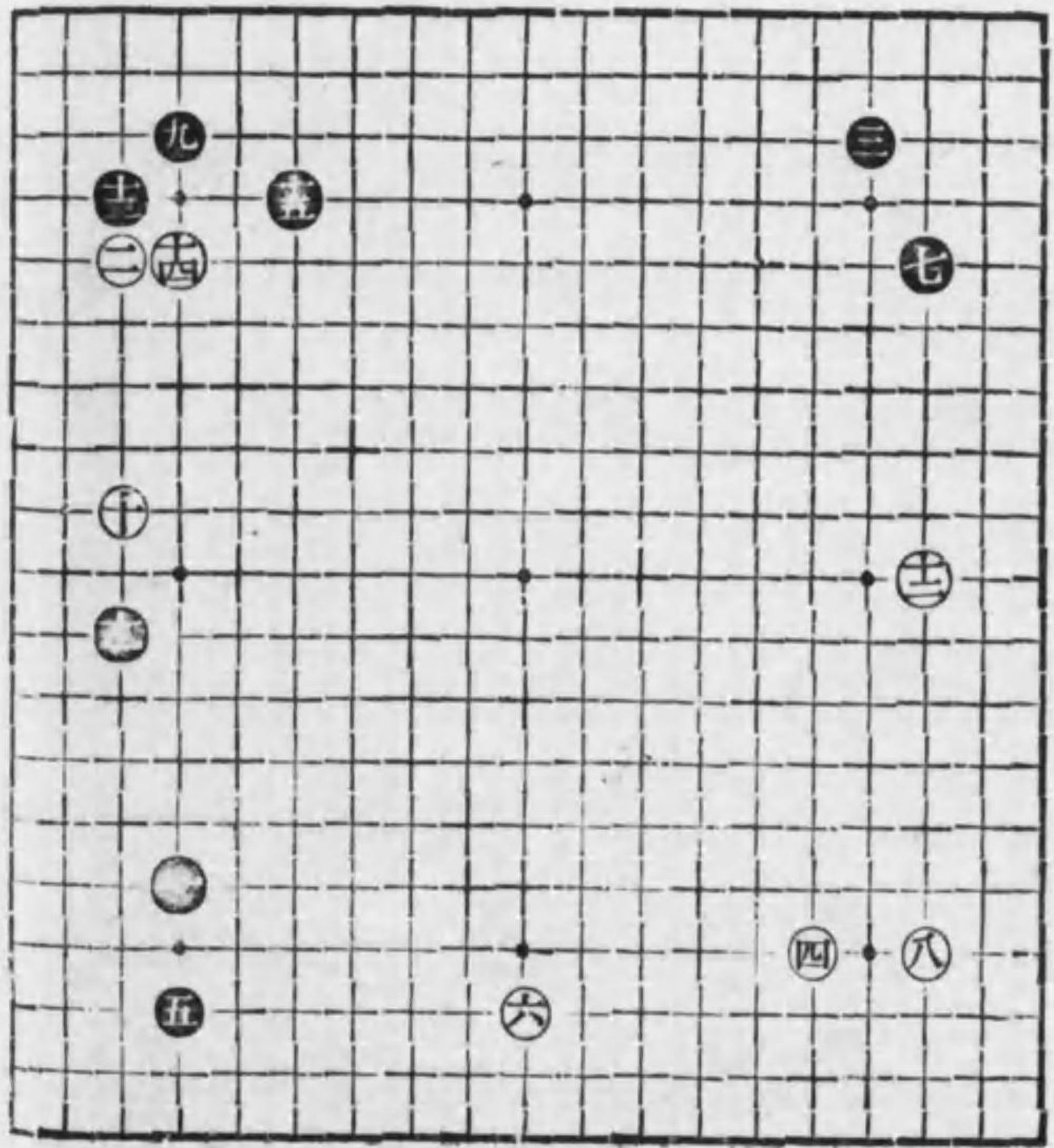
アハハと白大笑いの情景で

ある。九七劫取(九四の右)



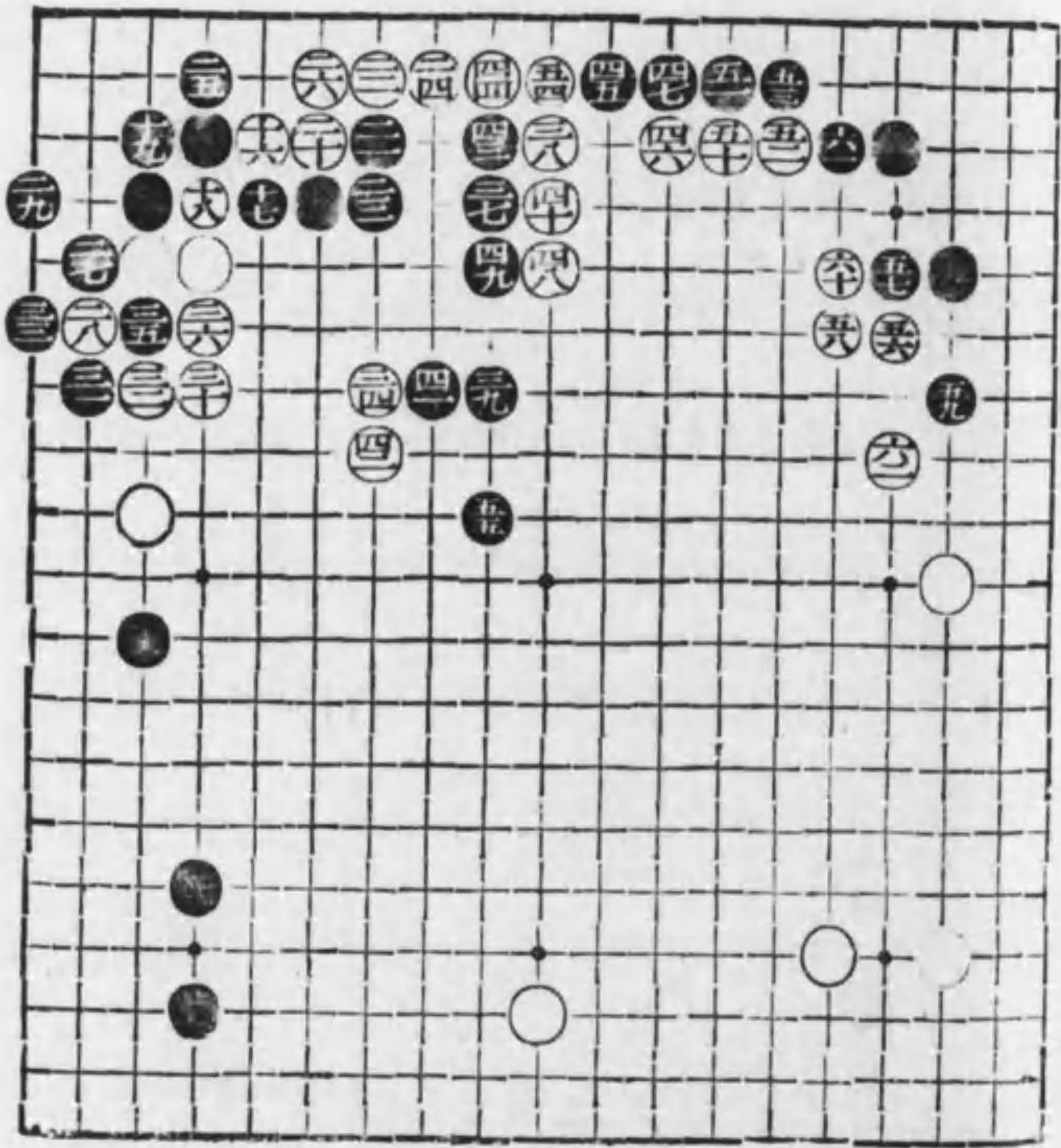
小松快禪は加賀國小松禪宗の僧で、當時素人仲間（なまかま）に鬼（おに）といはれ、それも豪力（ごうりき）無双（むそう）、快禪（かいぜん）と聞いて相手（あつて）が無かつた。等で――

快禪は霸氣（はき）満々（まんまん）、時の本因防列（ほんいぼうりつ）元（げん）に十番碁（じゅうばんご）を申込みそれが本譜（ほんふ）で勝負（しょうぶ）どころにづい（づい）手所（てどころ）がある。時に黒十三は――



黒が十の所に在れば十五と成つて三間挟みの定石（じょうせき）。白十と在る際は無理（むり）も無理（むり）ケイコ（けいこ）で度々（たびたび）先生（せんせい）に叱（し）られる所。

快禪豪僧（かいぜんごうそう）はそんな事（こと）には構（かま）はない、先づ以下白六十二までの進行（しんこう）である。殊（こと）に本因坊（ほんいんぼう）を敵（てき）に廻（まわ）して勇氣（ゆうき）凛々（りんりん）――



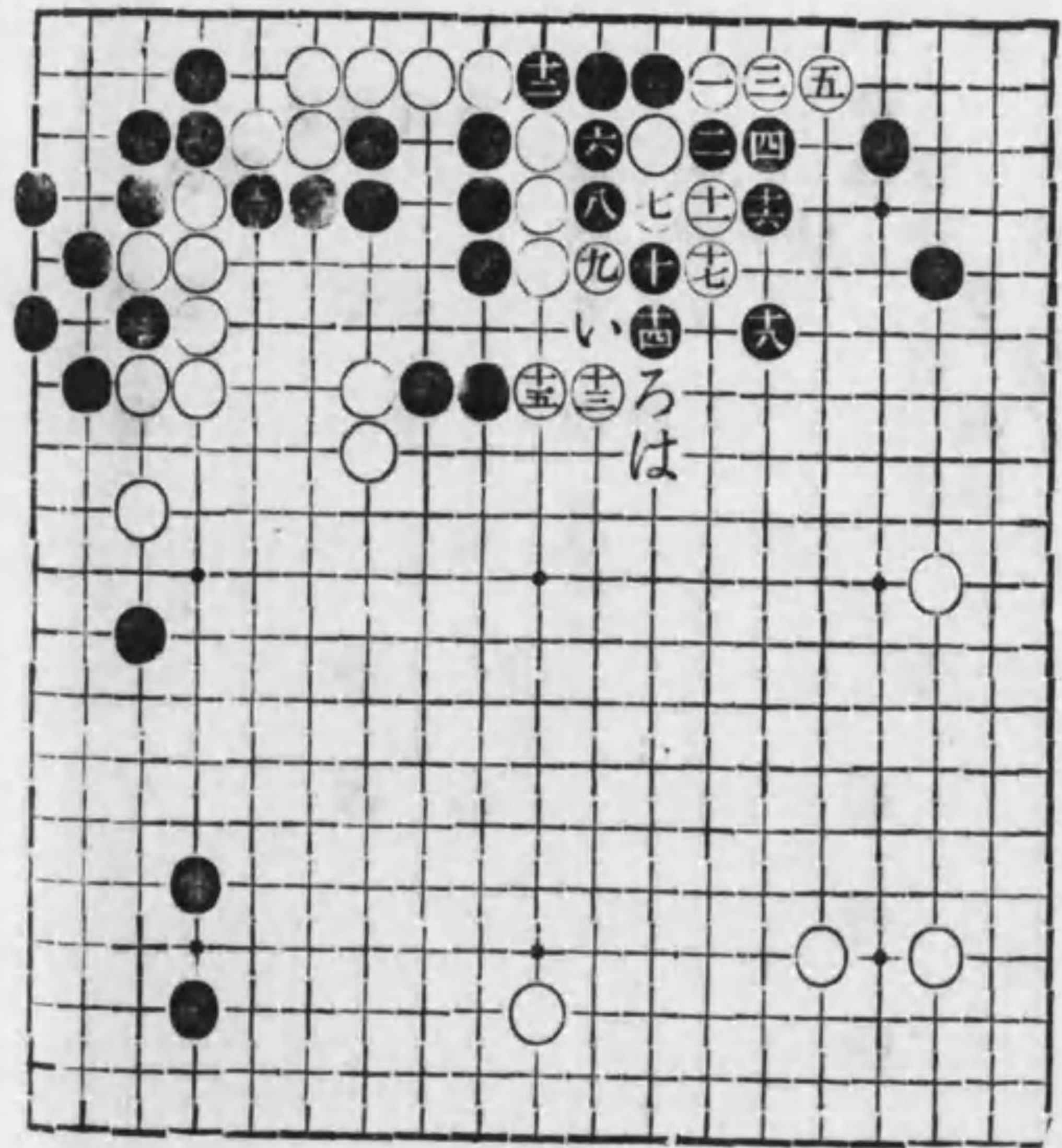
前譜白五十を五十一、即ち本圖白一だと、黒二以下

十八と成る白一舉大敗の手所である。

夫れが前譜黒四十五の白に根據を與えぬ強行手段。

なほ白十五を(い)なら黒

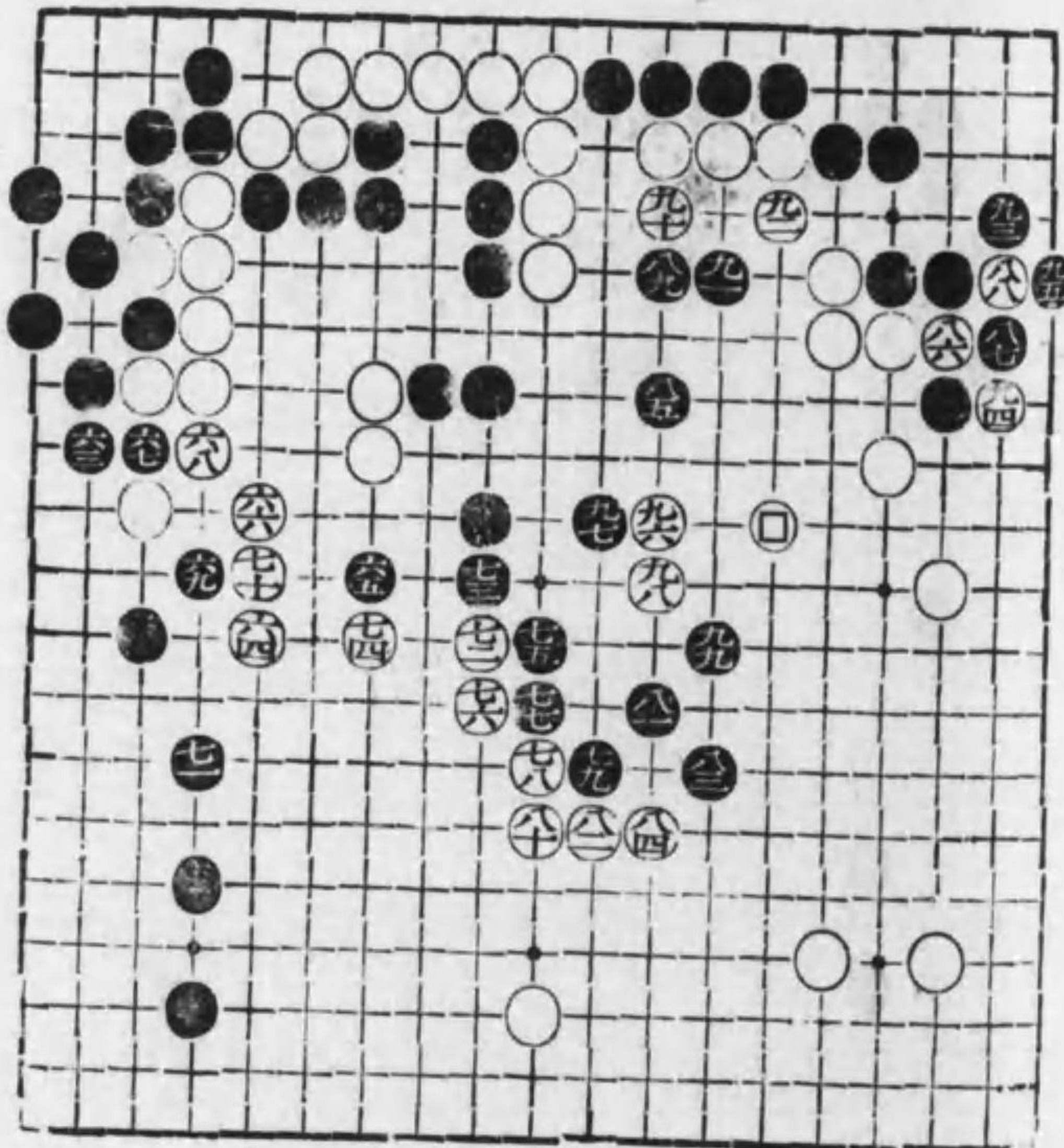
(ろ)白(は)黒十六白十七黒十八と白同様の運命。



さて今度は黒左側に六十三より、黒六十三は以下黒七十一と白を追撃し、なほ黒(い)で――

以下延長黒八十五まで。斯くて黒地全體六十目、黒優勢の次第であらう。

等で白九十六と白は黒塵殺に轉じ、今や天下分目の大會戦。



前譜黒九十三を本圖黒一

の方だと――

以下黒十三と成つて白十

の所が白大強化

で中央の黒大部隊に脅威

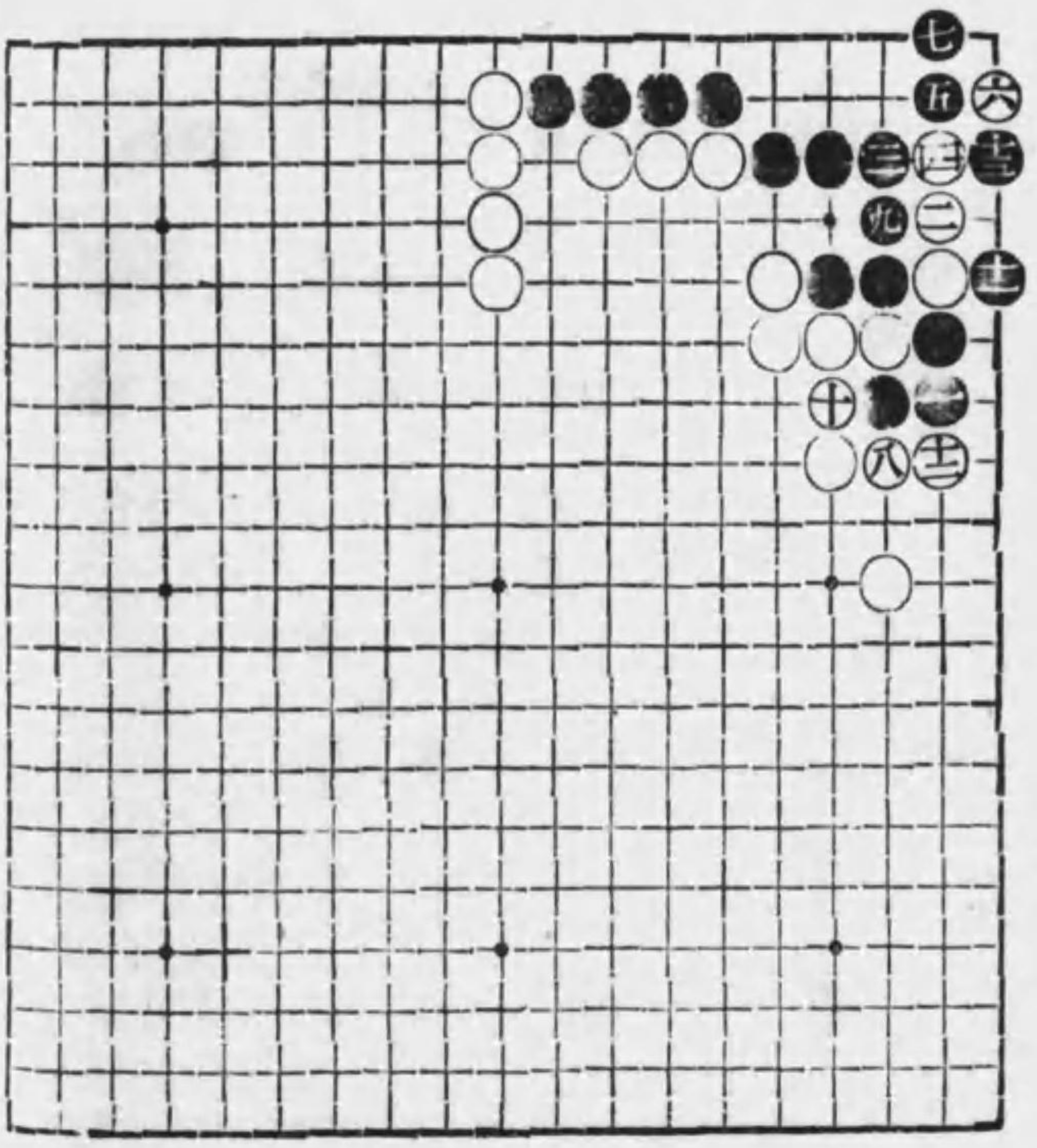
それが黒九十三を即ち本圖

二の所であつた。

が前譜白八十六、八十八

は好機會である巧い手所。

と味到参照せられよ。



本譜は見易く更に黒一よ

り、黒一以下十一は白模様

削滅に加へて自己活計の爲

また黒二十五は白二十六

を二十七と受させ、黒二十

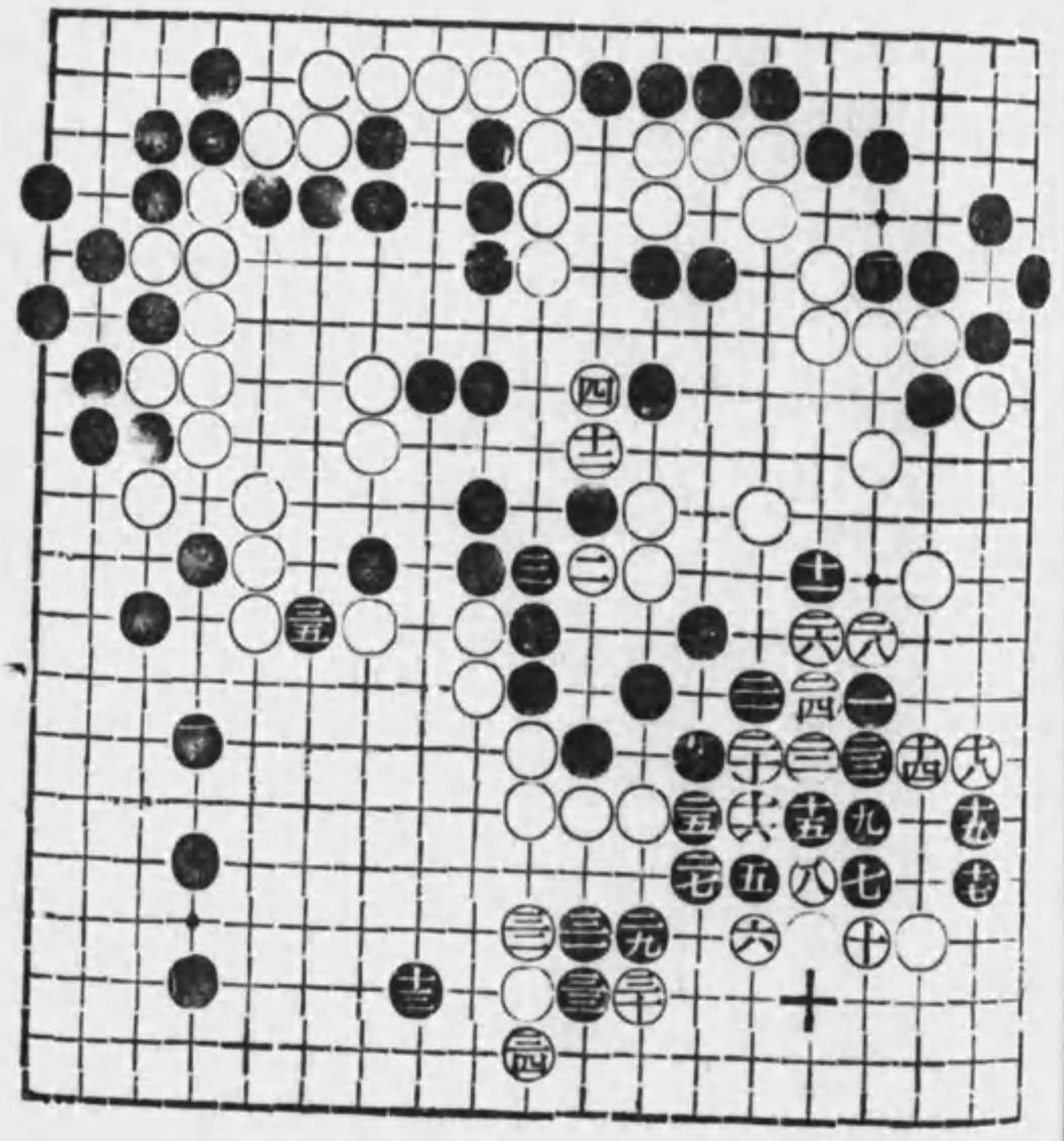
六の考へ。

以下白三十四までは其黒

の意中を行かない微妙な動

きで大變化。だが黒三十五

實に此一手――

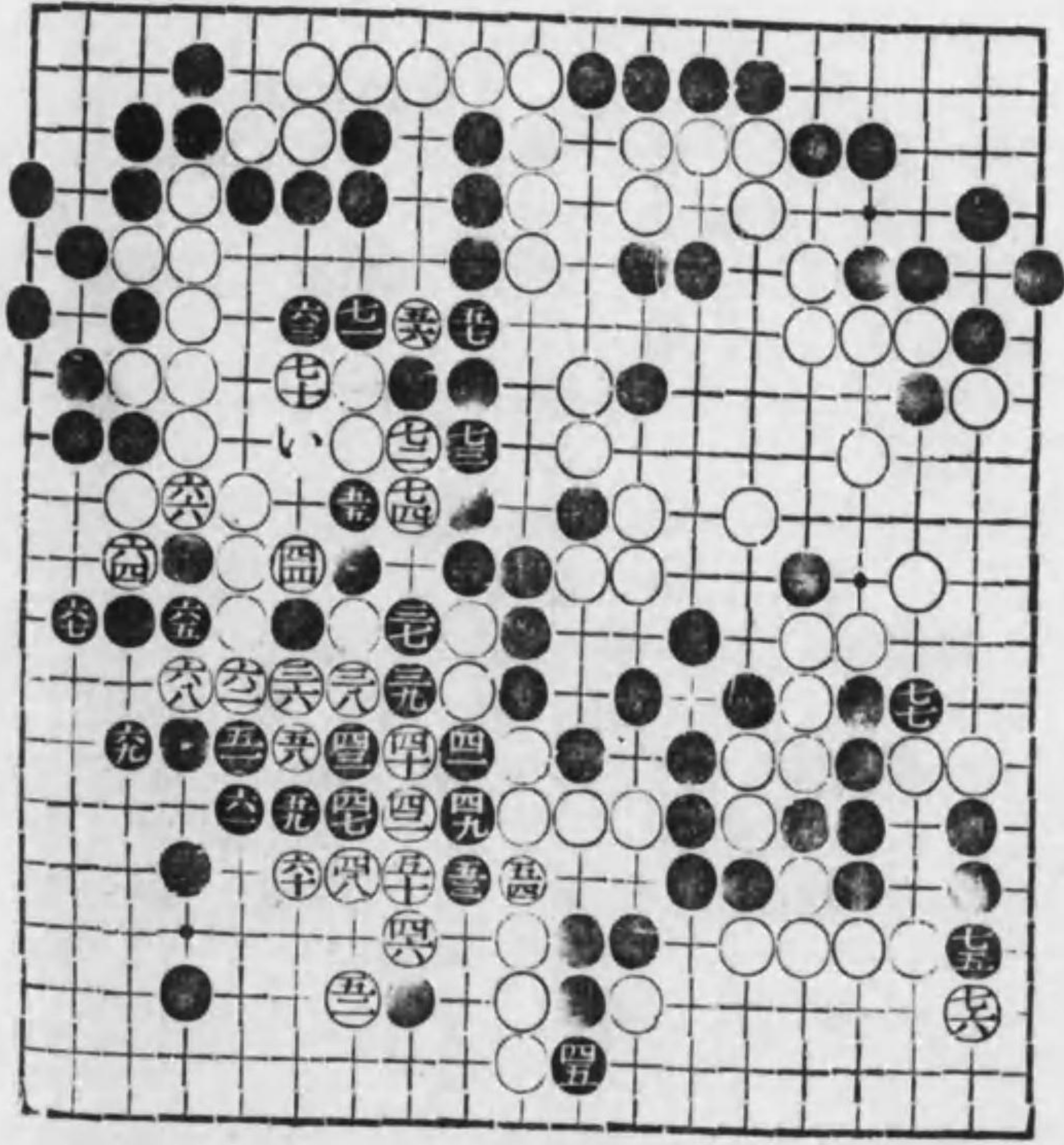


前譜黒三十五の一手に白は七十の方、また五十二の方と二分に活かされ――

白七十四を手拔だと、黒(い)で白は全滅。で残る問題は一――

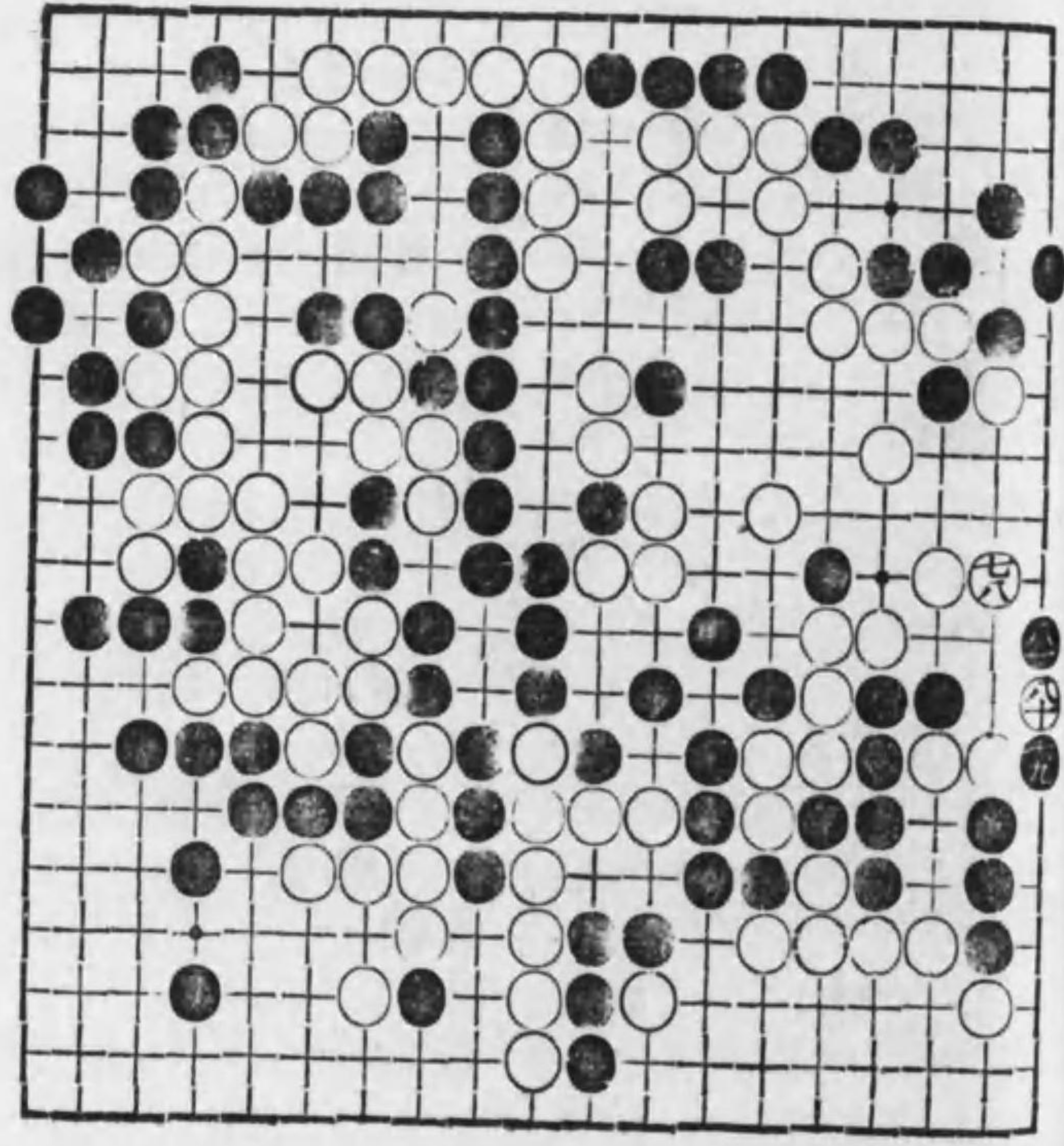
黒七十五、七十七と轉じた此方。

即ち決勝點。黒は此處まで見透し剛力無双。さて白に妙手は――



無い、即ち白七十八に黒七十九が絶妙の活點。次に白八十でも黒八十一といふ譯。

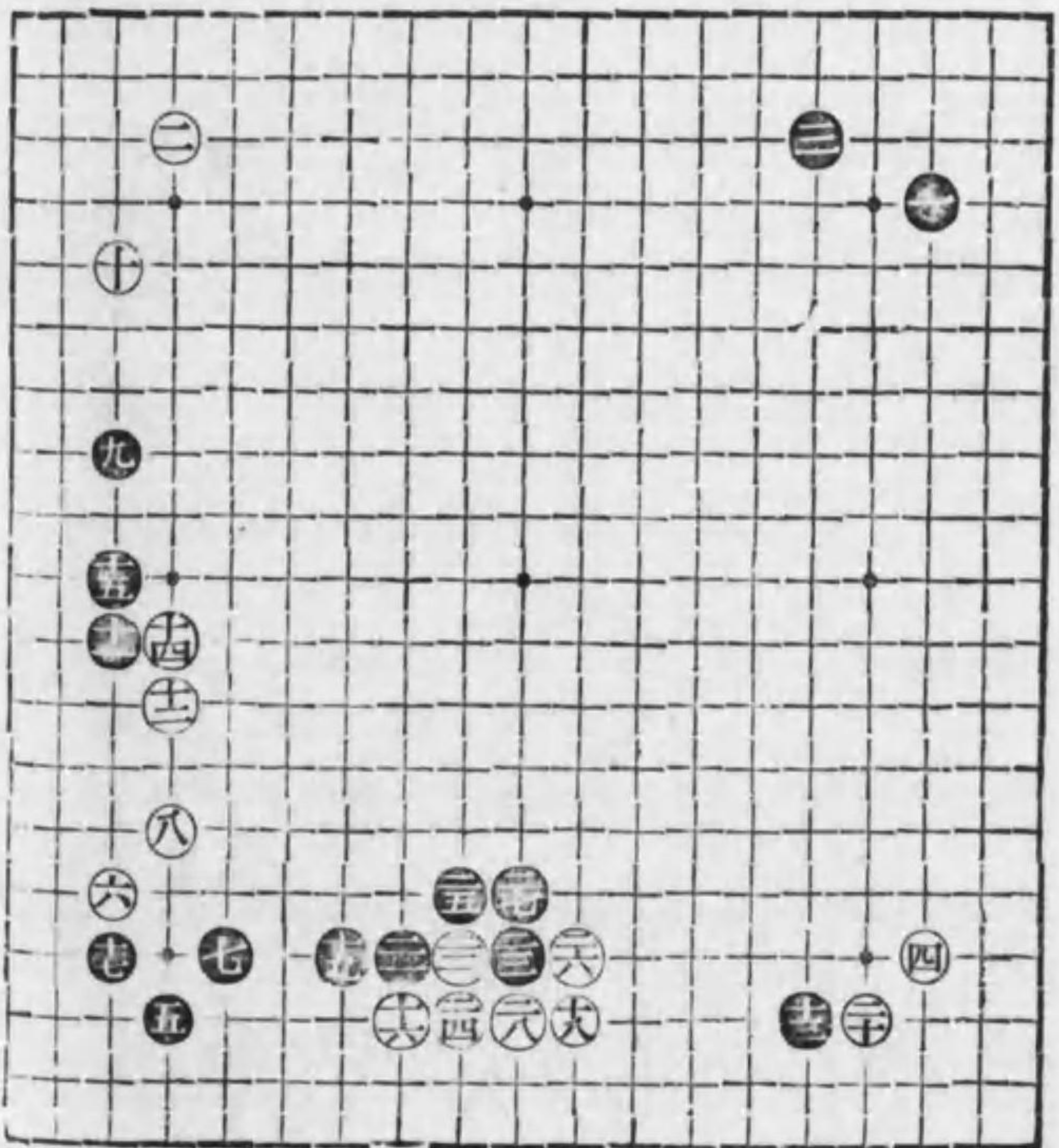
快禪は第一局に勝ち意氣衝天と傳えられ、斯界は騒然だともある。さもあらん實は尙數十手打つたが前譜黒七十七で黒勝。後はさして觀點もないから省略した。



なんでも快禪は此十番碁
全勝、一躍斯界の王座、と
豪語もある。

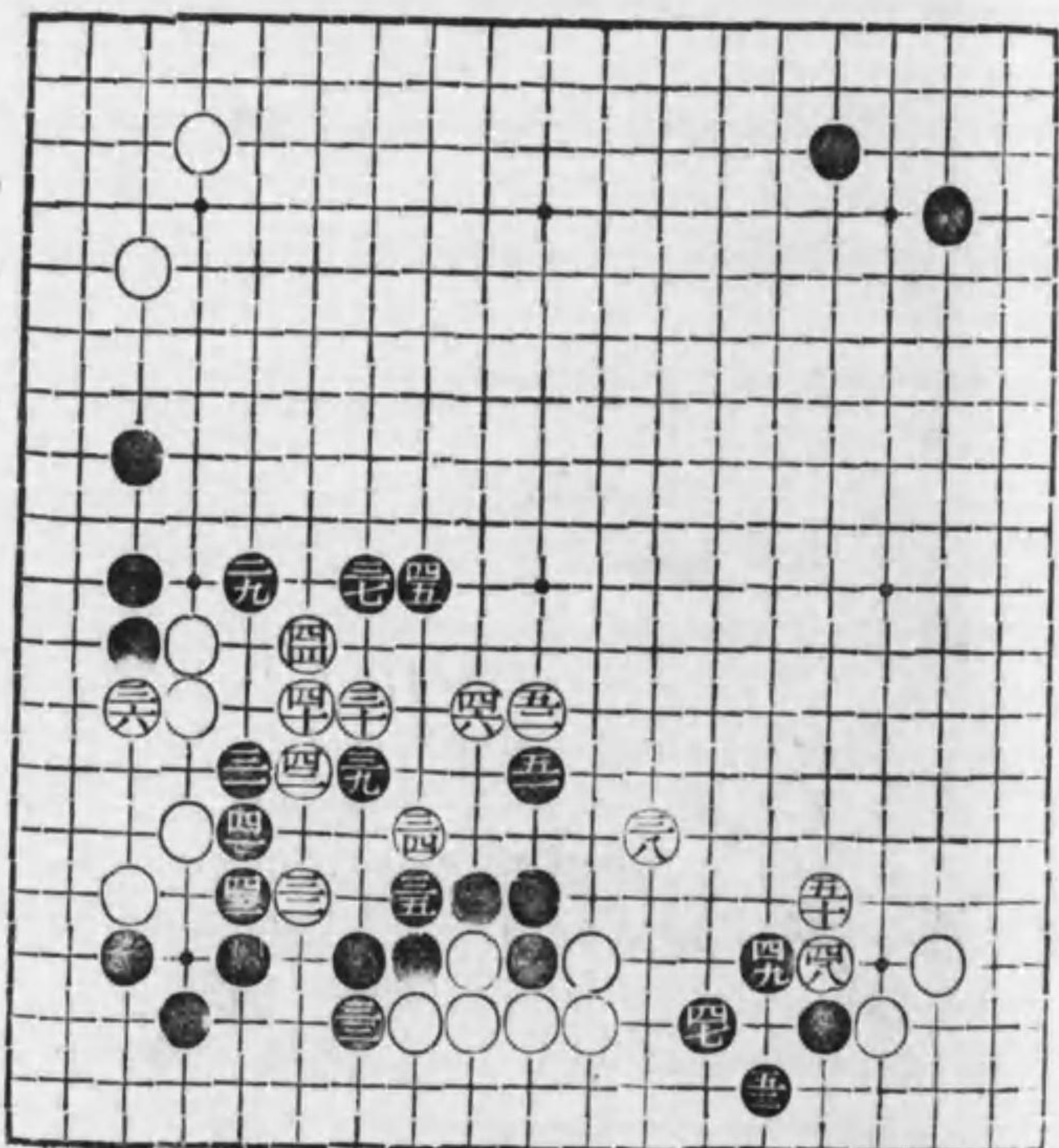
處が今度は本因坊にも對
策なつて快禪の大力發揮を
風に柳

それが先づ黒二十三に白
二十四を二十五だと黒二十
八で事メンドウ。で白二十
八迄が風に柳、腕力自慢の
八に巧い工夫である。



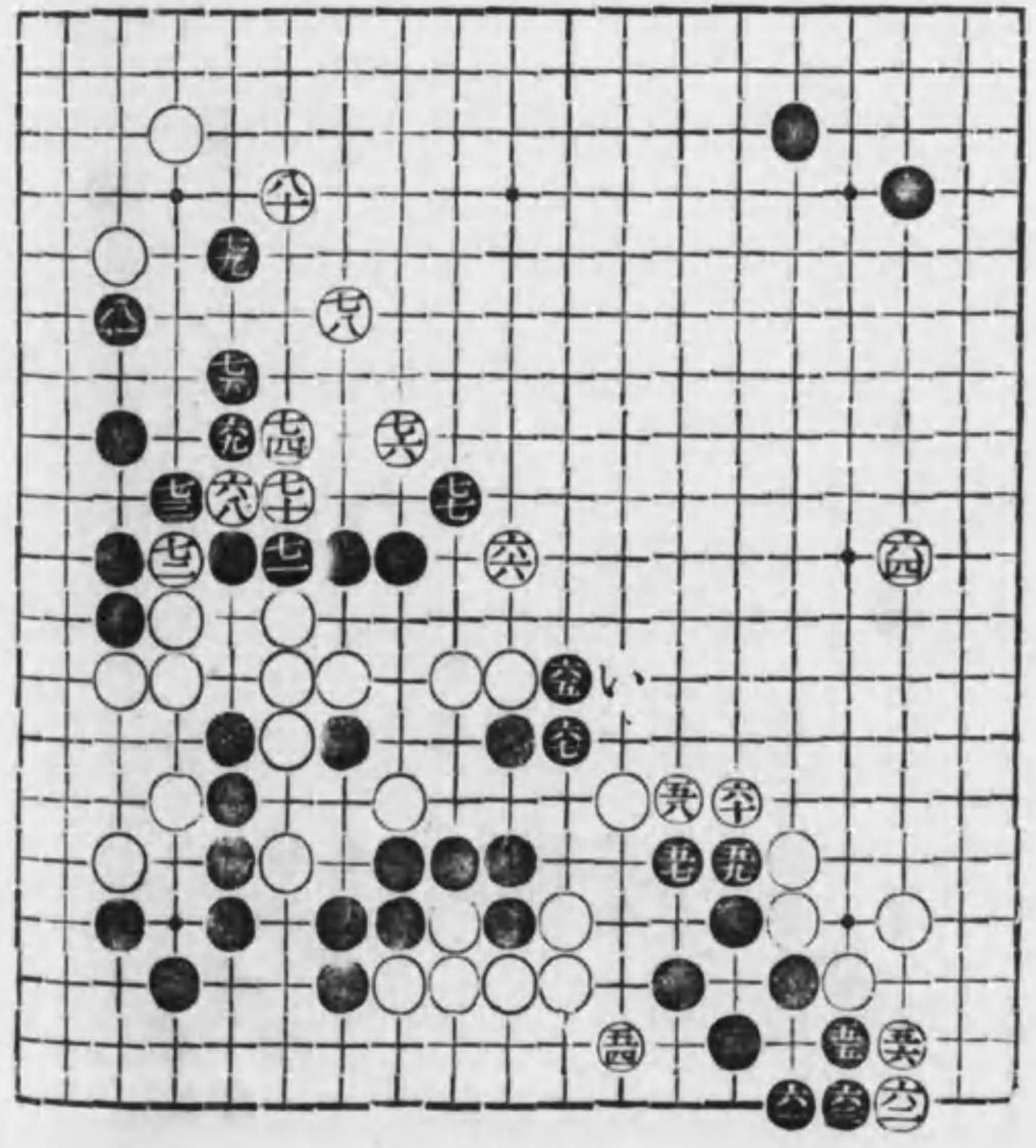
また黒二十九も其方の白
丸四子奪取の計。

だが以下白三十六と此れ
にも白は風に柳、殊に黒三
十七の追撃に白三十八と一
共處で三十六以下に聲援
何と巧い手所、即ち白四十
六迄の脱出に明瞭である。
等で黒暫時中止か轉戦四
十七の方。



白五十四は強いて其黒を
 取りに行かない、夫れは以
 下黒六十三と黒を眼二ツ、
 をして白六十四で形勢白に
 良好。といふ明朗振り。
 黒の立場は六十三で窮命
 の態。

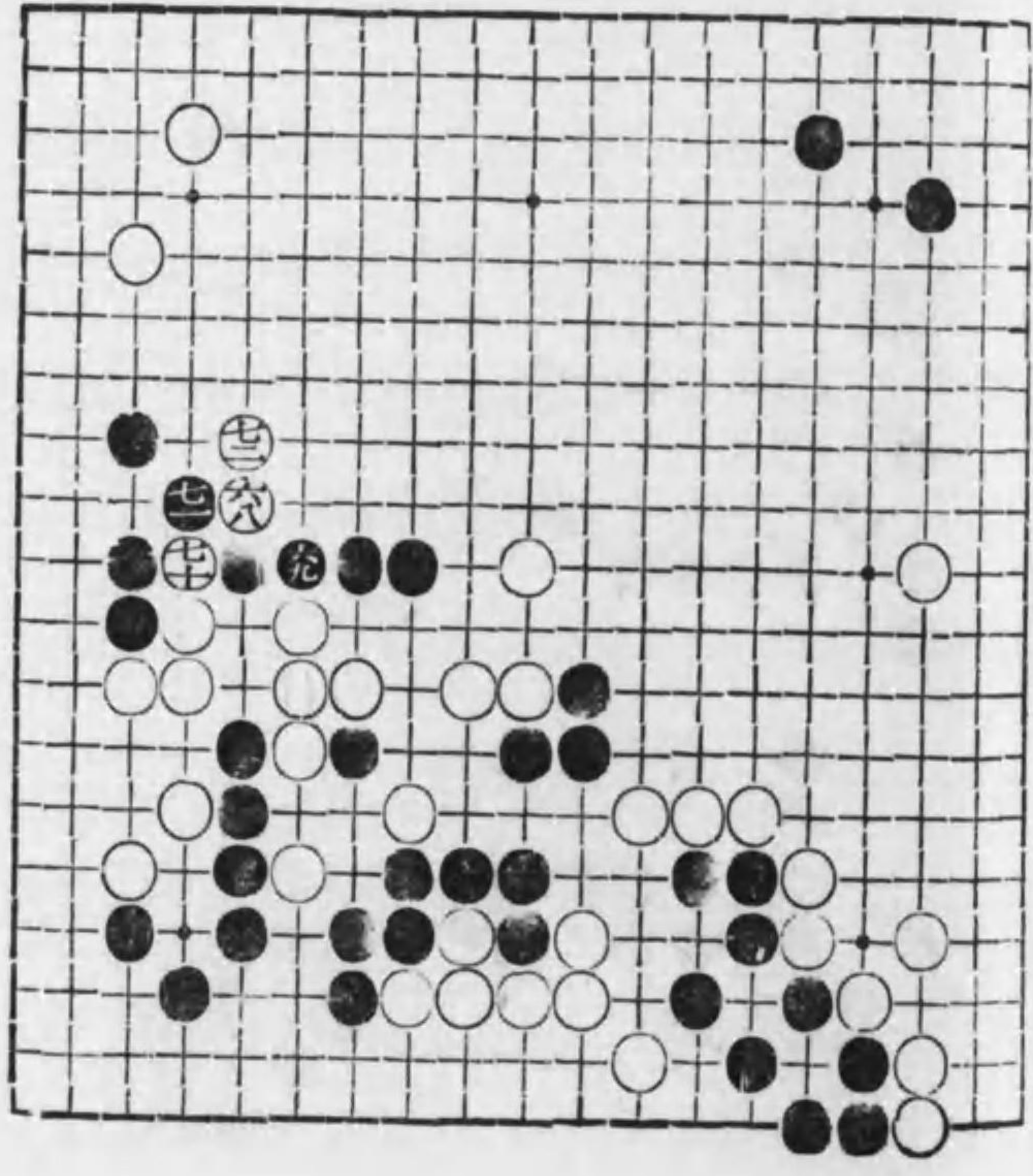
黒六十五は白(5)と白に
 出を止められるからもあり
 なほ白六十六以下奪取待望



前譜黒六十九を本圖六十
 九だと――

以下白七十二と成つて、
 前譜の様に黒七十五迄の好
 姿勢とは成らない。即ち――
 前譜黒六十九は巧い手所
 であつた。

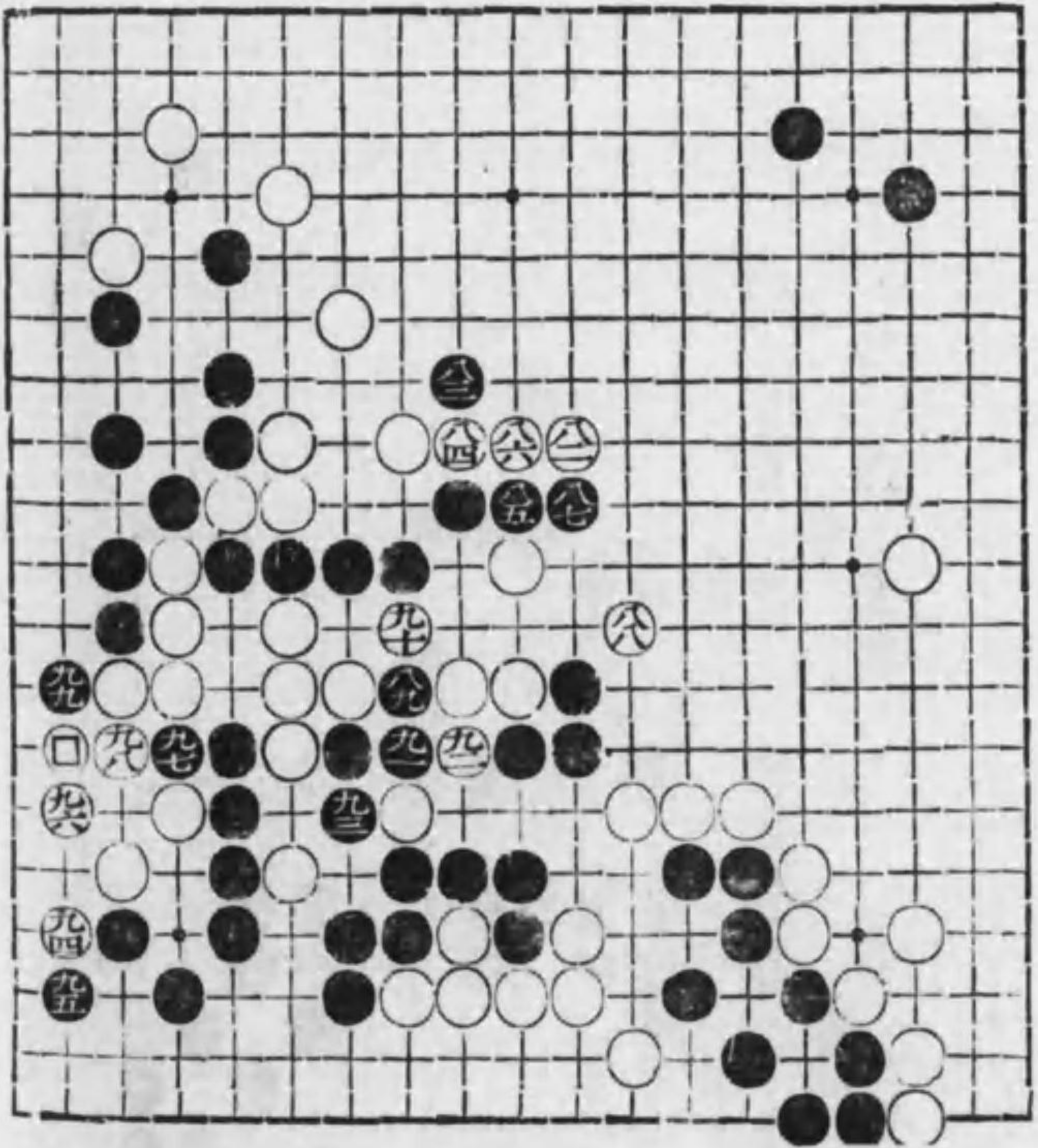
と大いに讃辞を呈してお
 かう、そのへんが初段どこ
 ろの手所。



白八十二は其黒丸五子を
フンワリ煽つて何處かへ落
着かせやう、怒らせぬがい
い。なんて態。で——

黒八十三に先づ白八十六
迄、また黒八十七に白八十
八とお客あつかひ。黒は癩
に觸つたか、夫れが黒八十
九と白を切斷。

處で白九十——

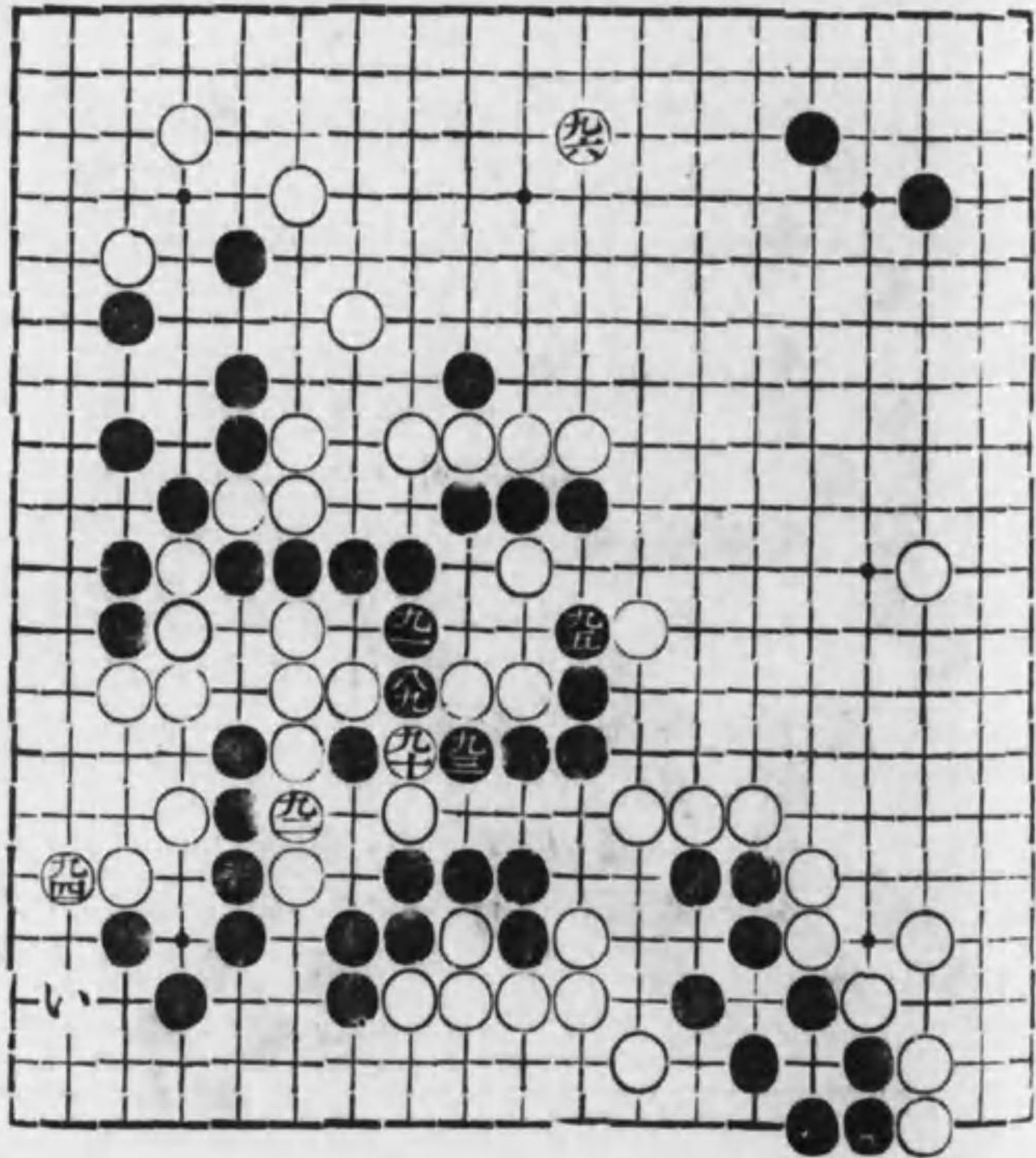


白九十は本圖九十がいい
のである。

即ち以下先づ白九十四で
(い)の飛込みも残して安定

第一白九十四で九十五も
白に危険は無い。が黒九十
五白九十六と成つても斷然
白優勢。

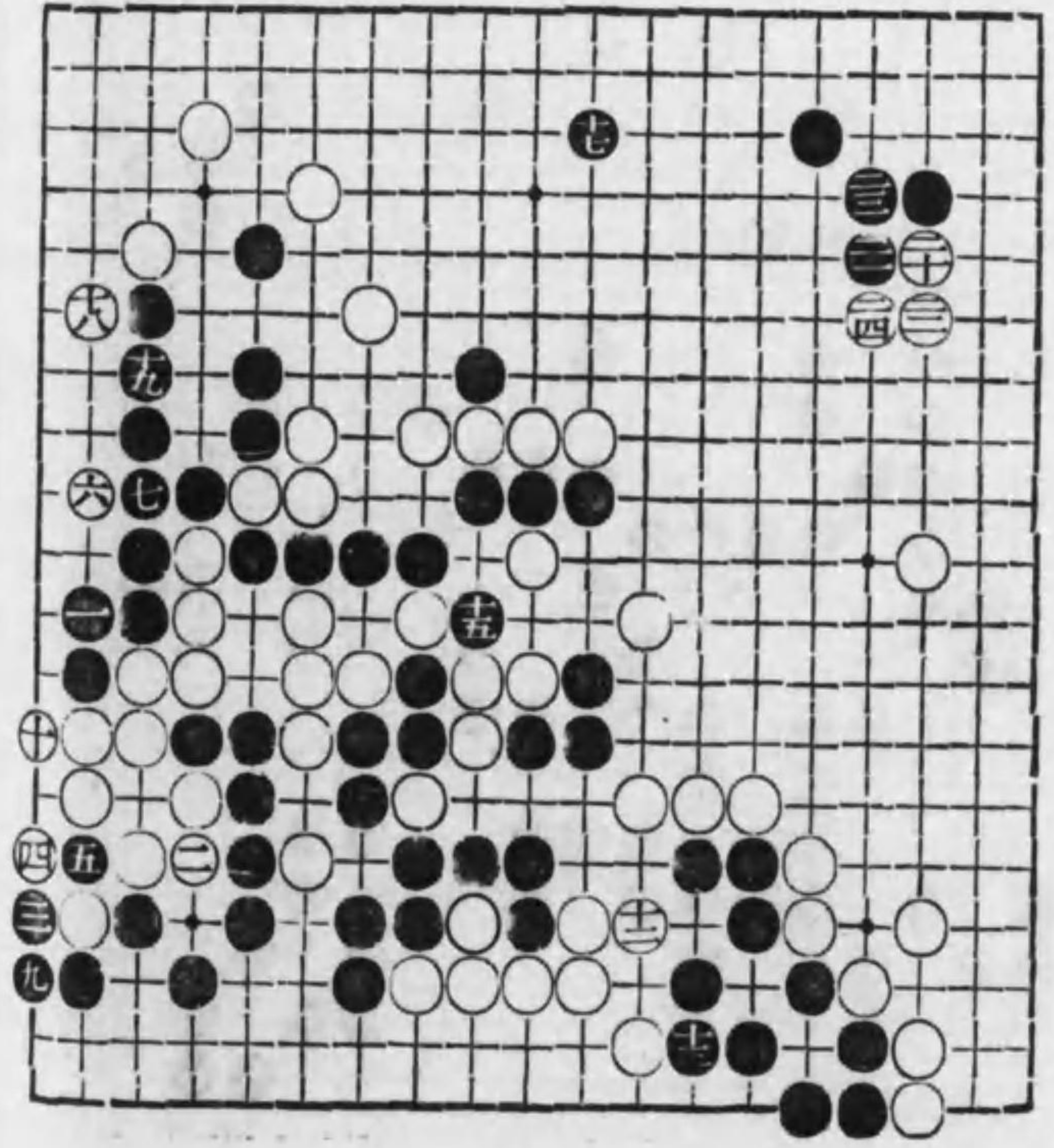
白九十は一寸慌てた氣味
と觀られやう。上手にも失
策。



黒一以下五に白六黒七そ
して白八は五の下に劫取。
に黒九は白十黒十一劫取
で即ち黒九は氣樂の巧い花
見劫。

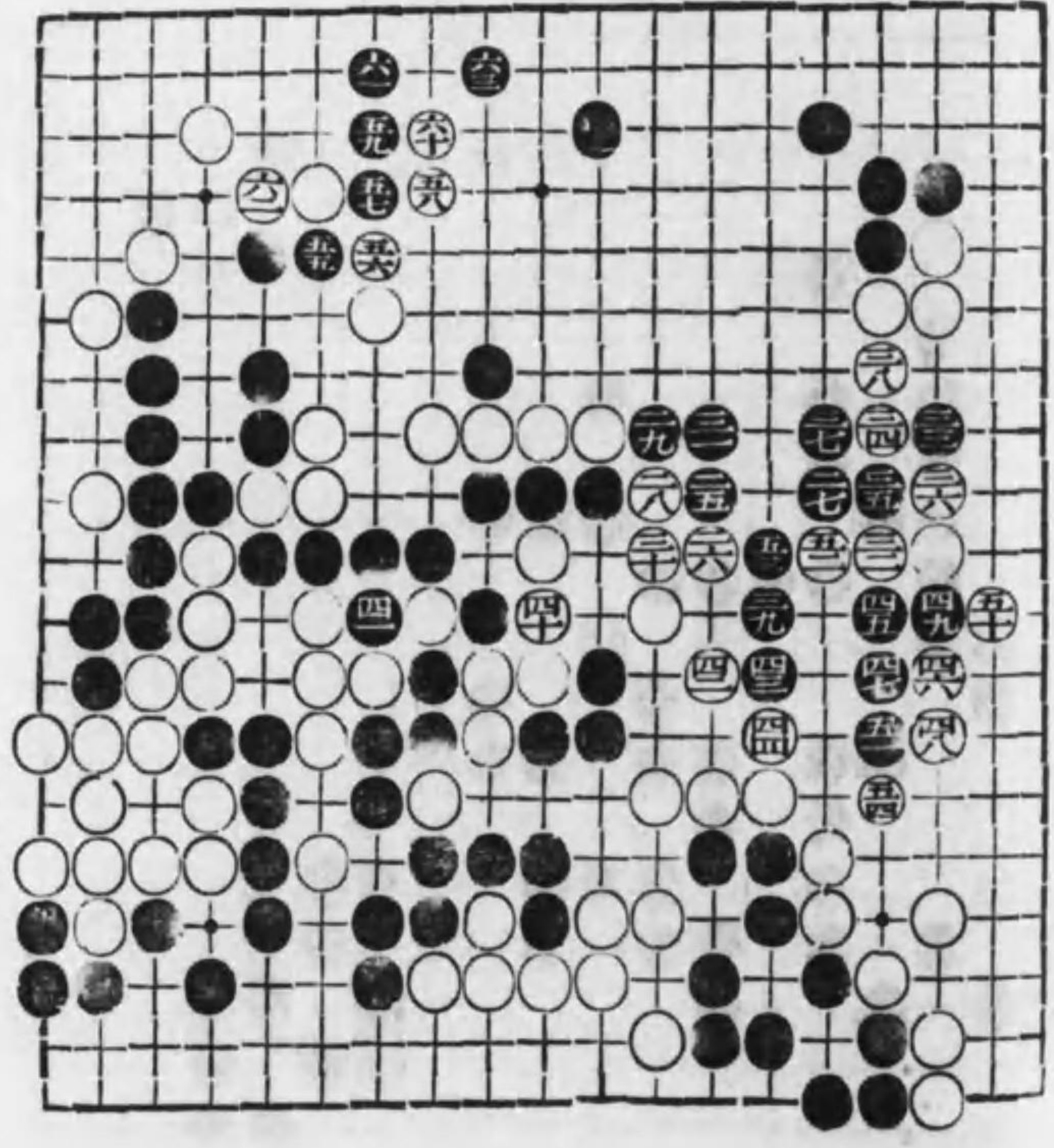
次に白十四は劫取、に黒
十五は白十六を五に粘がせ
黒轉じて十七で悪くない考
へ。

さもあらん前參考圖白九
十六迄より、黒い現はれ



さて黒二十五は白二十八
と白に止められぬやう侵入
だが、以下白五十四迄と相
手にされない。夫れは——
右側に白地確定四十目と
も見越され、即ち白優勢の
次第。

さればと黒轉戰五十五よ
り六十三迄、無論白六十以
下奪取の霸業。で最後の血
戦。

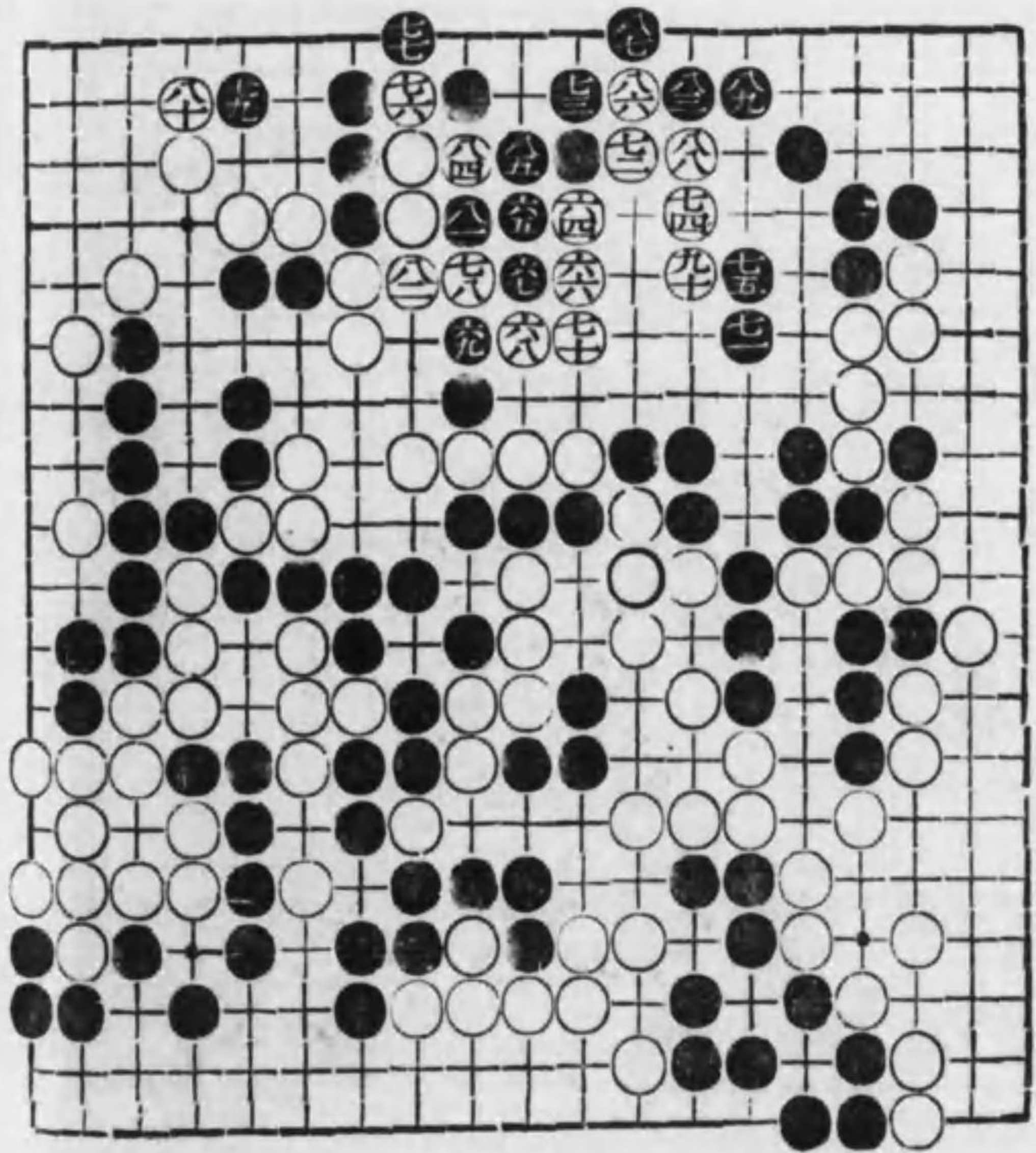


黒は血戦決戦だが、白の立場は白六十四以下九十で白活き。と同時にいとも易い決定白勝。處で——！

白は此優勢に認識を欠き何れかの黒を獲らう等は、謂ふところの目茶な暗仕合

い。

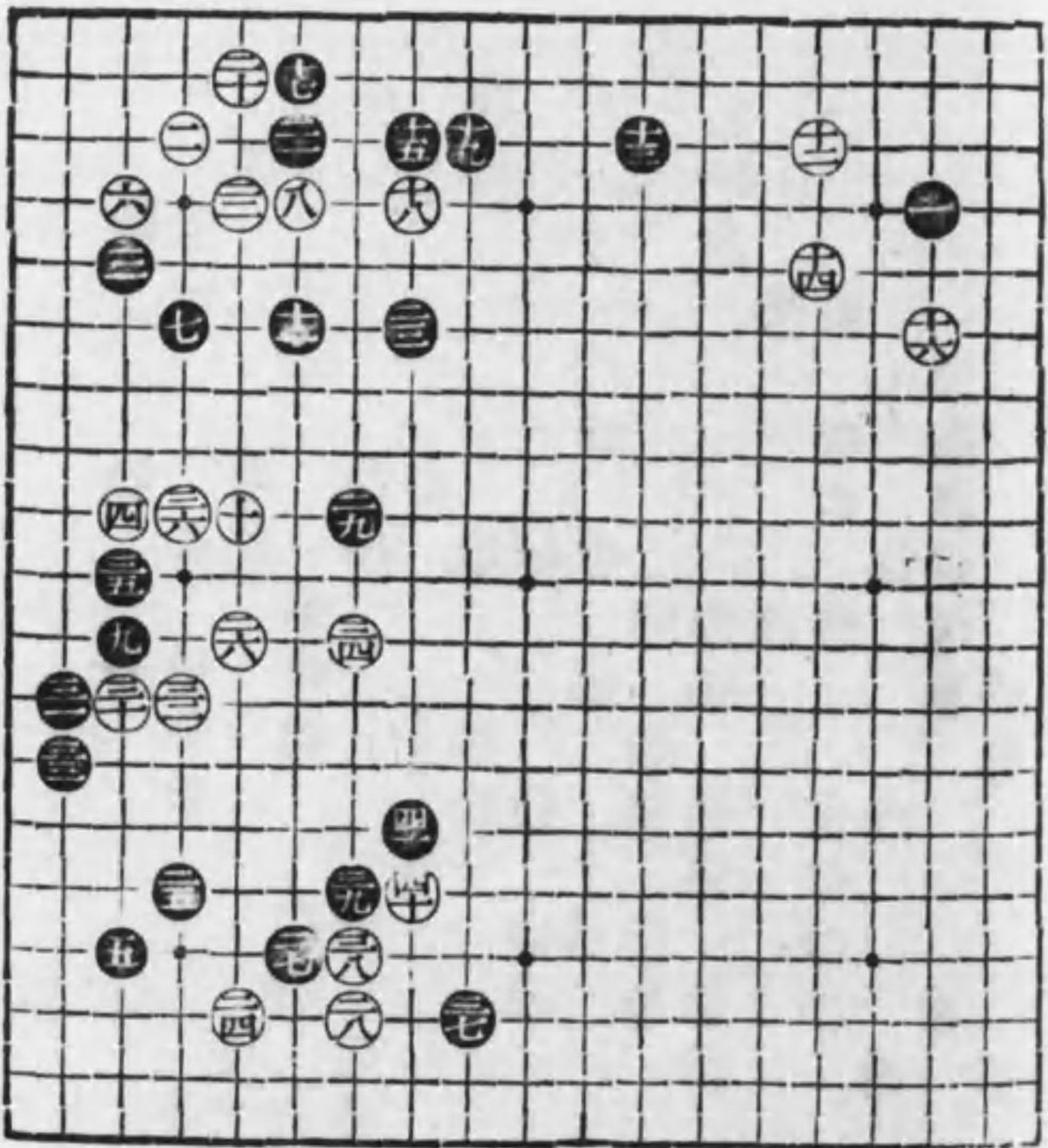
本局は白に巧くしてやられた。白六十四が禮讚の一手。



快禪は増上寺に寄宿の故に多くの僧が今でいへば頭張れ頭張れ——の態で席に居て本因坊は閉口とある。

黒二十九また四十一と白に強襲の時は、最も緊張の席上——

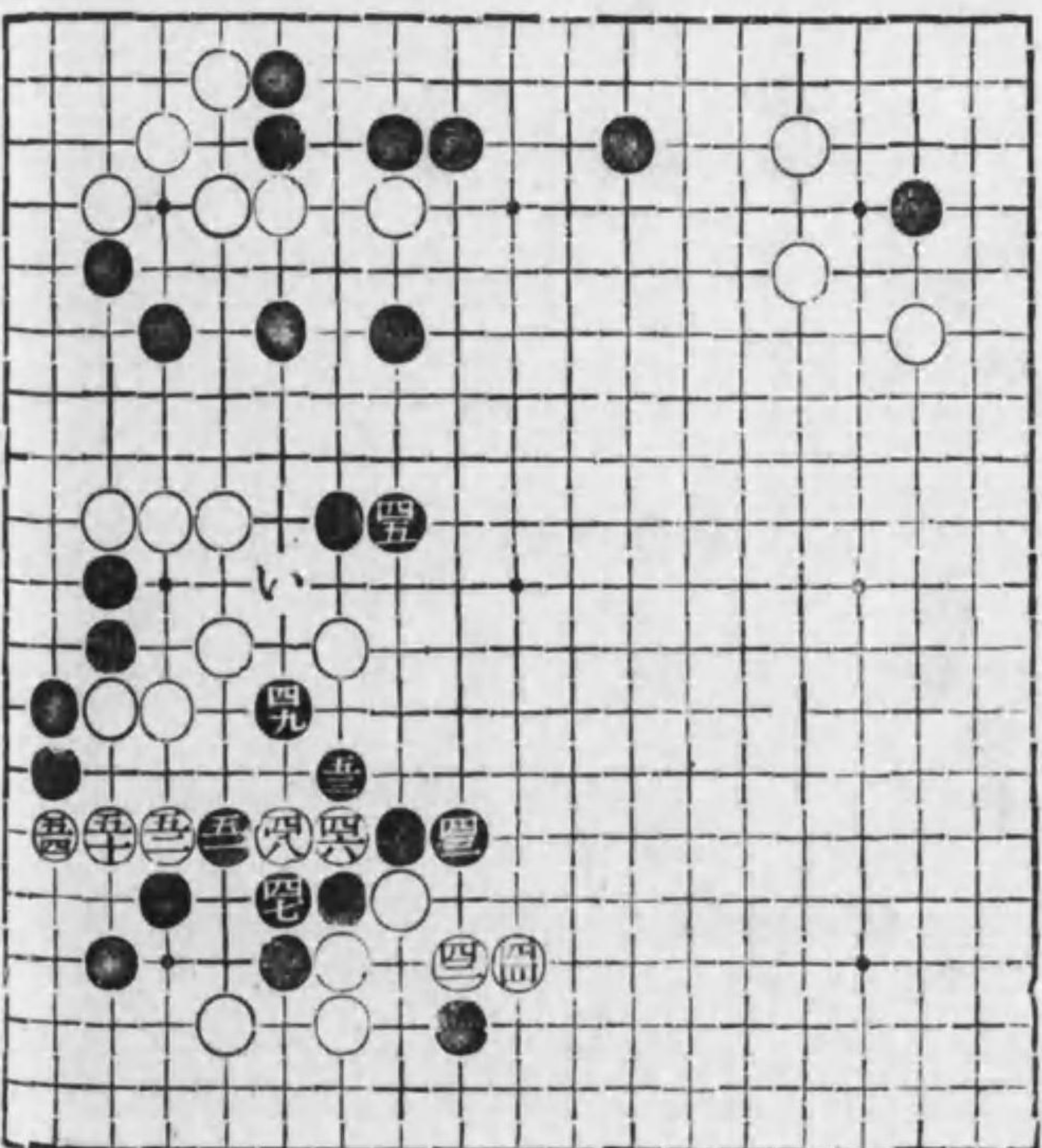
と當時のさまがしのばれもし、實に面白い場面展開本因坊の名案、風に柳は何と。



黒四十五は(い)と白を切
斷待望、大謀である。

それに黒四十五は上の黒
丸四子、即ち黒二十三以下
をも強化、何と厚い手所旨
い一手ではある。

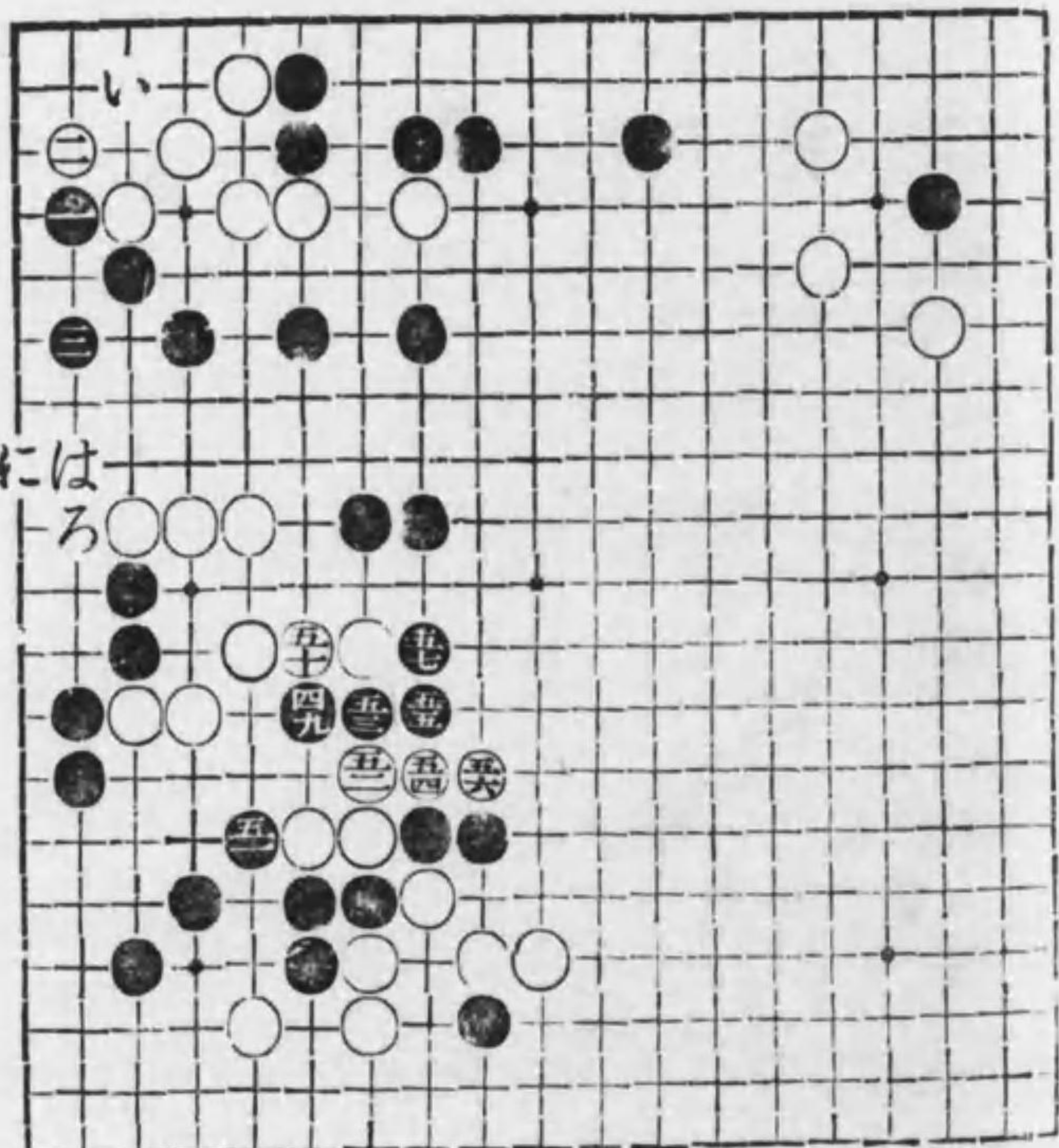
等で以下白五十四と變化
で黒惡果の様だが是れから
が黒大飛躍の觀點。



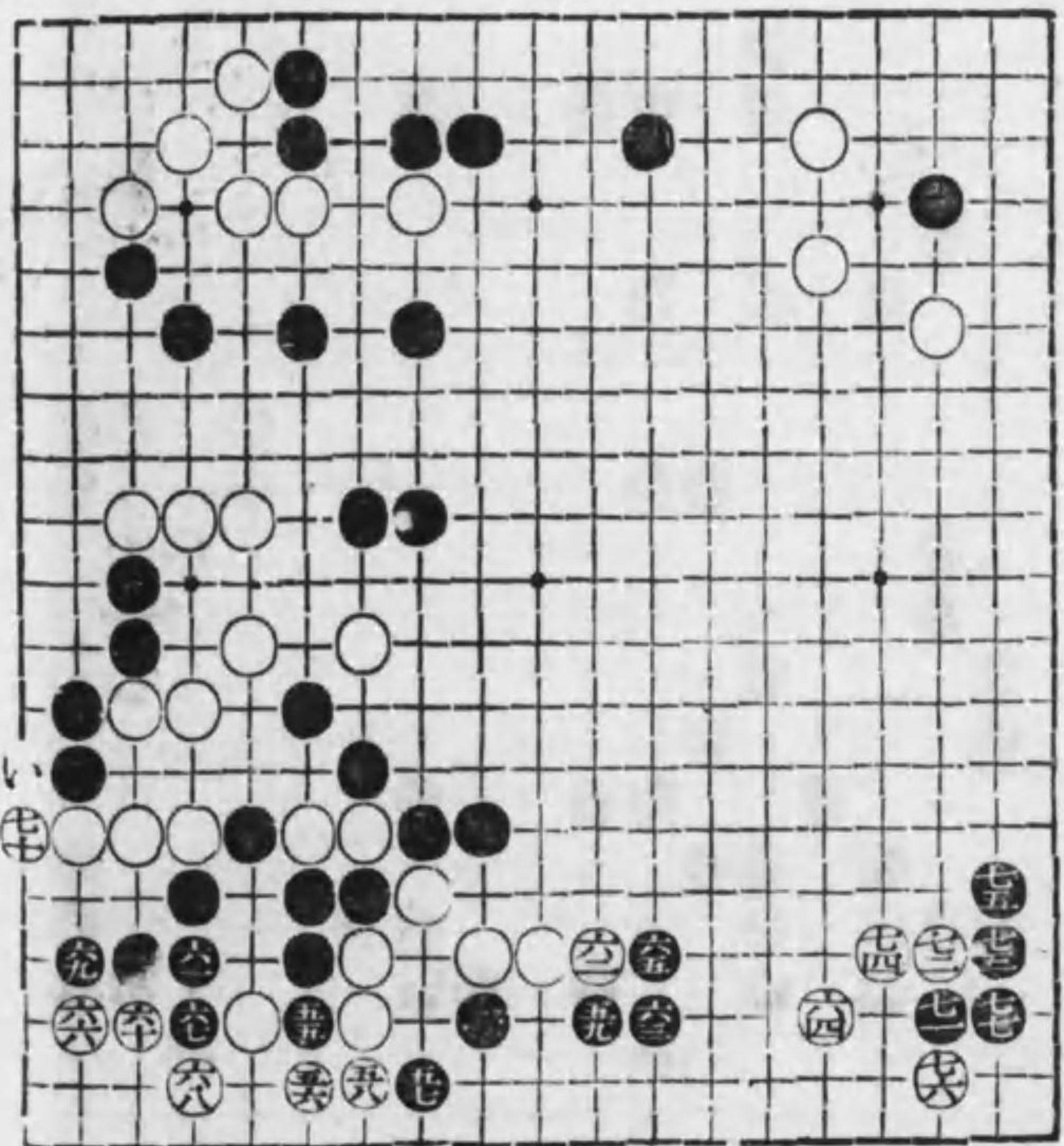
前譜白五十を本圖五十だ
と以下黒五十七と成つて白
大惡果。

また前譜白五十四と成つ
たものとし——

黒一白二黒三、即ち黒(い)
また黒(ろ)白(は)黒(に)と
上下に手段も生じ、前譜白
五十四迄は黒さして惡くも
ない次第。



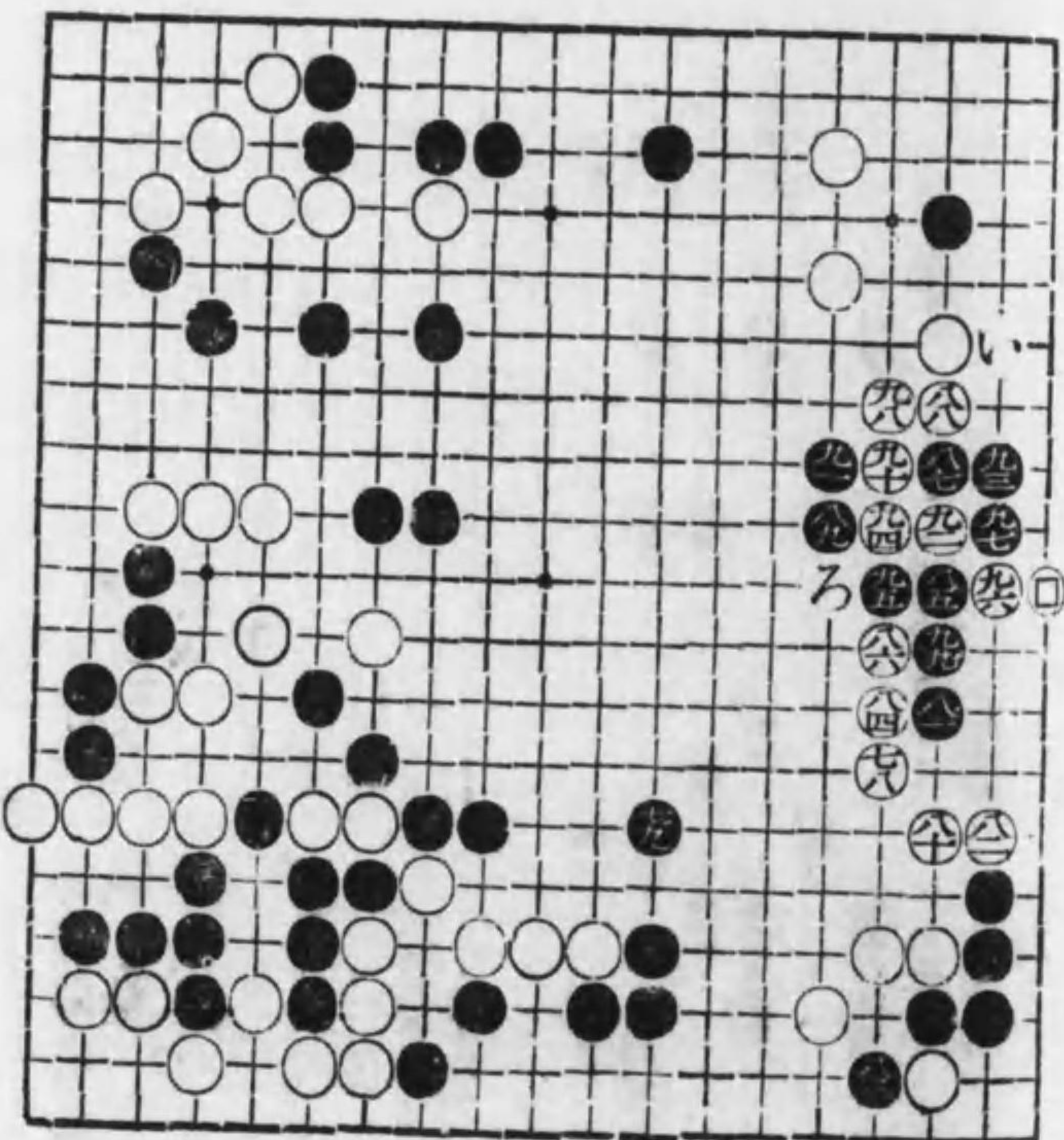
本譜は黒五十五からで、
 五十五は此強い方を利用し
 先づ以下黒六十五迄と其方
 の黒丸一子再起の巧い手所
 そして黒七十一と入つた
 夫れも、白六十四の根據を
 奪つて巧い強行手段である
 白七十は黒(い)で黒に活
 きられるから。と解る筈。



本譜は白七十八から、そ
 して黒八十一は白八十二と
 替つて八十三、即ち黒八十
 一は白八十二以下の攻め、
 風雲は急である。

次いで黒八十七は黒丸一
 子(い)で渡り待望。等で

白百迄。白百を(ろ)だと
 黒百と黒に活きられ、白面
 白くなす。



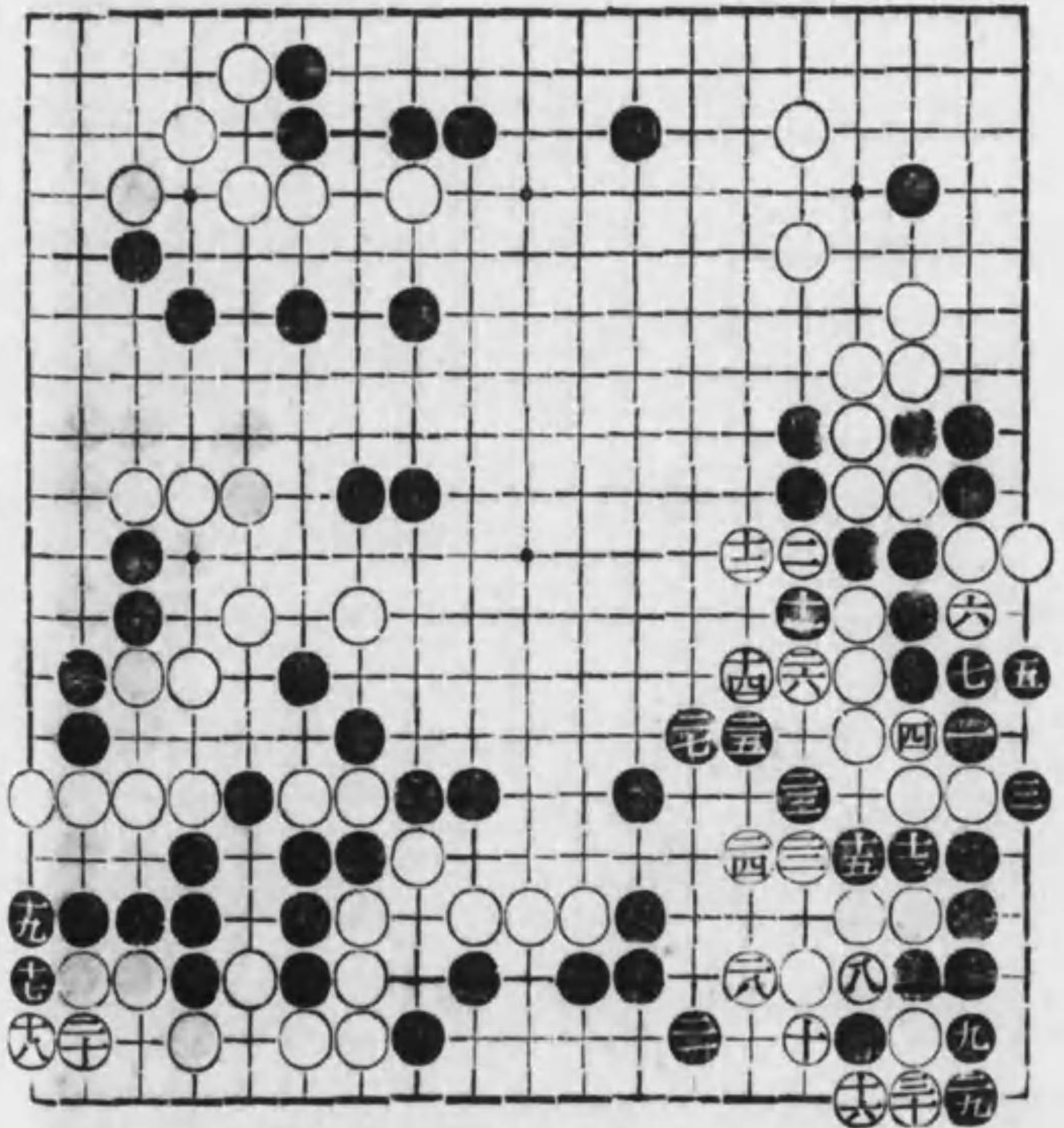
黒一を六だと黒一舉敗亡
それは参考圖に明瞭だが。

本譜白三十と成つては二
十六の方は治まらない。等

で――

形勢混沌、白は名案、風
に柳も用ひやうがない。

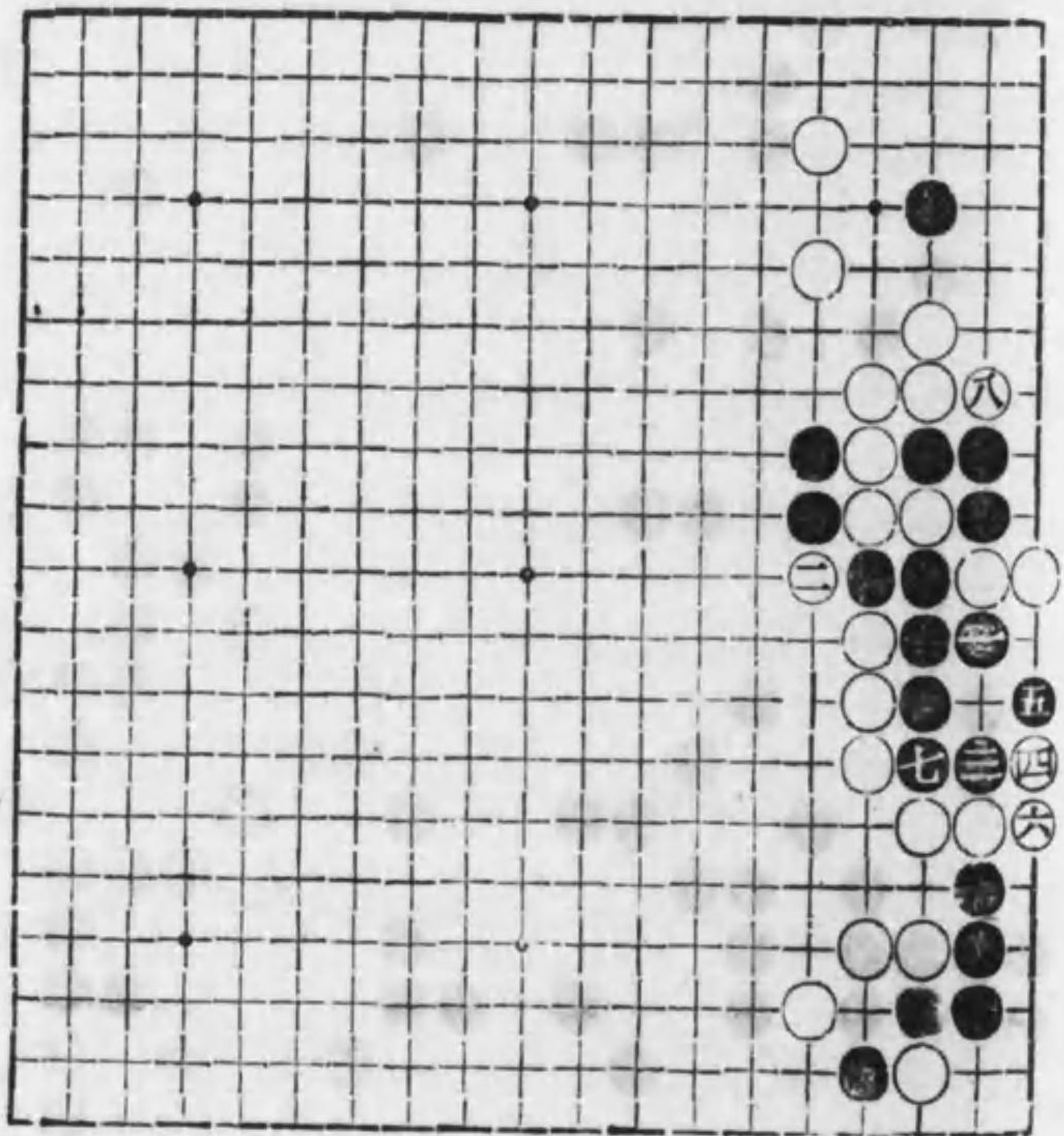
本局は黒自慢の出来榮え
ともある。勝つた碁は勝つ
た方で見せ。



實際、敗けた碁は忘れま
したとか、また見せてもア
アやれば勝つたコウやれば
勝つた。諸君も一度は覺え
があらう。

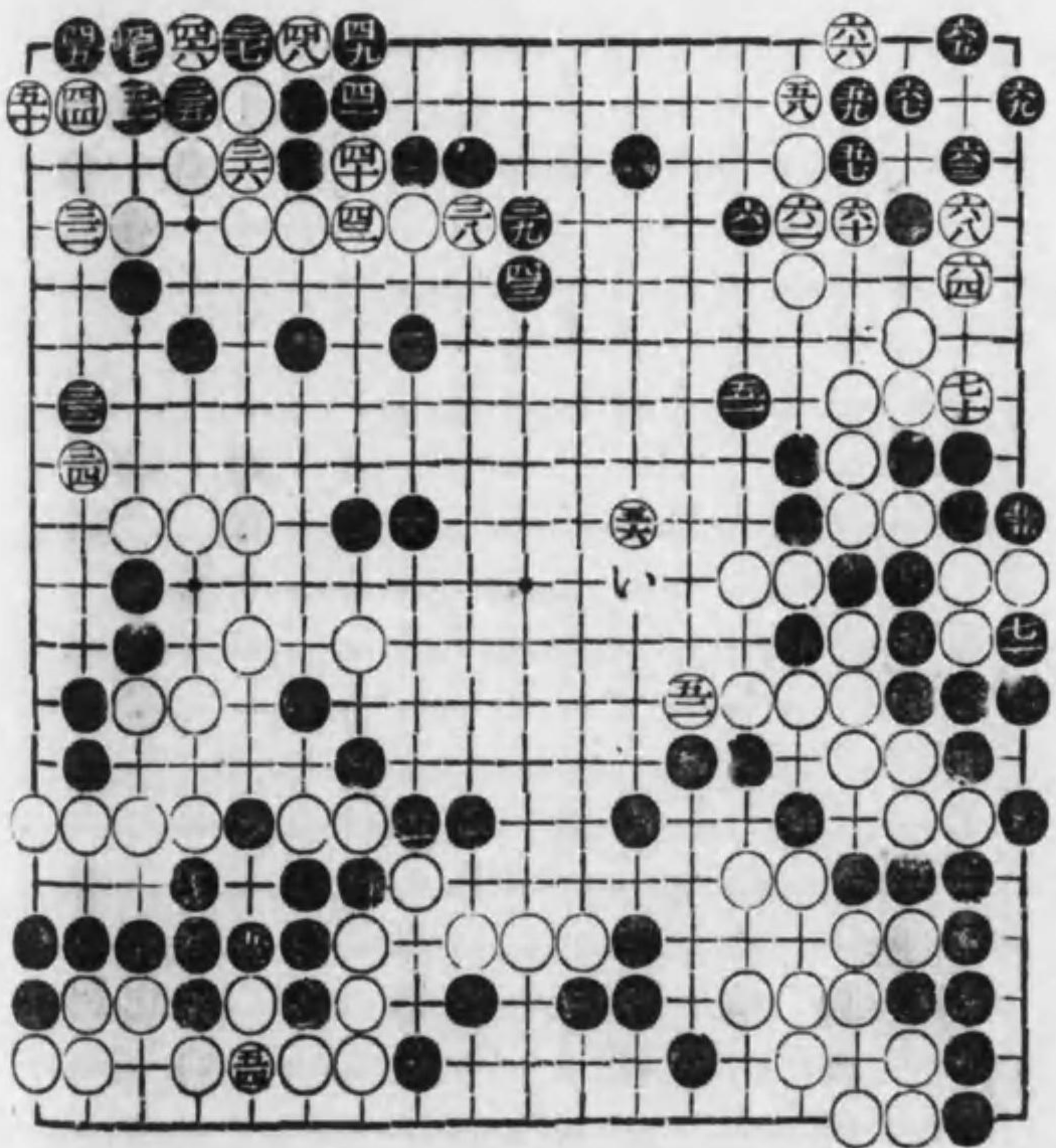
閑話休題、どれ前譜黒一
を本圖一だと以下白八と成
つて、黒身動きの出来ない
惨敗。

等の見損じは快禪にない



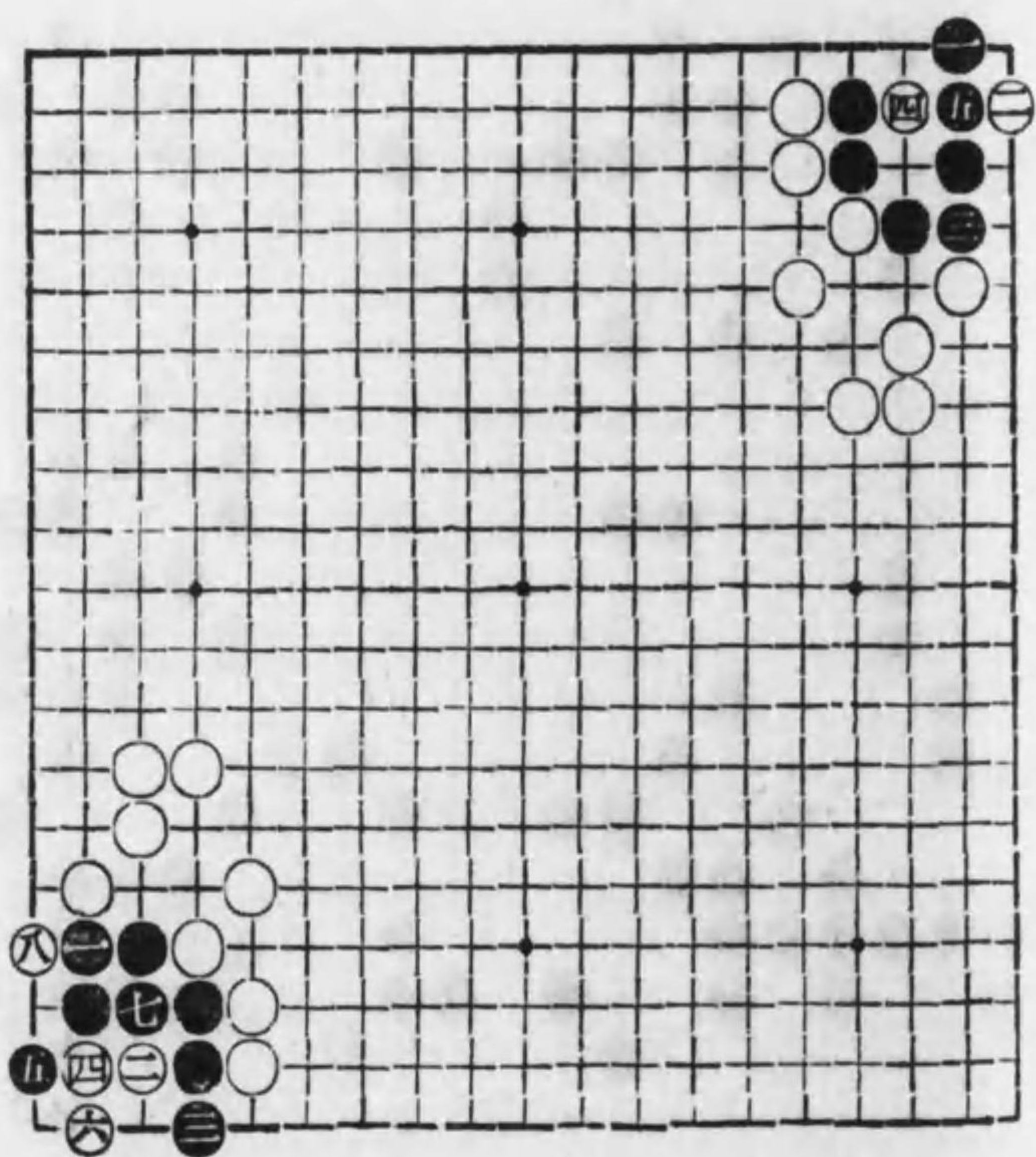
本譜は左上隅に黒三十一から、先づ其方の黒得は將來に見られる。轉じて——

黒五十五は白丸三子を取つて白の動向如何。といつた態。
に白五十六は(い)と黒から攻めつけられる防備。
黒五十七は以下六十九で黒活。斯くて地域は兩者等分。

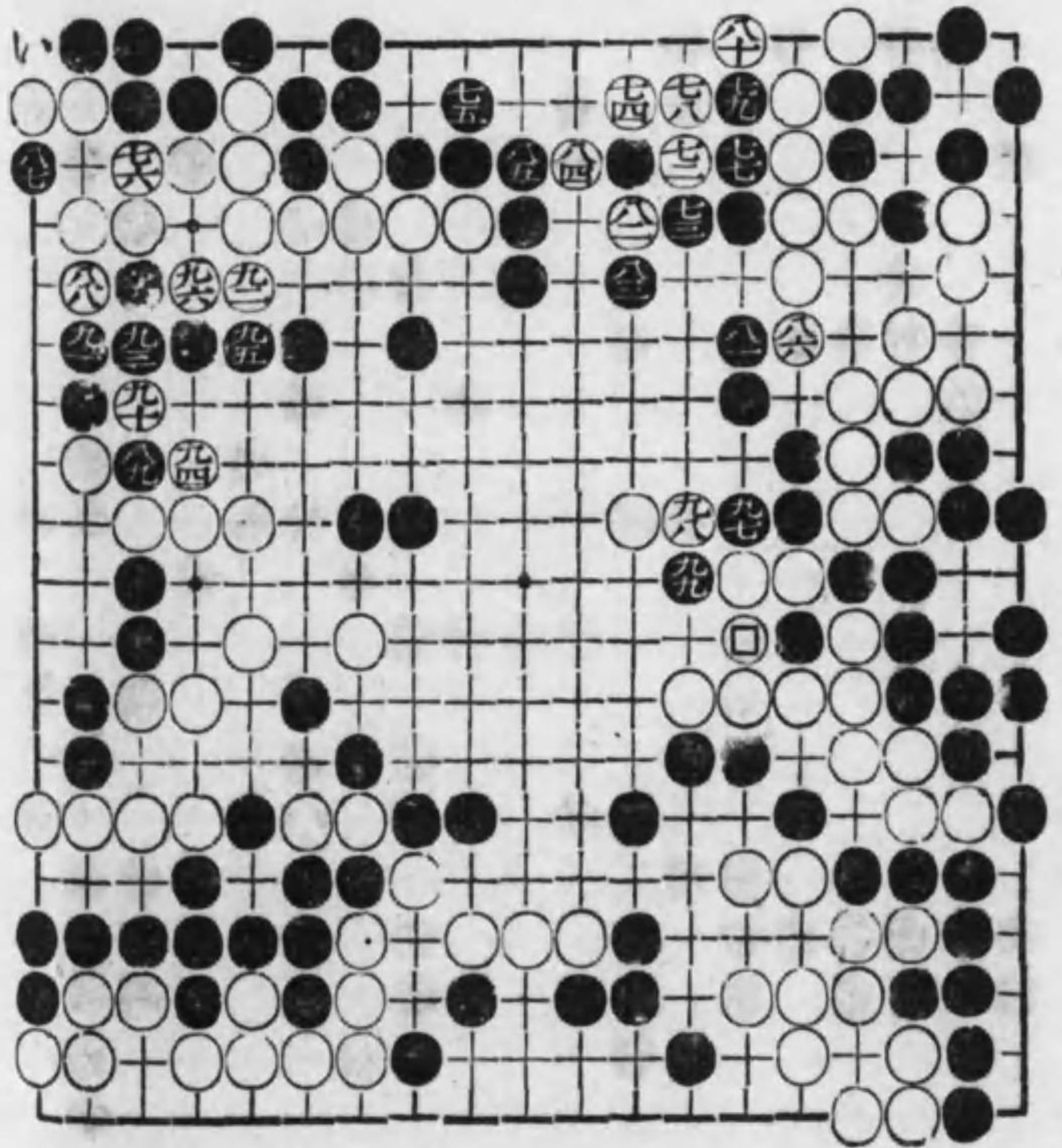


本圖右上隅黒一は前譜黒六十五で、夫れが巧い活點である。

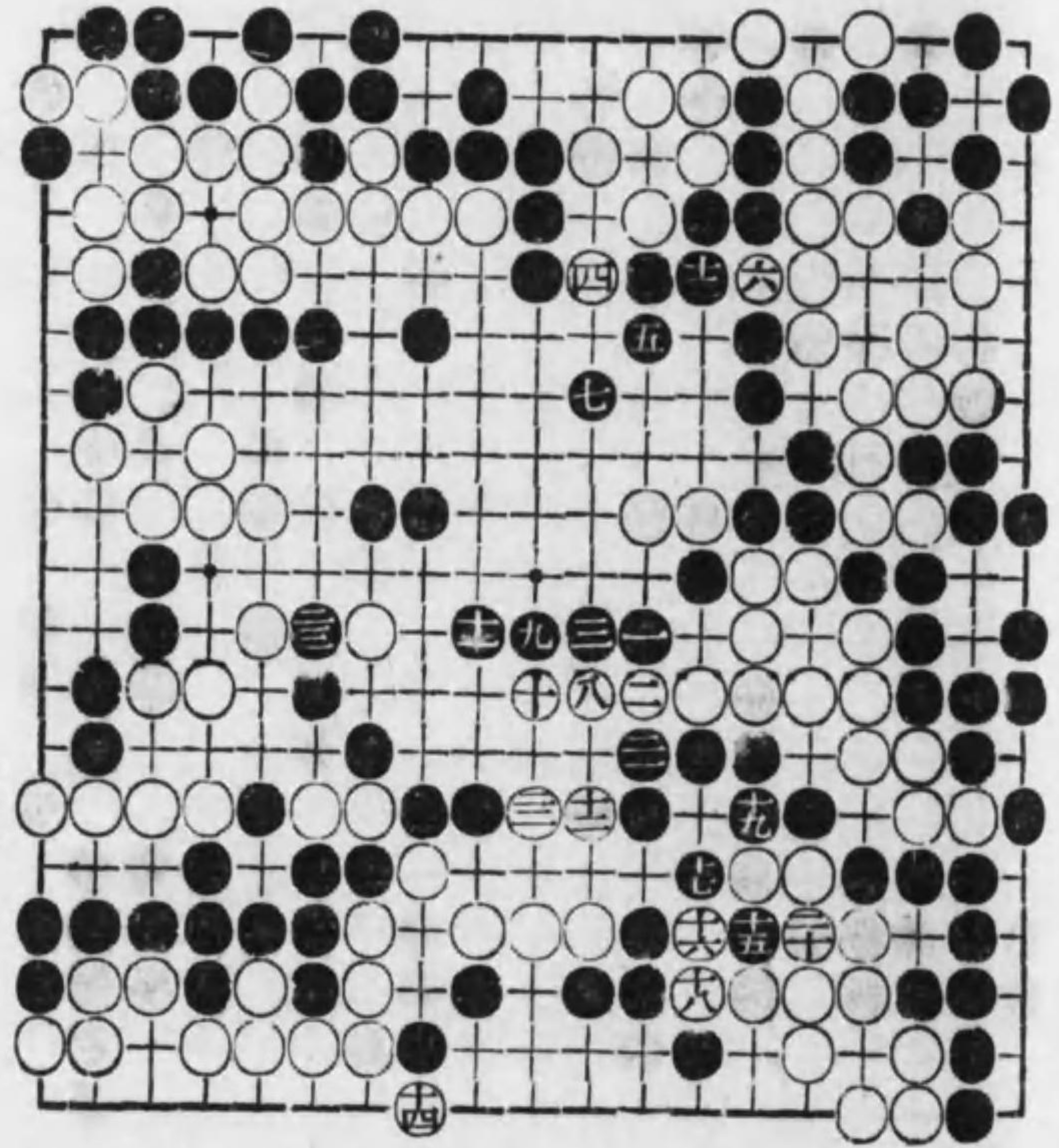
即ち前譜白六十八を二なら以下黒五で黒活き。と解る筈。
更に左下隅黒一だと、以下白八と成つて、此れは黒拙い取られた手所。黒七を八だと白七で同様。



本譜は白七十二から、白七十二は其方の白一團がなほ治まらない夫れが以下白八十六迄。白は苦戦である轉じて黒八十七は白(5)と黒四子を取らせない、等で以下白九十六と此方も一段落。黒八十七が巧い。次は中央の方、これが決勝點——

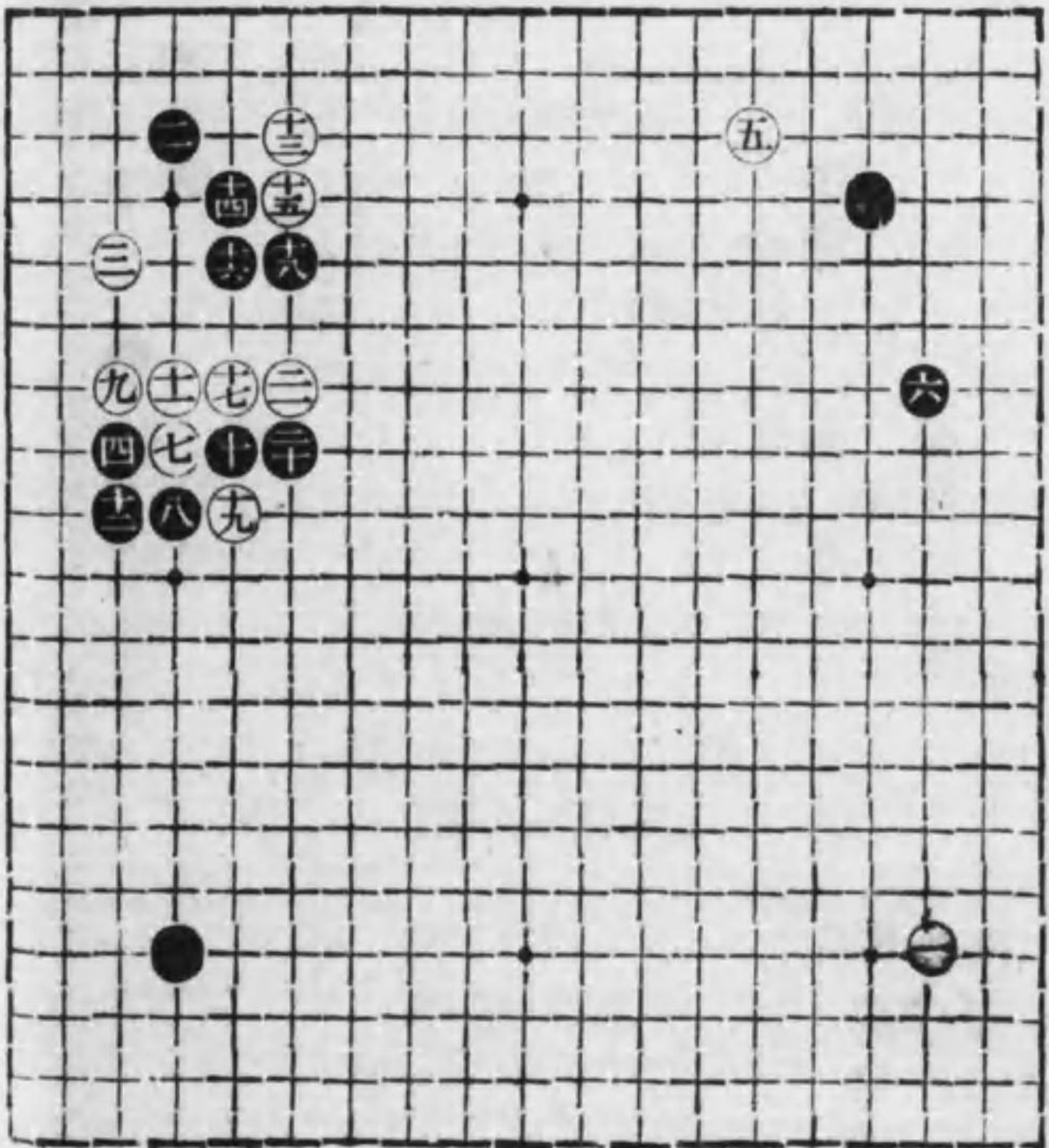


黒決勝榮冠の手所は先づ黒一より十一迄。即ち黒中央に大地、明瞭黒勝。なほ白十四に黒十五以下二十一は巧い先手一眼ではある。處で此十番碁は結局打分け、快禪の覇業も遂に不成功。だが吾等に興味の名局は遺された。



本譜は名人丈和が七段當時、四國で無敵の三段四宮米藏との二子碁の一局、此兩者の力碁は未だに名高いが米藏は野生の雄、そこが面白い。

なんでも米藏は丈和に勝一躍五段獲得に江戸へ出府それが本局であつて斯界に時ならぬ波紋とある。

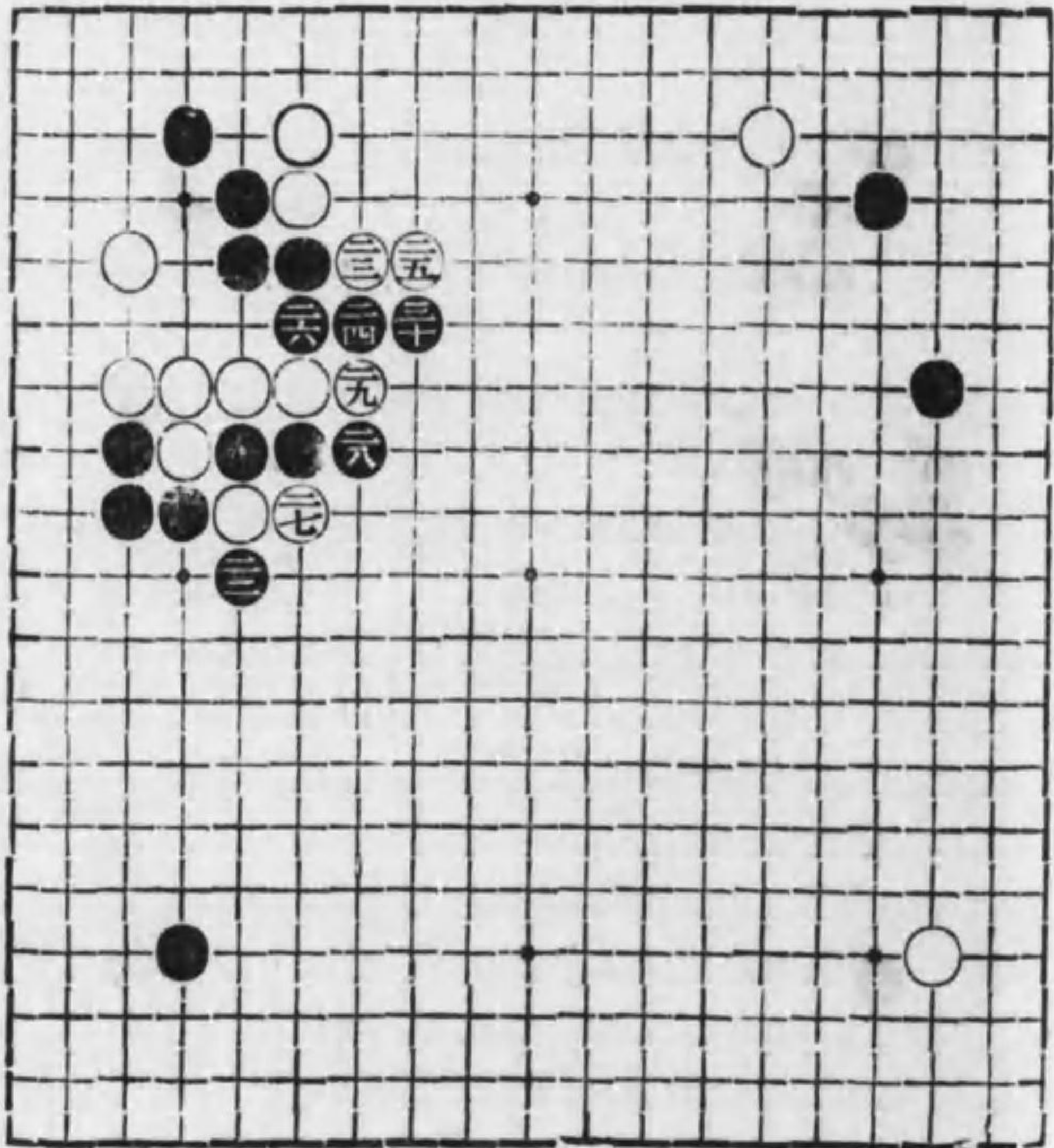


さて前譜黒十は十二が定石である。

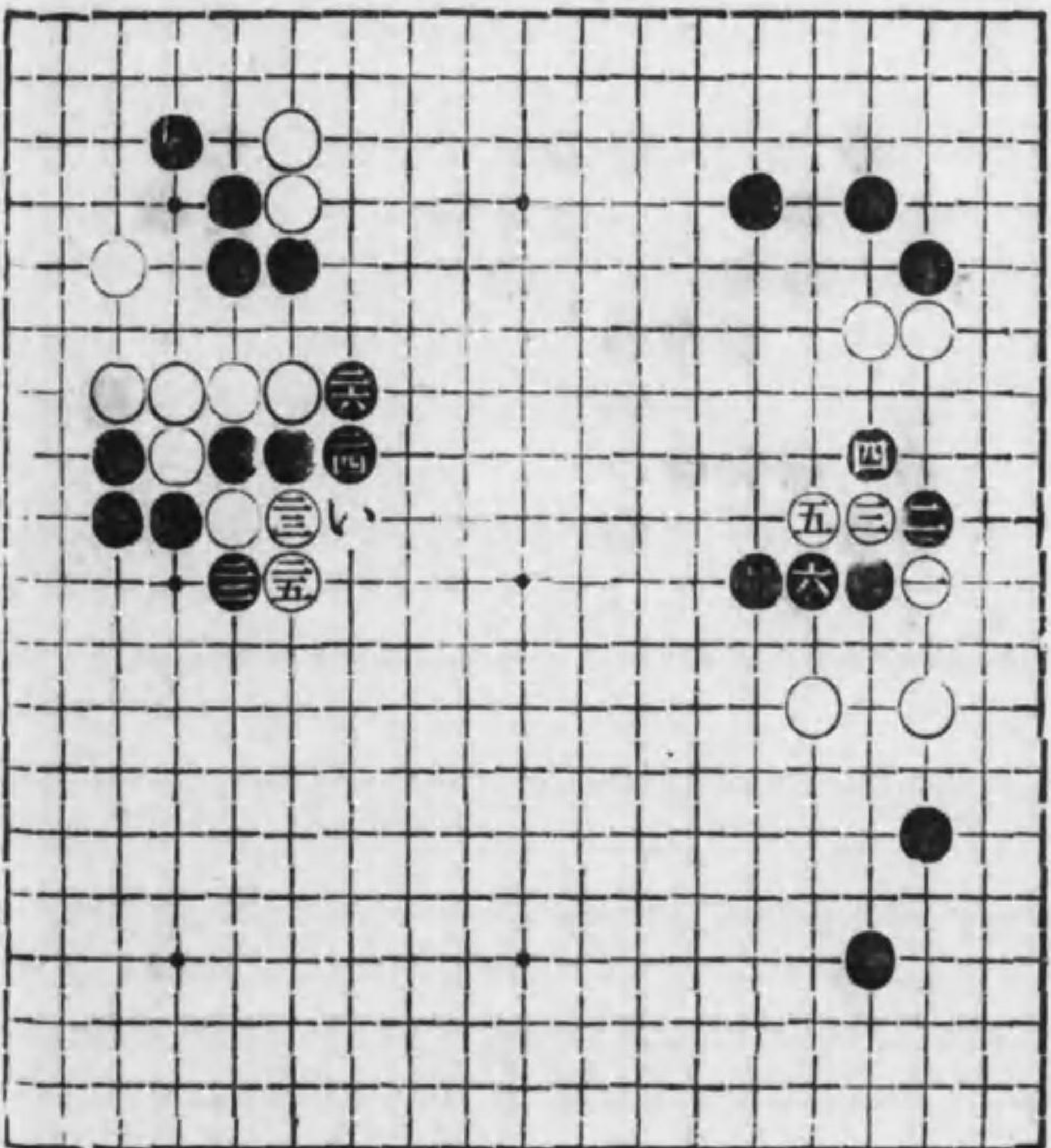
なほ白十九は黒二十と替つて二十一と押出した所が名調子の一。

次は本譜の黒二十二が白十九と同様の名調子。即ち

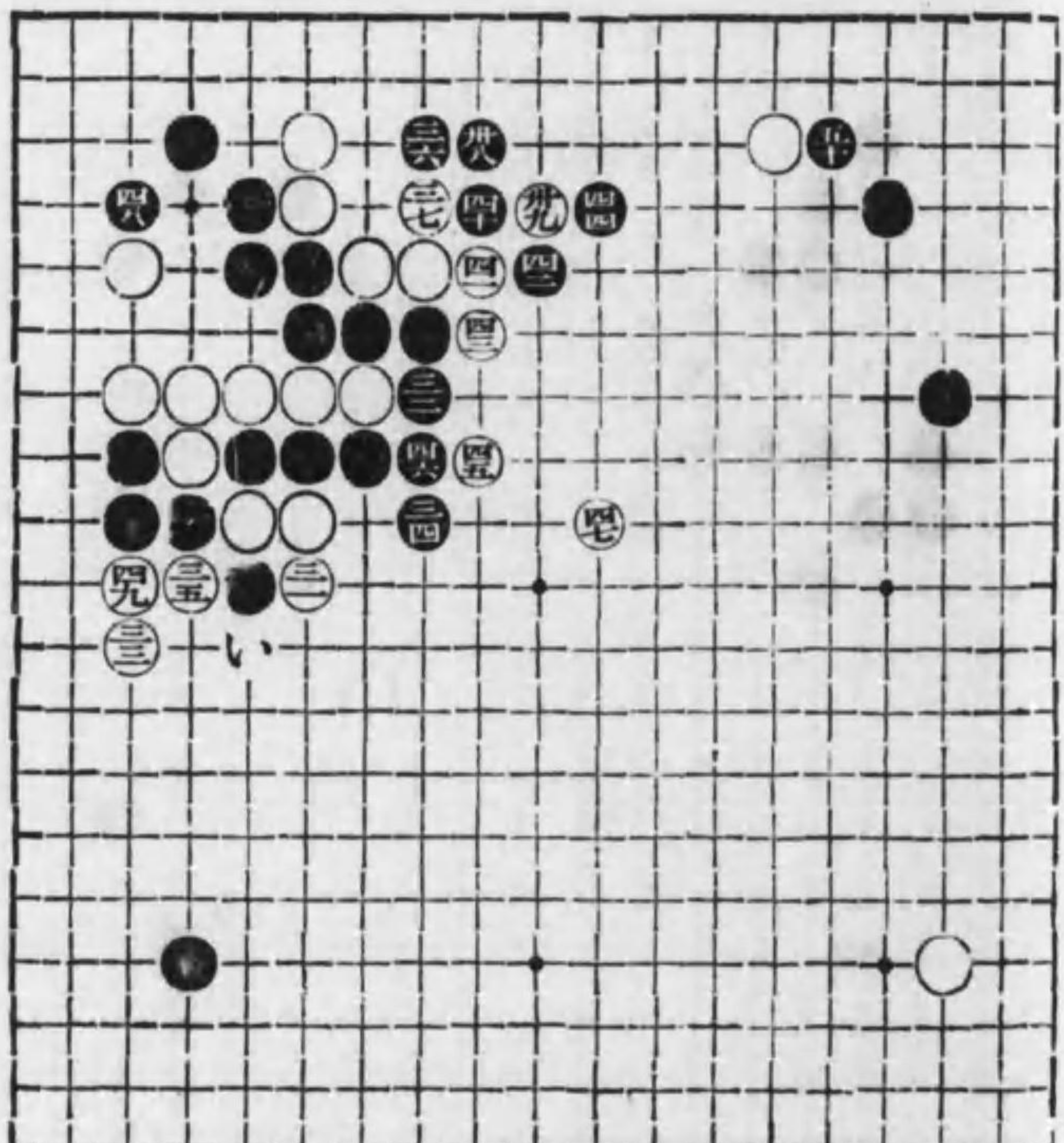
以下白二十七に黒二十八と其調子である。
黒三十と成つて早くも激争展開。



本圖左側は即ち前譜黒十二に白直に二十三だと一以下黒二十六と白は出を止められ。といつて白二十五は黒(5)と白悪化の征。更に右側は六子置碁に現はれ、白一と三は上方へ連絡手段。に黒四と六が左側二十二と二十四と同様の妙法。



本譜は白三十一から、白三十一は黒三十二を(い)なら白四十六と征。等で以下先づ黒三十六と大變化。即ち黒は左側を捨て三十六と白の急所に肉迫そして延長黒五十と成つて黒好展である、力量發揮の見透し。
白三十九を四十二だと黒は何と

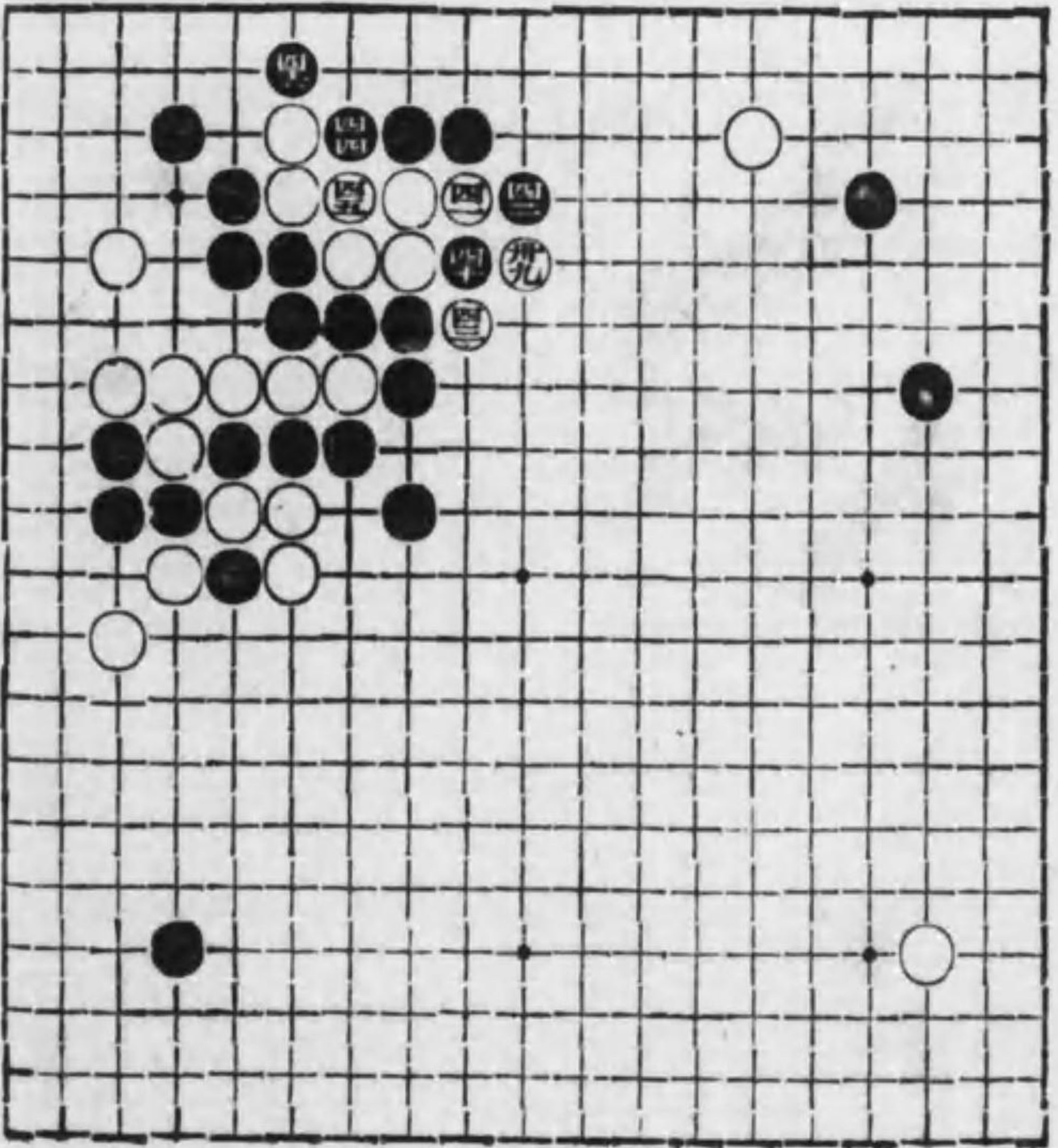


前譜白三十九は本圖四十
二の所、それを本圖三十九
だと――

以下黒四十六と黒に渡ら
れ、白が拙い推移だからで
ある。

處で此碁には松平肥後守
より特に勝者へ盤石一組懸
賞ともある。

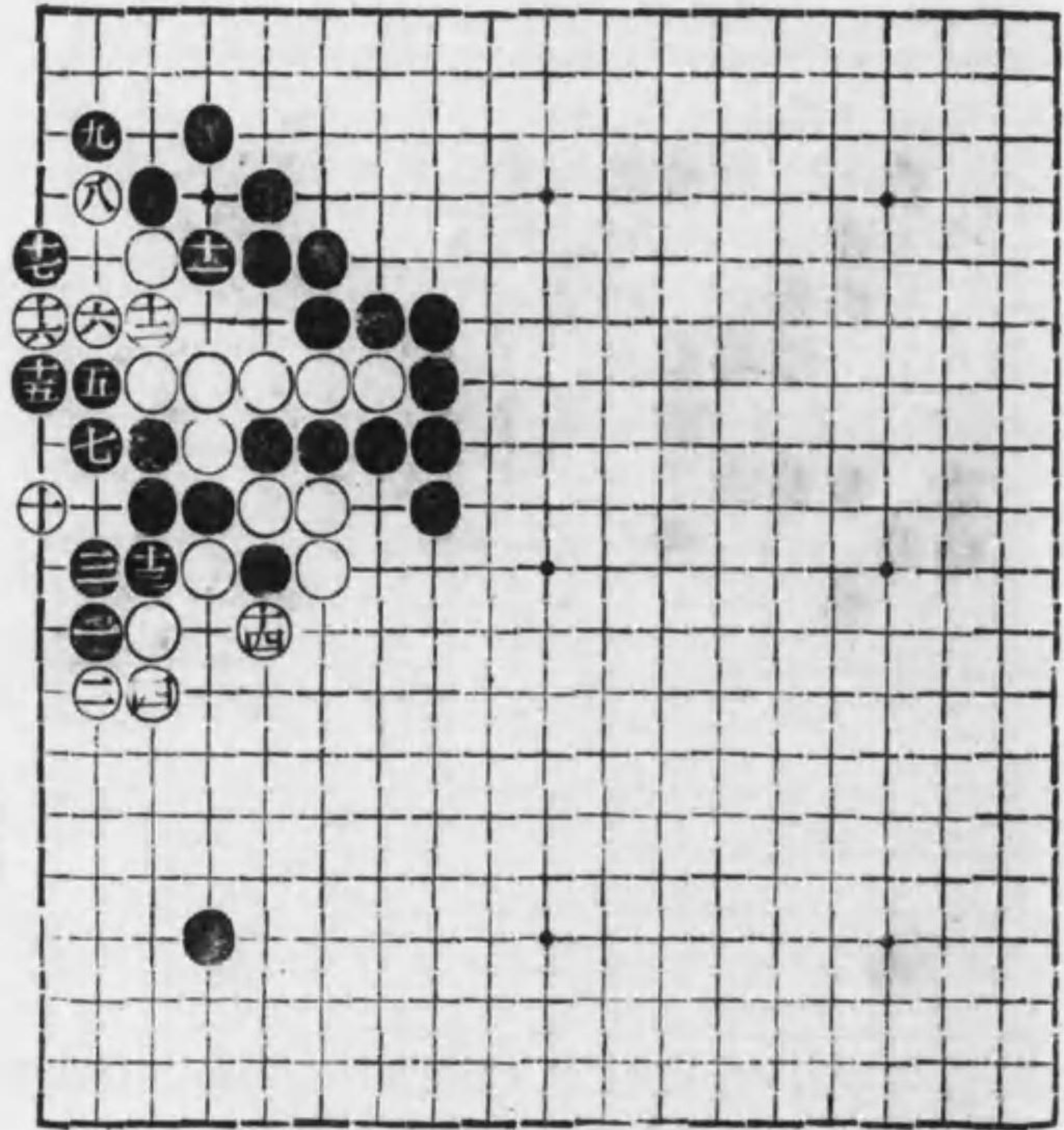
本局は上野輪王寺宮御催
し、宮の斯道御堪能は三段
ともある。



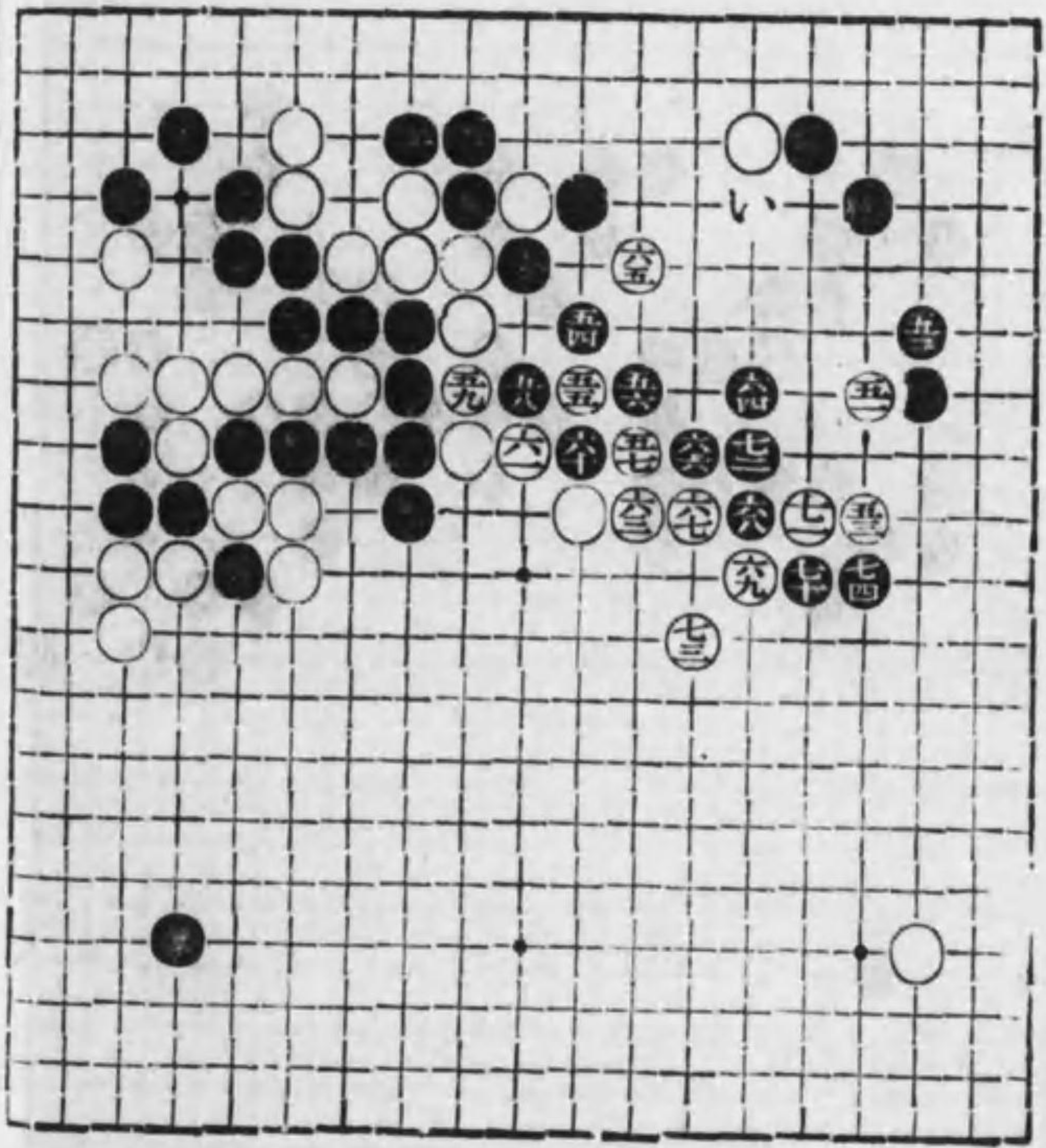
なほ前譜の参考圖で、前
譜黒四十八は本圖白八の右
黒丸――

其時白この方から手抜き
だと、即ち黒先黒一より十
七で白攻合敗。で白四十九
を本圖十三であつた次第。

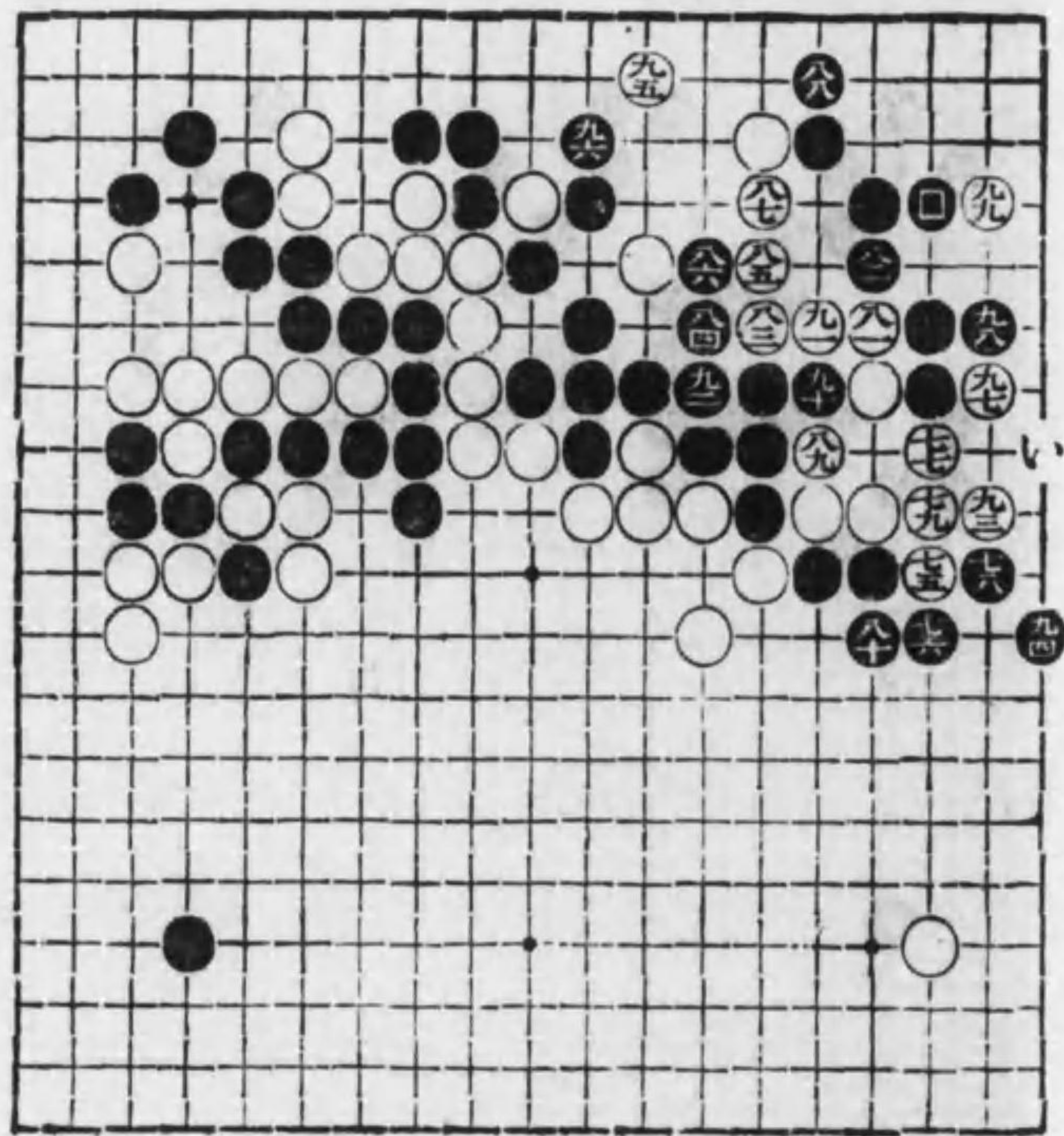
白十二を十三なら黒十二
黒十三を十五だと白十三
で此れは黒敗け。と解る筈



さて本譜は白五十一から
 白五十一を(い)だと――
 要するに前譜白四十七以
 下、即ち左の白丸九子と絡
 み、例へば次に黒五十四の
 所で白は左右大困難。
 等で以下黒七十四までだ
 が、白は苦戦の状。黒六十
 二は五十五に粘ぎである。

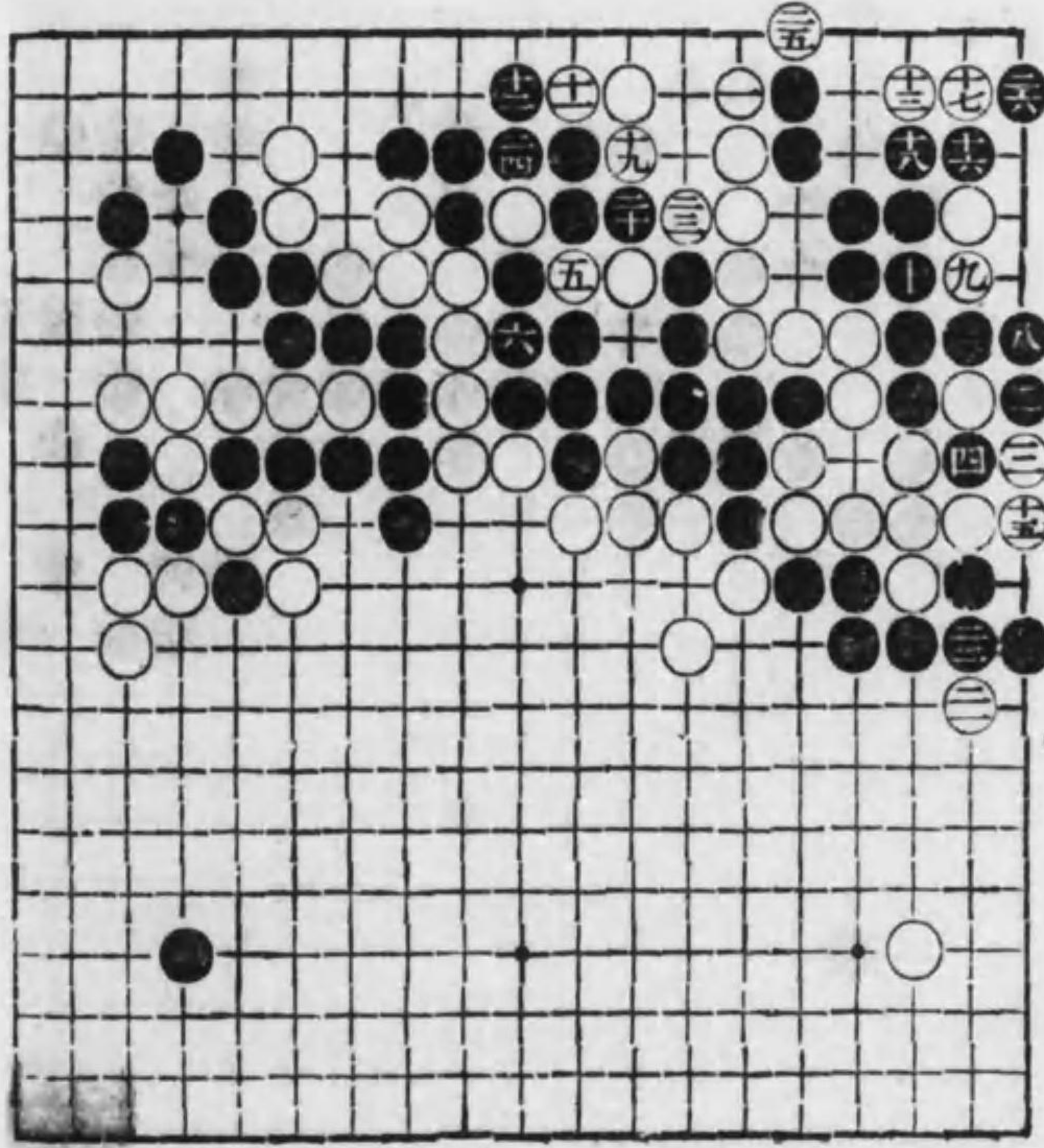


白七十五以下は懸命、取
 られて白大敗だからである
 處で黒九十四は普通なら
 悪手、本局では言ふまでも
 ない(い)と白に正眼を與え
 る劫争手段の一手、それも
 決勝點。
 黒九十四には丈和ら困つ
 たとある、實際その通り。



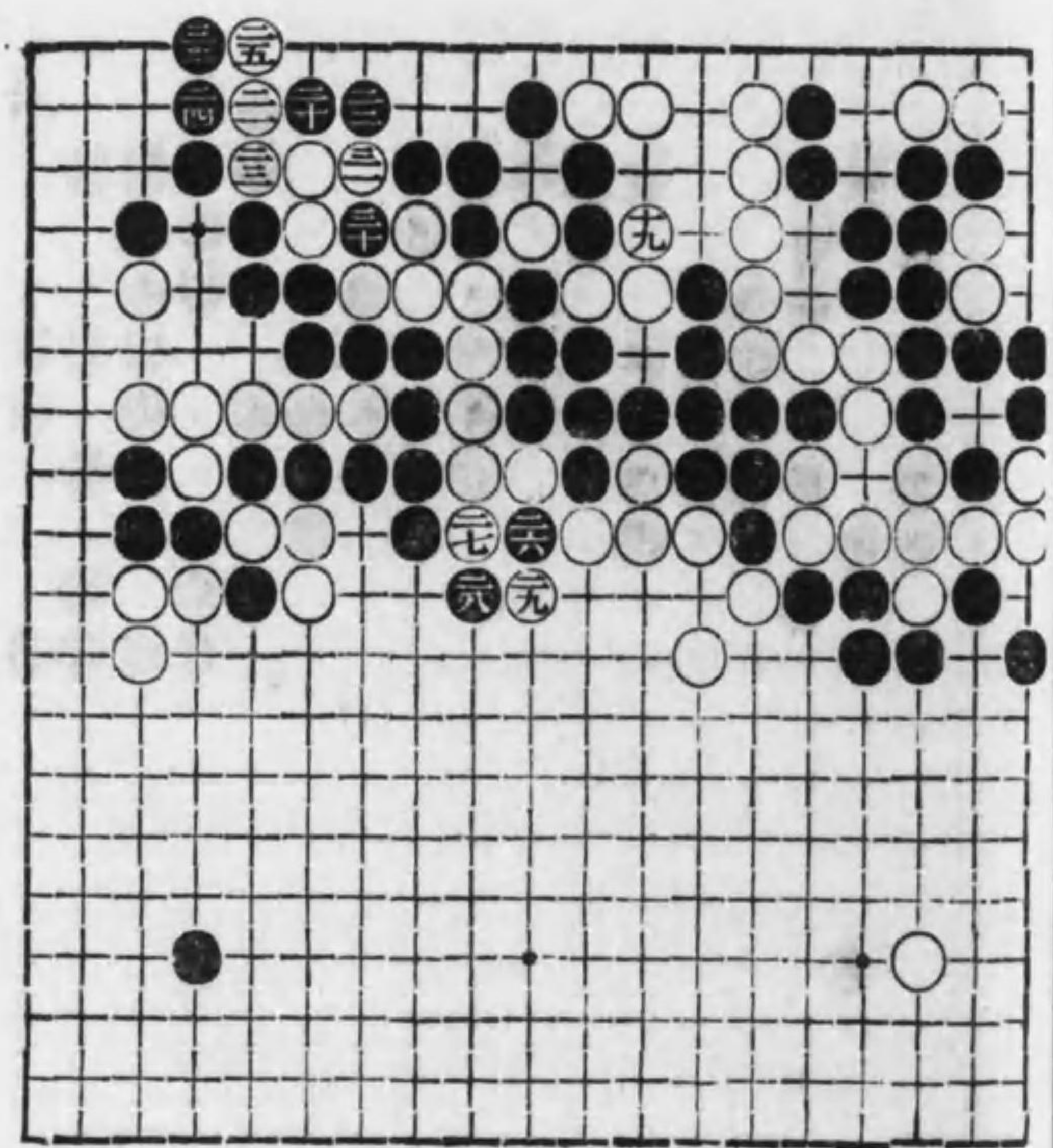
本譜は白一から、白はあらん限りの秘術をつくし。だが以下白七は四の上に劫取。

また黒十四は四に劫取。等で以下白二十五に黒二十六が絶妙の手所、その一手も決勝點。重ねて巧い。黒二十六が打て初段達成の實力。参考圖を添えやう

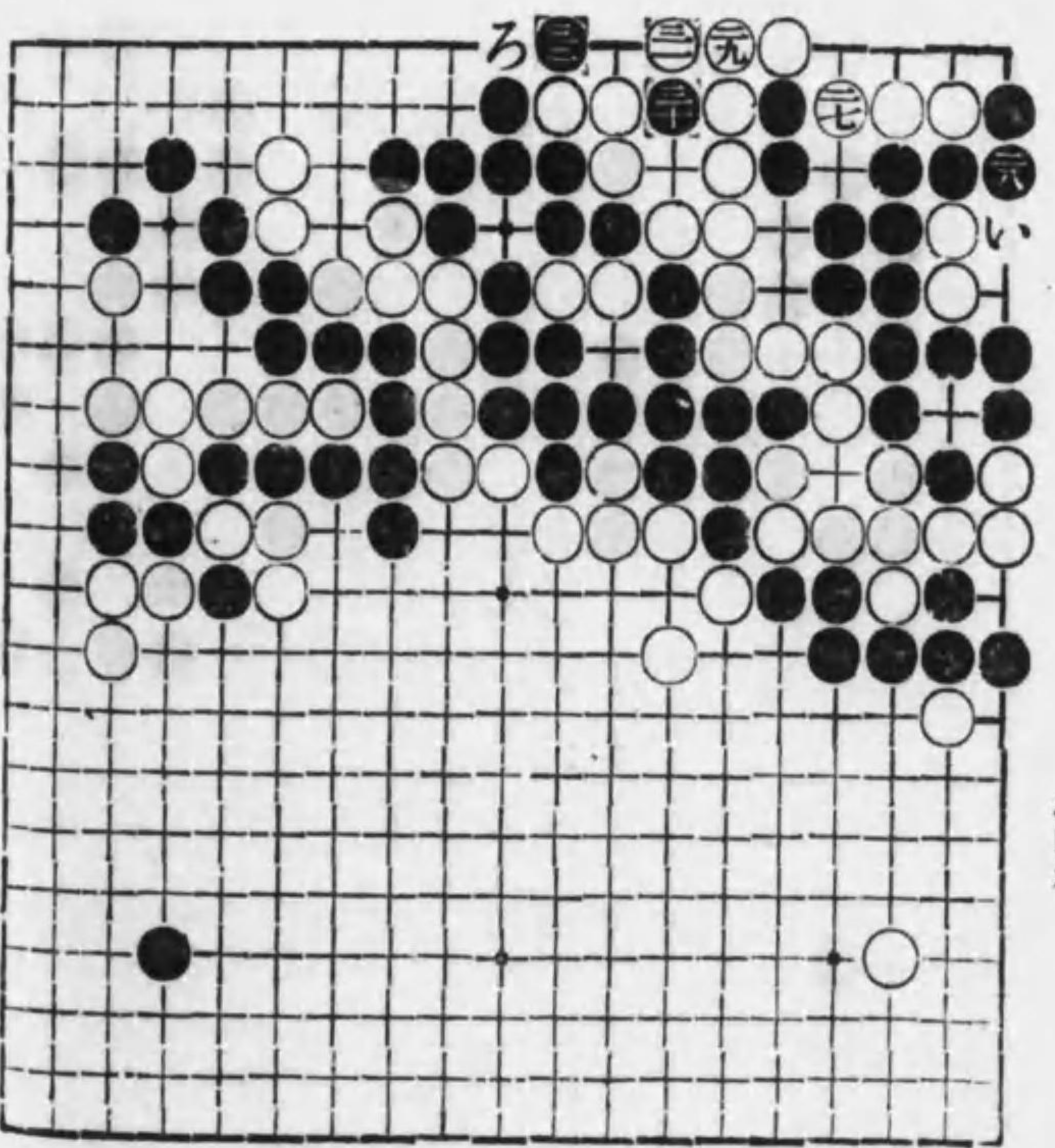


第一前譜白十九を本圖十九なら以下どう成る。も疑問の一

だが黒二十が巧い手、即ち以下黒三十二で三十の所また二十六の所が欠目であつて、黒左右調整。無論白十九の方に活計なし。

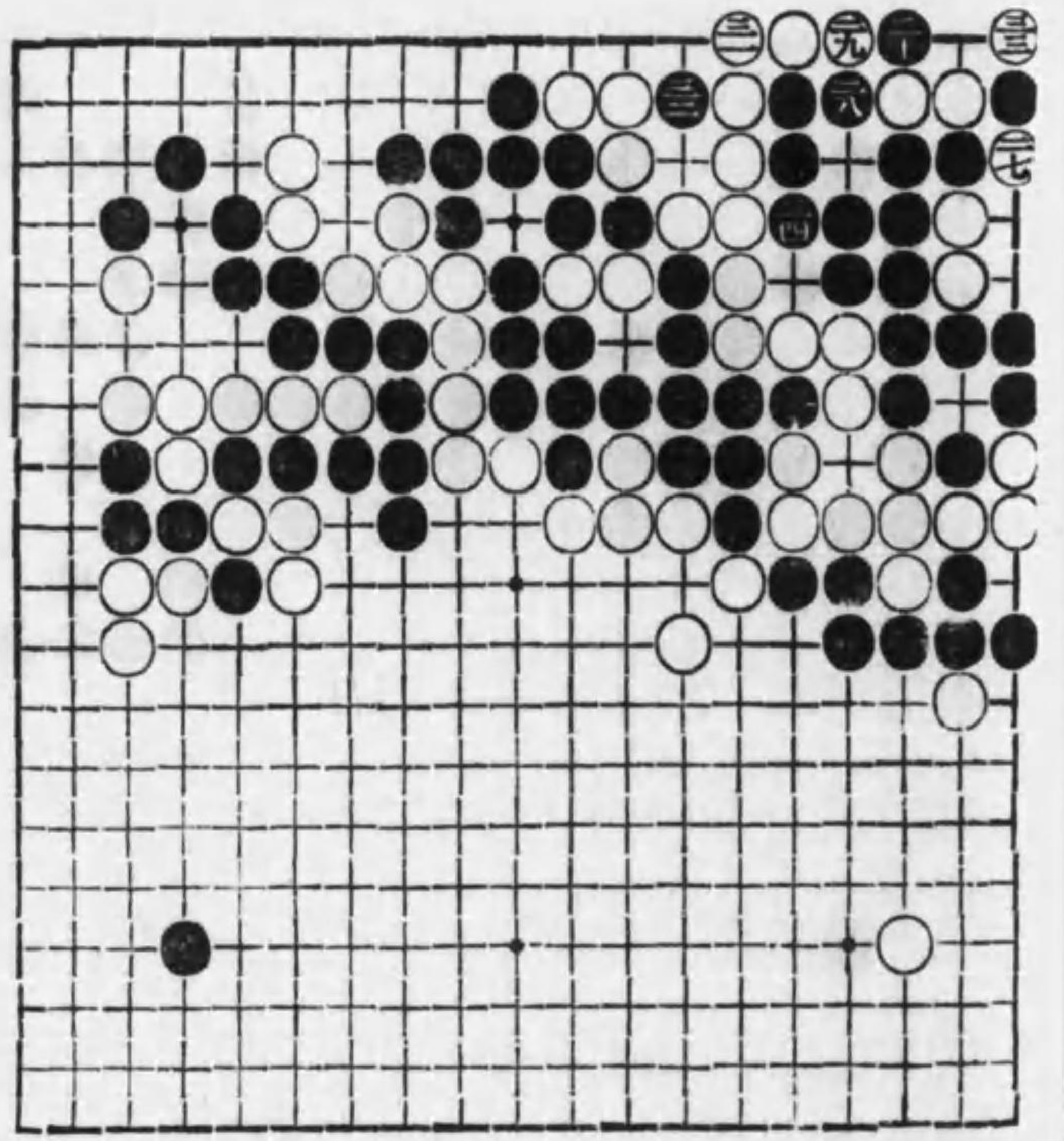


次は白二十七に黒二十八が決勝點である、即ち巧い攻合いの手所。それを——大なか、小なか、攻合つてみられよ。黒は二十八の方へ絶對手を入れない事。また白(い)にも黒は(ろ)の方から攻め、それが旨い手所。と解る筈。



なほ本参考圖、白二十七にも以下黒三十四で黒活きこれも白駄目の一例。等で次譜にはそんな見苦い場面は丈和の面目上ないわけ。

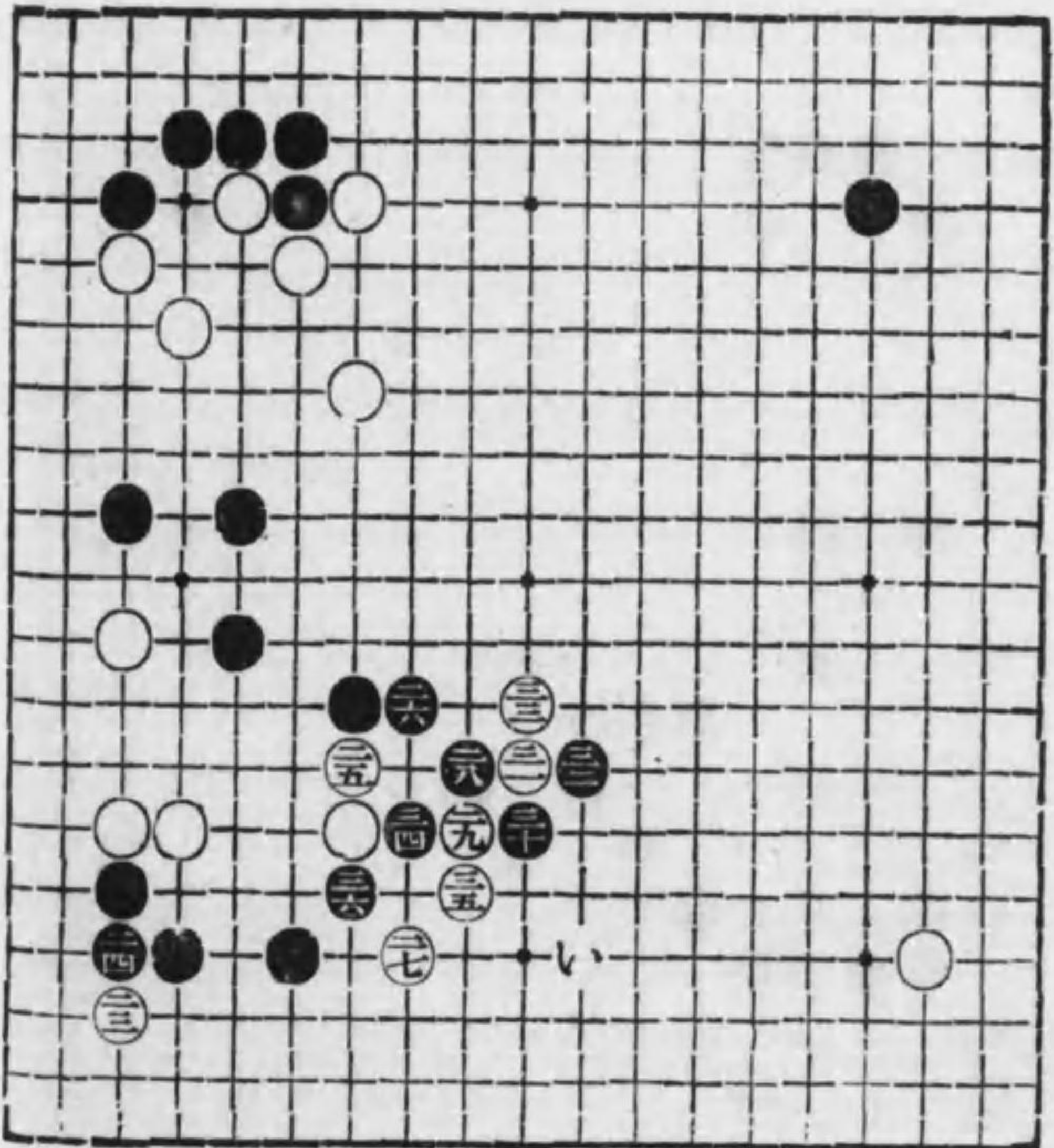
此碁の時は四宮三段の領主である蜂須賀侯も參觀とあつて、三段は大いに面目をほどこし。とある。



黒二十八も白二十七とそ
の上にある白丸との間を窺
ひ巧い手所。

白三十一は黒を兩断の積
極的、三十一を三十五は次
に黒(い)と黒から追撃され
消極的。だが――

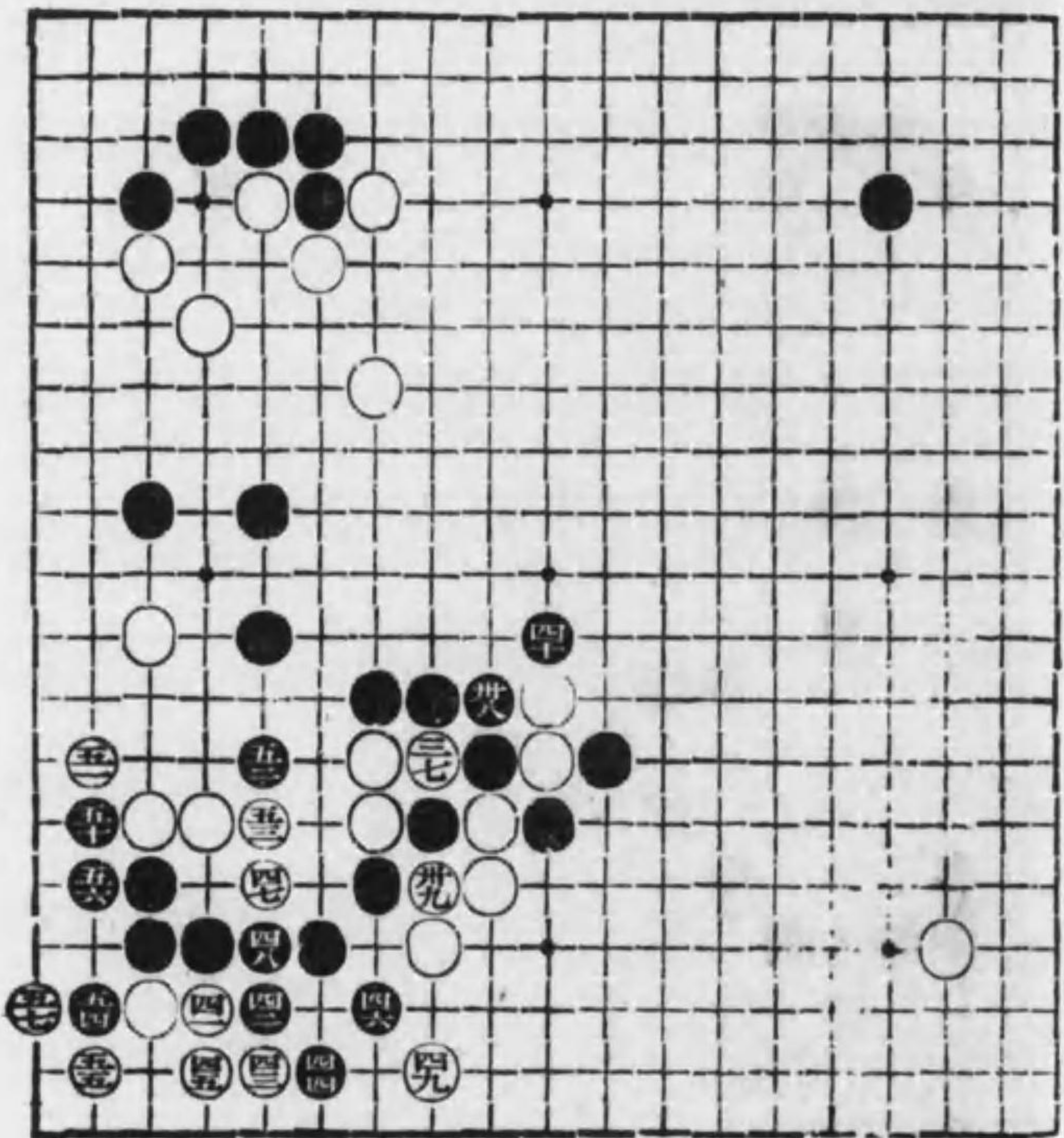
以下黒三十六と成つて、
三十六が絶妙の手所。と先
づ本譜で検討されたい。



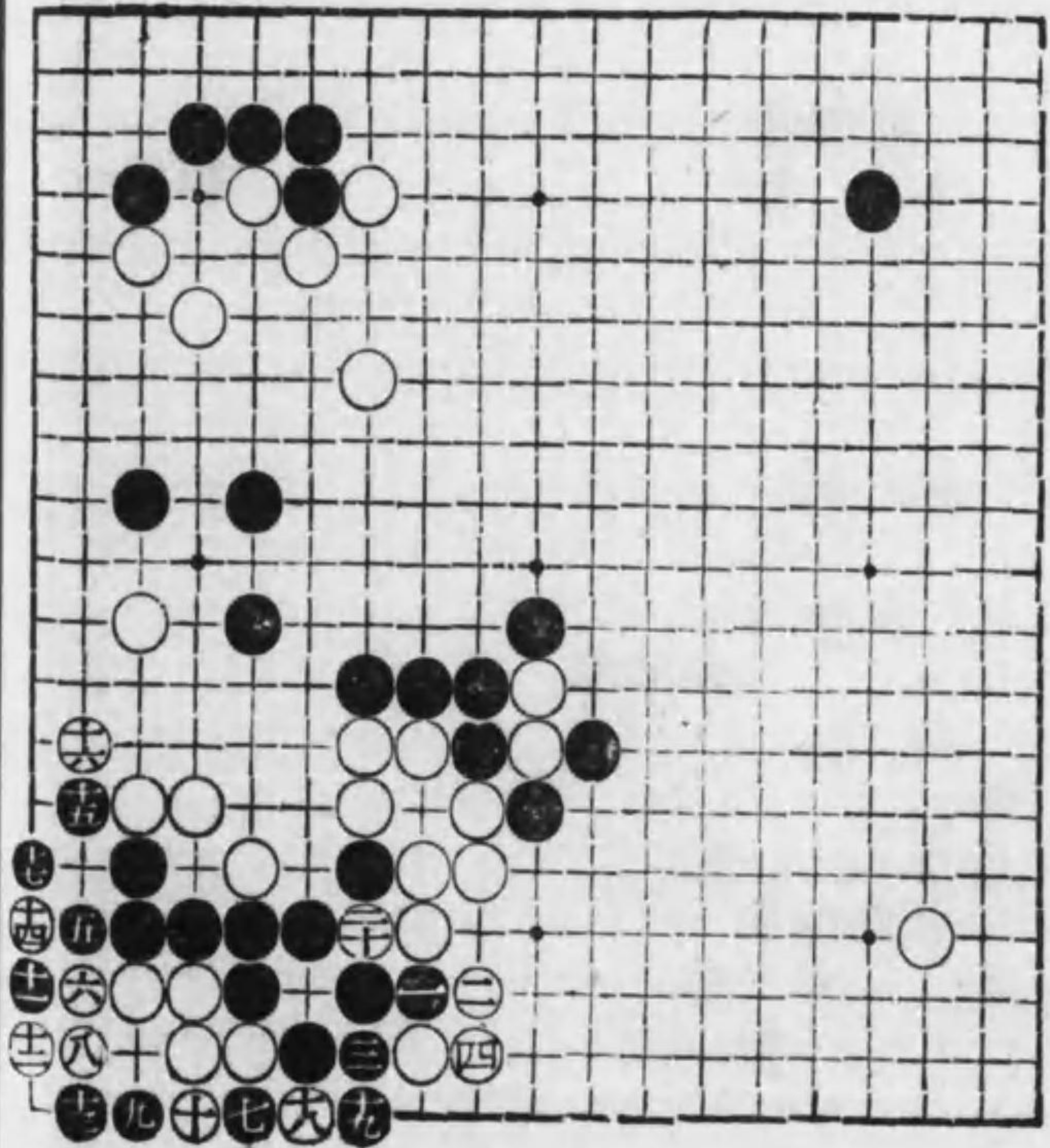
即ち白三十七より黒四十
と成つて、白二子は征であ
る。

しかも中央に白二子征に
獲つては黒四方に威力、白
は堪つたものではない。

處が丈和は當時七段でも
名人と名高い人。これから
が丈和の怪手腕。黒五十で
白四十五以下奪取の計だと

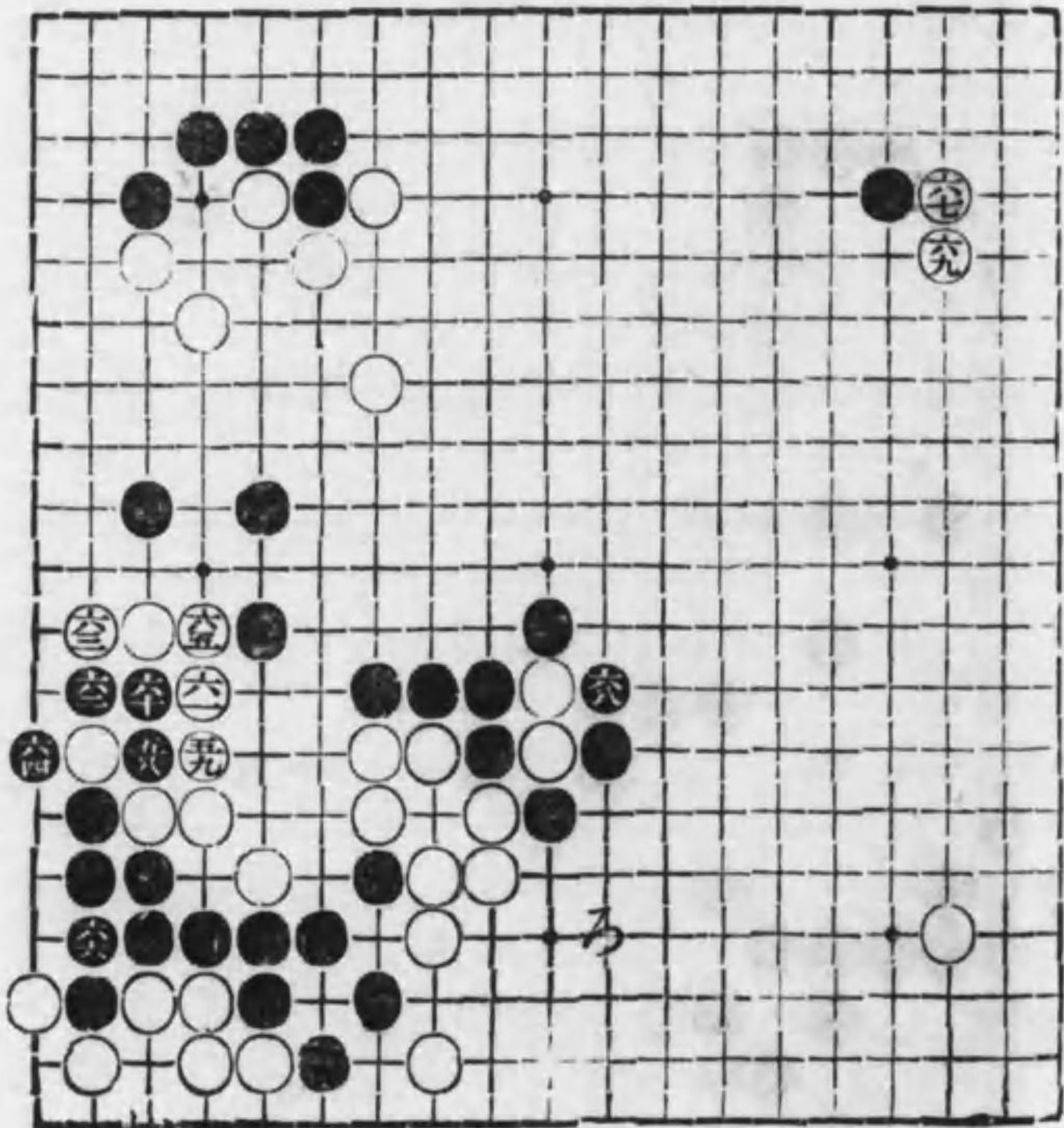


前譜黒五十を本圖黒一とし、以下白十二と成つて、即ち左右に劫争も生じ容易に白を獲れない。ではない黒危険千萬。と解る筈。また假に取れても第一白は他に重要な所を二手。なほ白の外部は厚層。白八が巧い手所である。



本譜は黒五十八から、そして以下黒六十六は米藏、後悔の一手。

とは白六十九の次に黒(い)でも白(ろ)で黒面白くない。黒六十六は六十八が可。といふ事にあらう。その通り——
征當りを打たれない先に黒六十八が巧い手所。と覺えられよ。

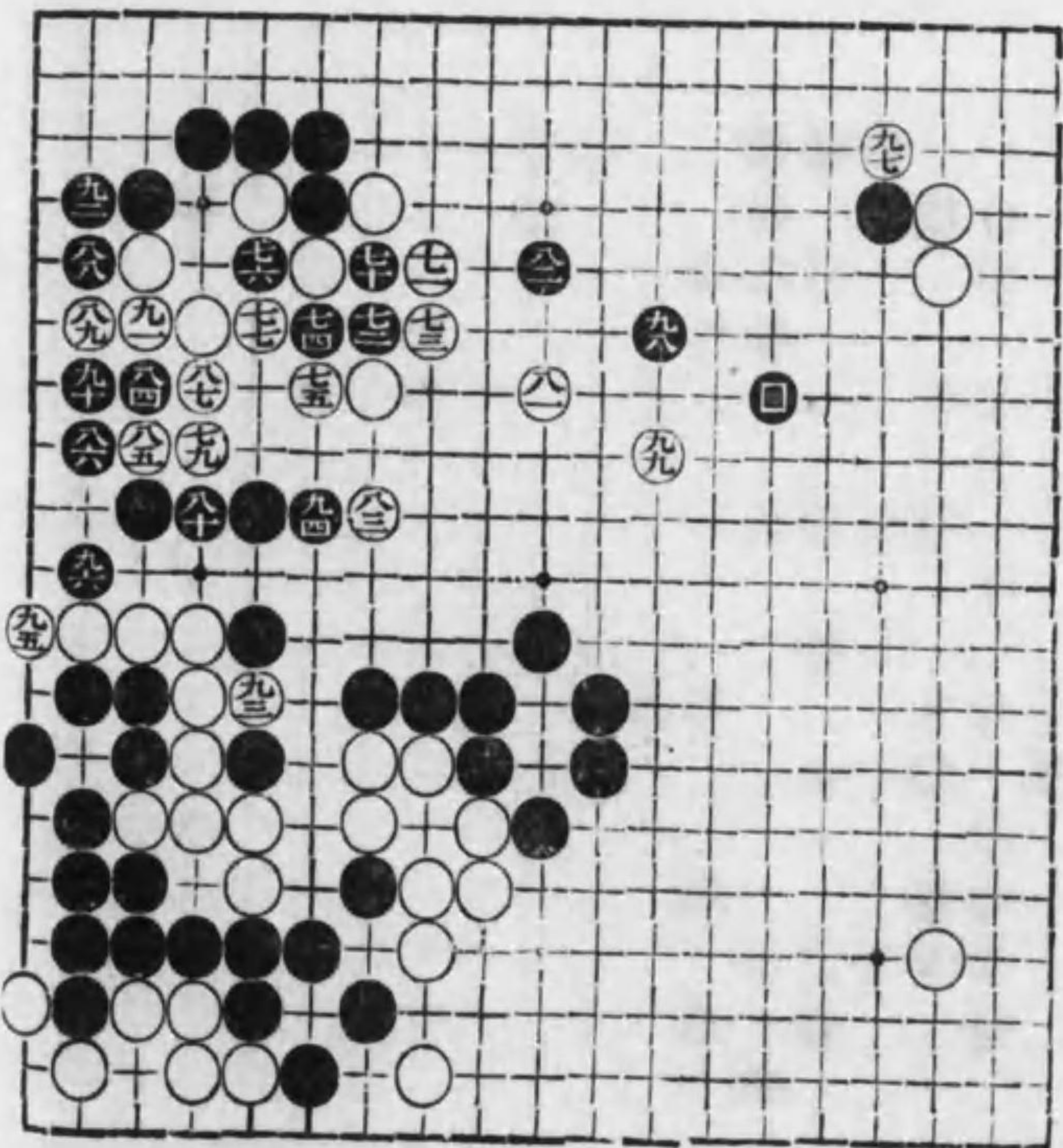


また黒七十は以下白七十
七に黒七十八は七十六の上
を粘ぎ。

そして白九十五が巧い手
所。それは次譜に明瞭であ
る。

が更に白九十七と其方で
白九十一以下を凌がれ、此
ところ黒二手失着。

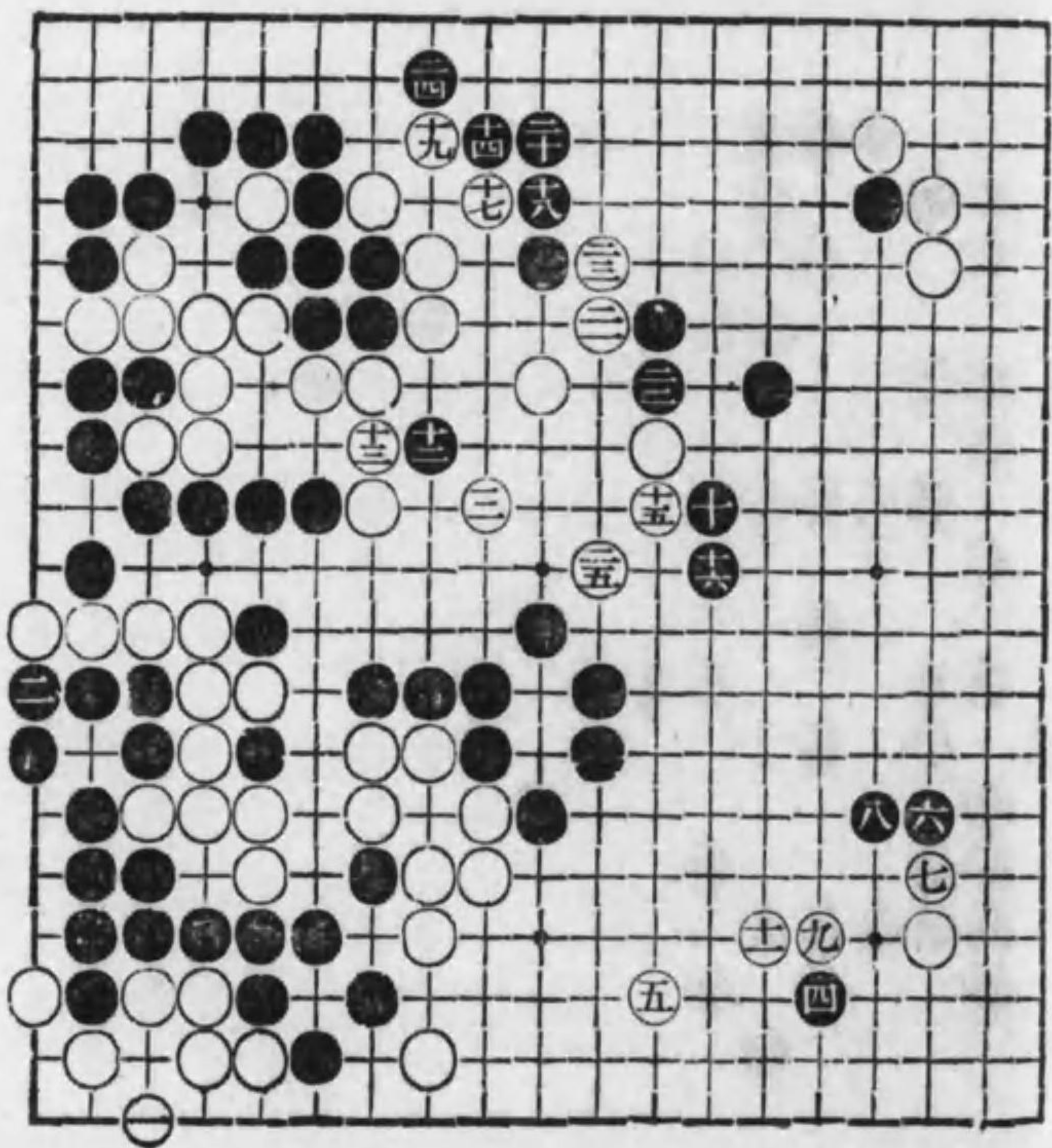
で黒百と今や焦つて追撃
急。



前譜白九十五の巧い一手
は即ち本譜白一黒二の交換
しかも白先手である。

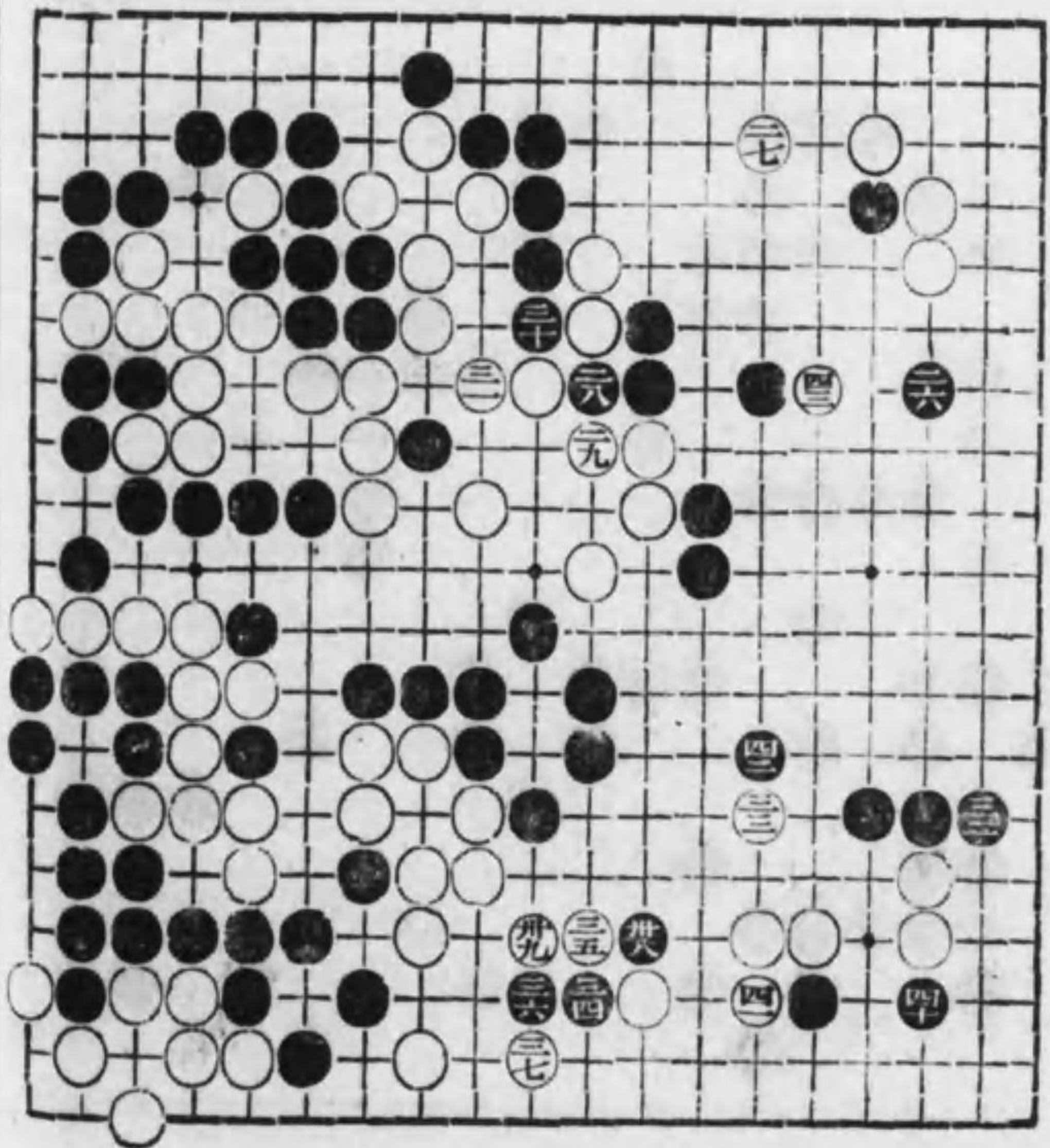
されば黒二は三の方。三
と白に打たれて以下白二十
五と治めた此れも黒の大失
着。

等は黒始めに白二子征に
取つて、あまり喜んだから
の弛緩。終局まで緊張が肝
要。



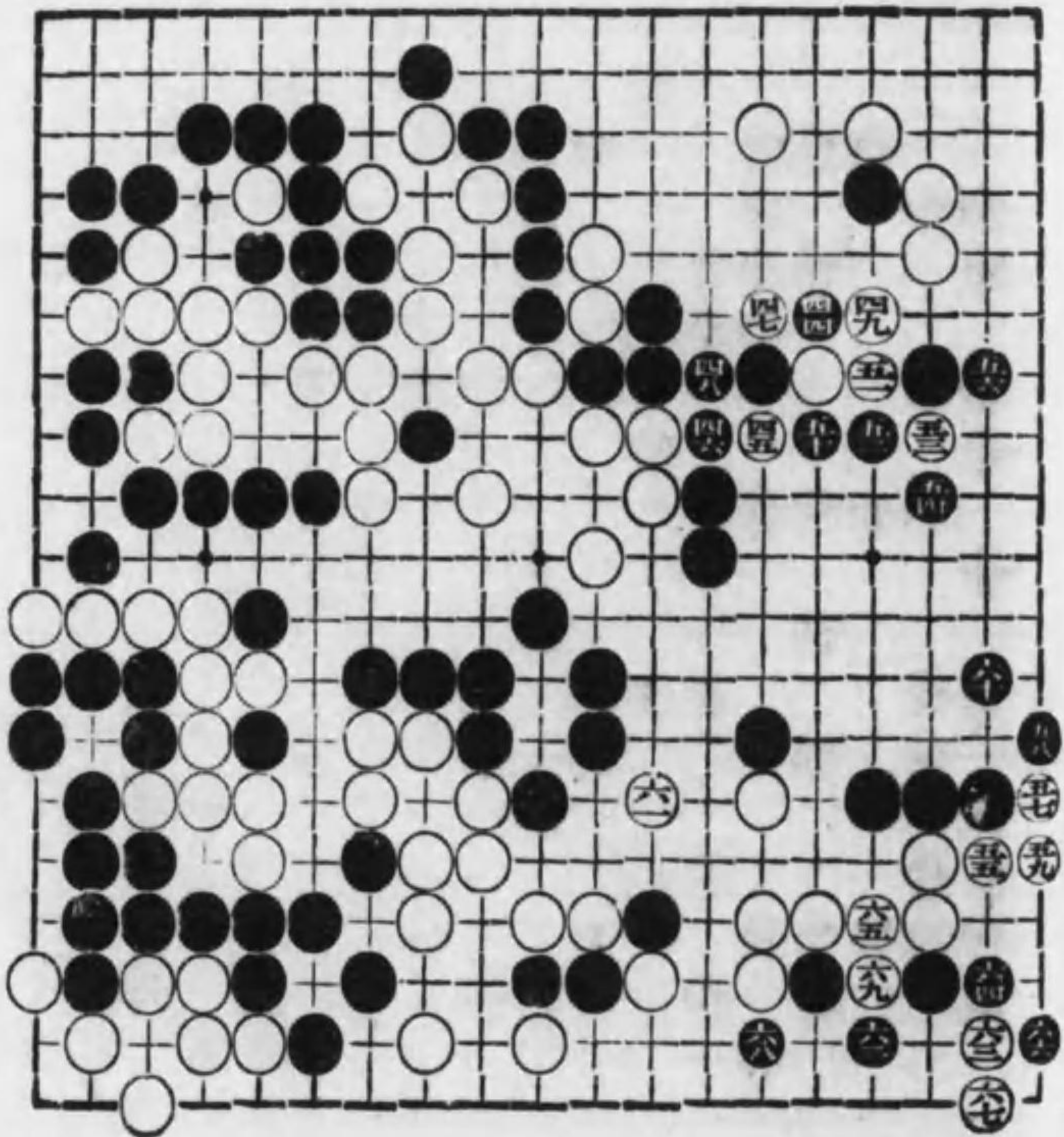
人間でもあまり若い頃に成功だと終りがよくない。如くに碁も終局まで心の弛緩は大の禁物。

さて黒は最早右側に二十六と圍ふ他は無い。がそれは守勢であつて、俗にいへばジリ貪。白四十三の——一手は侵入軍。黒は何と防禦か。



本譜は黒四十四より、そして先づ以下黒五十四と懸命に防禦。

だが白五十五黒五十六と替つて、黒五十六は得。また黒六十二と其方に手段でも判る黒苦戦の形勢。即ち白五十五の方がその態白地では黒敗けだからである。處で——

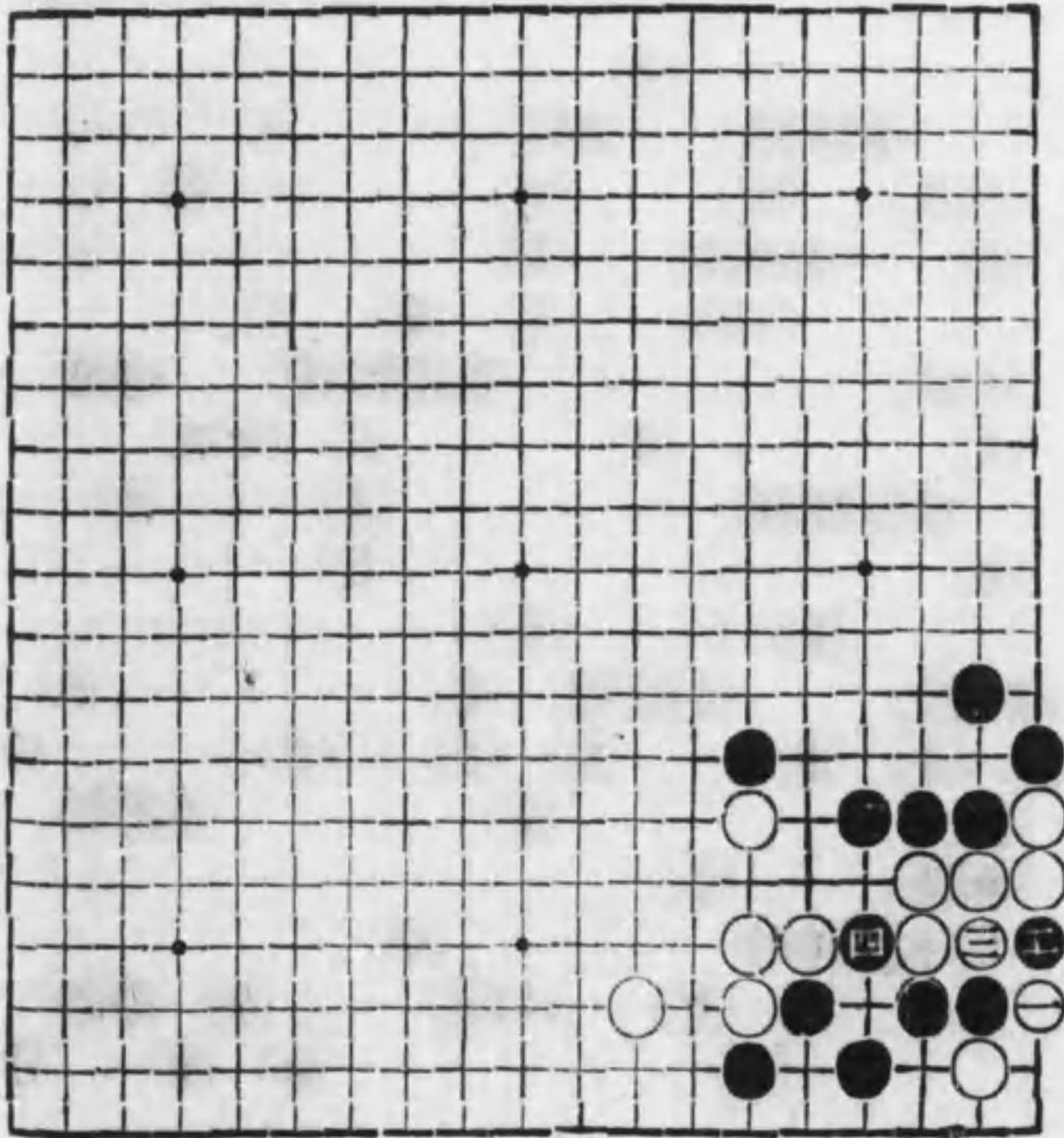


前譜白六十五を本圖一の所だと――

以下黒四と四で判る白悪果の劫争。

丁度その時は真夜中で、丈和の門人も見てゐて、ハラハラしたとある。

から無論本局は徹夜で押し通した難局であらう。見損じは真夜中に多い。



本譜は下方に黒七十から黒七十を七十一は白(い)。

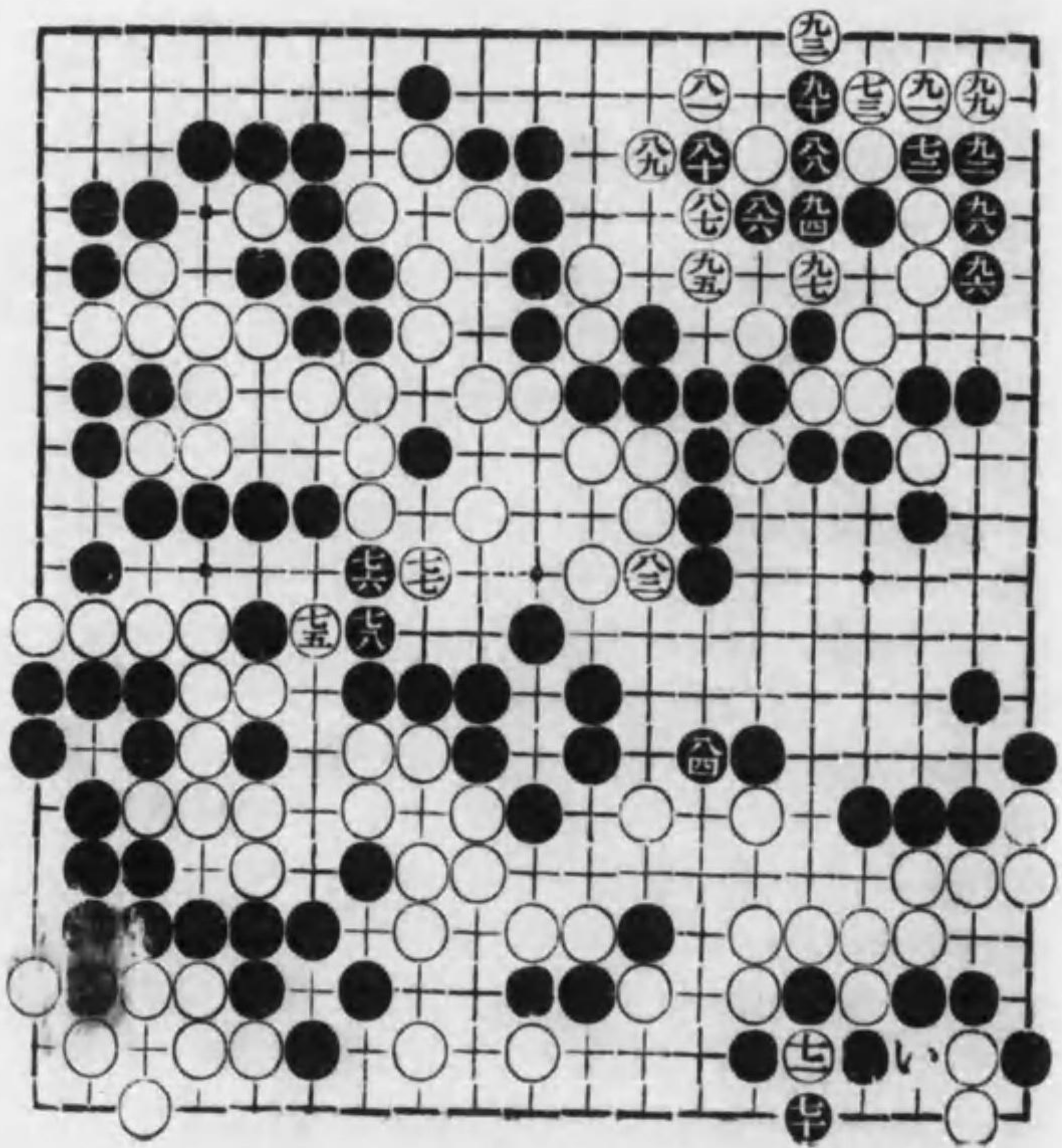
斯くて以下劫争。

劫取 劫取

劫取 劫取

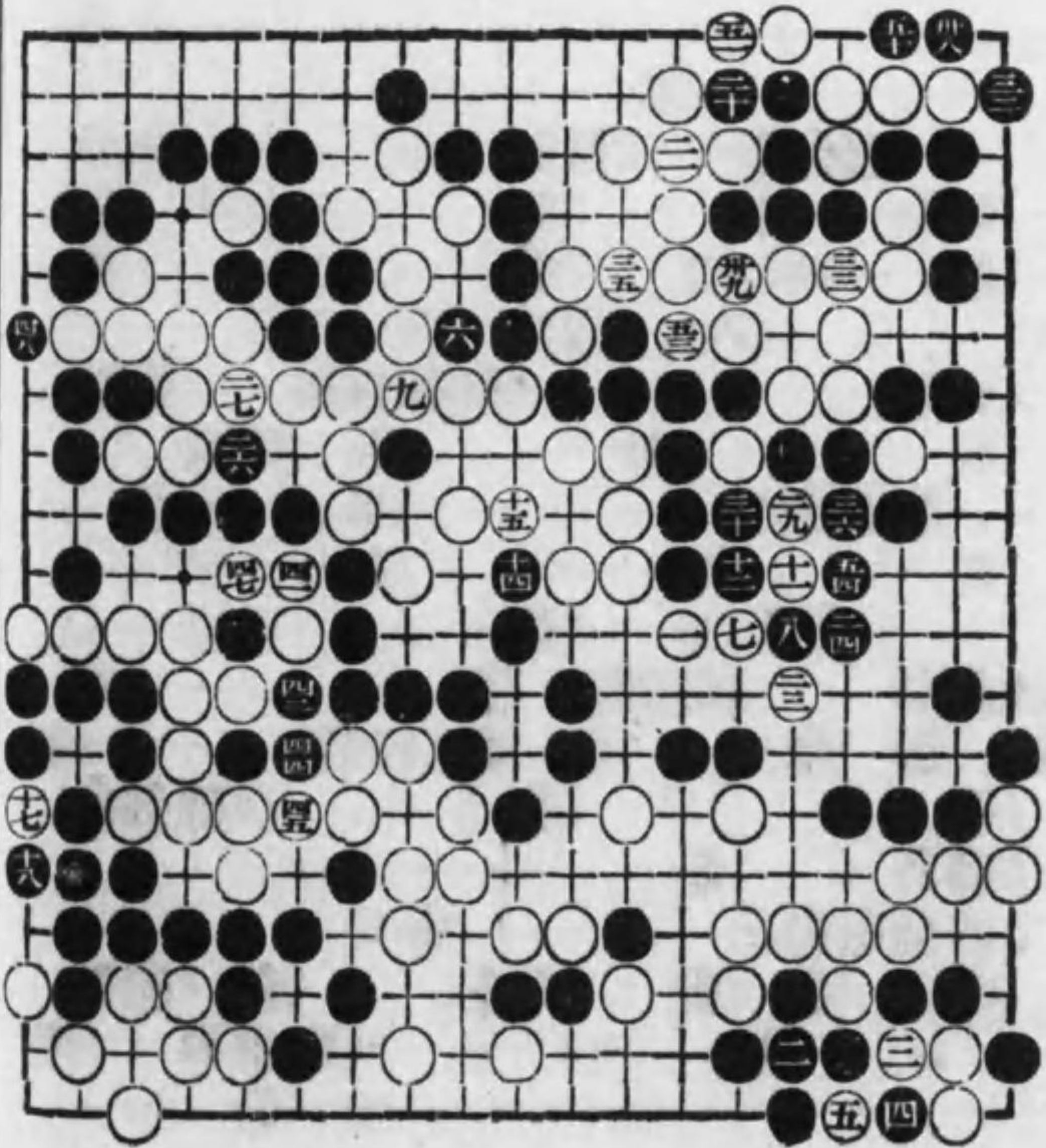
劫取

劫争だが黒七十一に劫結びでも白(い)と、白に切りがあつて黒拙い劫争。



- ① 四劫取 ② 五劫取
- ③ 四劫取 ④ 五劫取
- ⑤ 四劫取 ⑥ 五劫取
- ⑦ 四劫取 ⑧ 五劫取
- ⑨ 四劫取 ⑩ 五劫取
- ⑪ 四劫取 ⑫ 五劫取
- ⑬ 四劫取 ⑭ 五劫取
- ⑮ 四劫取 ⑯ 五劫取
- ⑰ 四劫取 ⑱ 五劫取
- ⑲ 四劫取 ⑳ 五劫取

即ち本譜黒四で本劫、
其點が黒惡形勢潜在である
本譜は白劫取五十五まで。



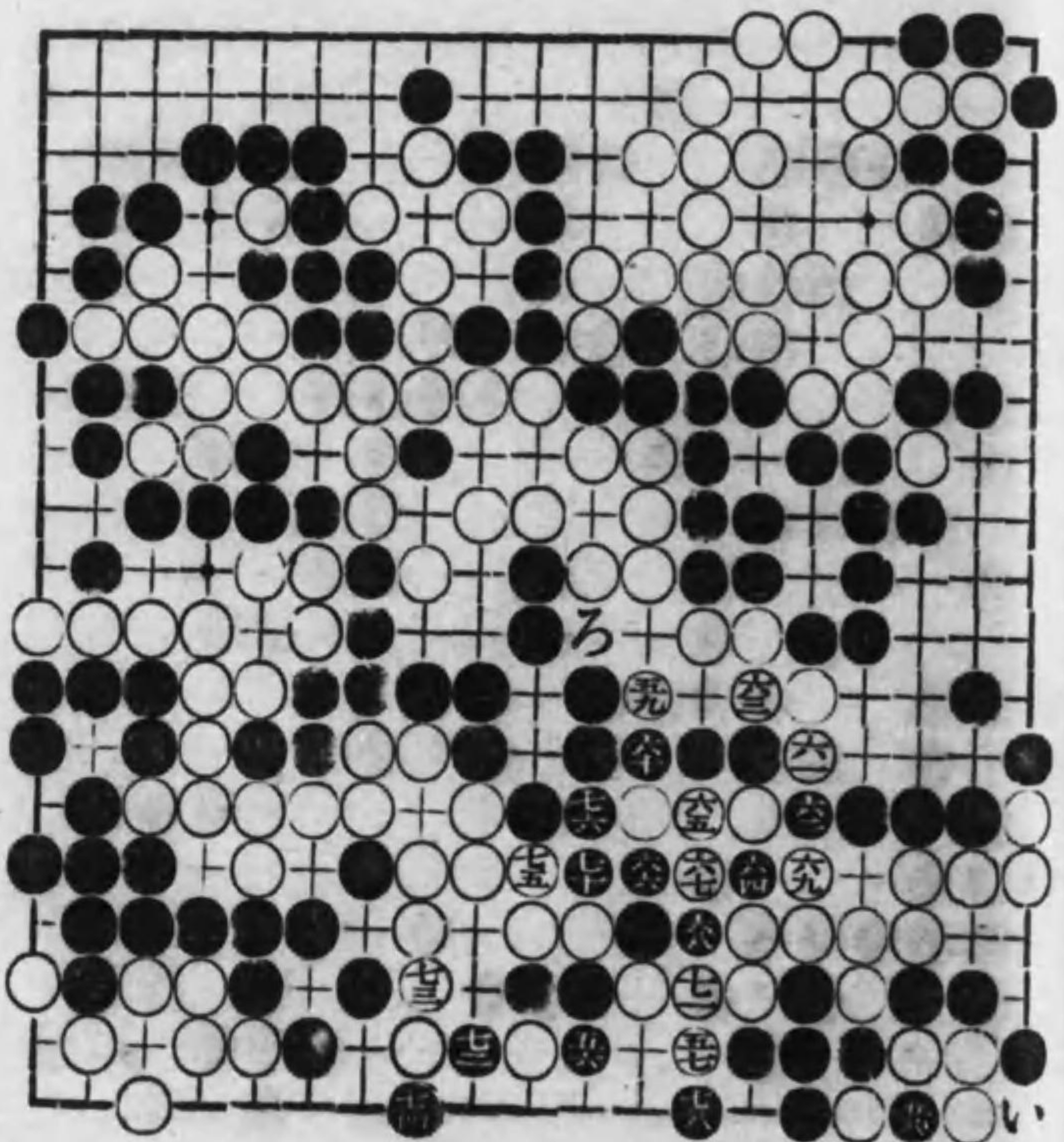
⑳ 六十四の所粘

黒五十八の劫取りに白五十九以下七十七までが即ち決勝點。

中央の黒を取れるからである。

黒七十八を(い)だと、白(ろ)で無條件白攻合勝。

だが黒七十八でも次譜白七十九と劫取り、それを控えて——



劫取 劫取

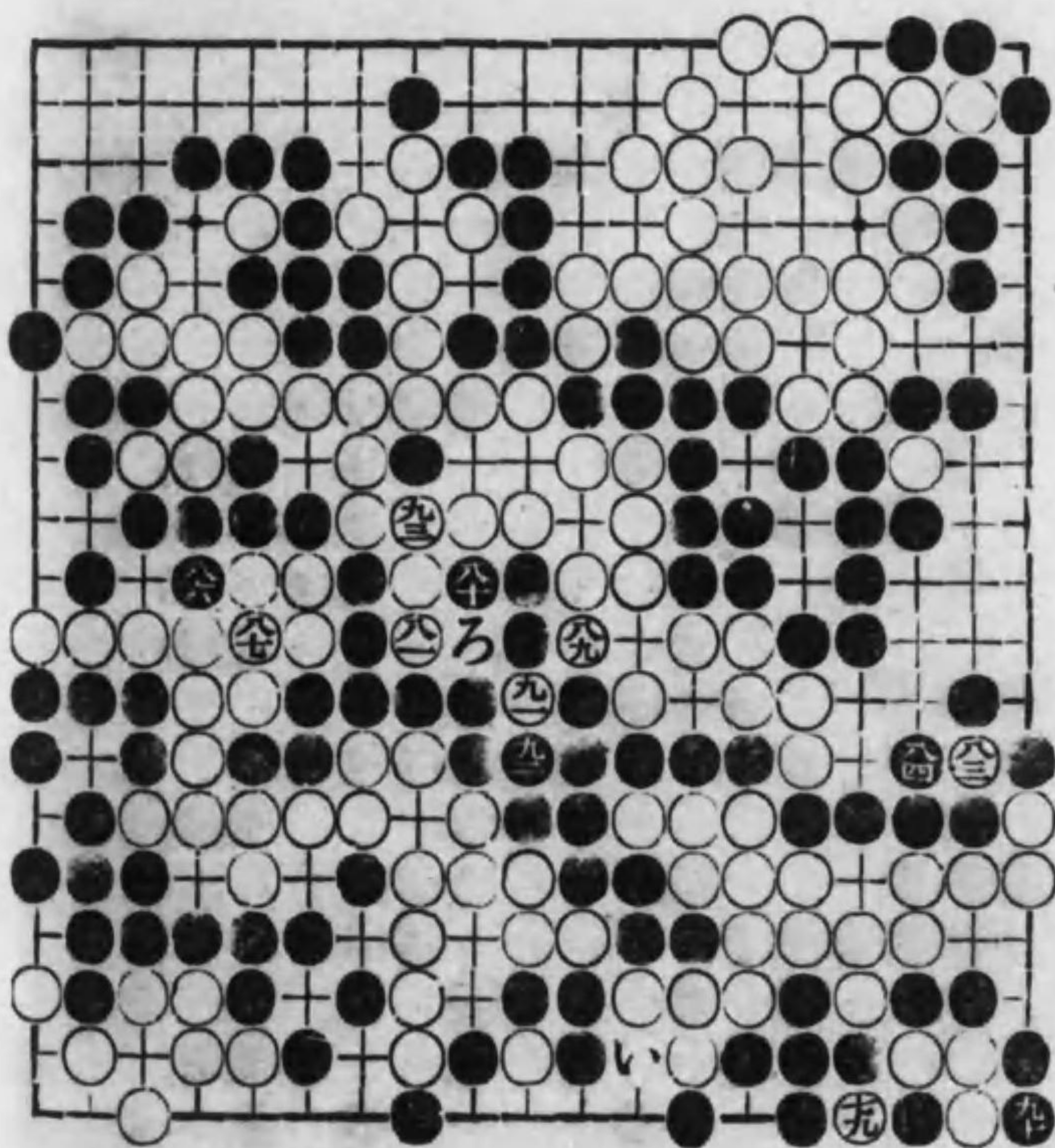
劫取

観られよ劫取白七十九に
以下黒九十は劫立てが無い
から。

そして白九十三で、次に
黒(い)白(ろ)で黒一手敗。

實に意外な變化で黒大敗
である。

此れは白に油断の無い賜
もの。



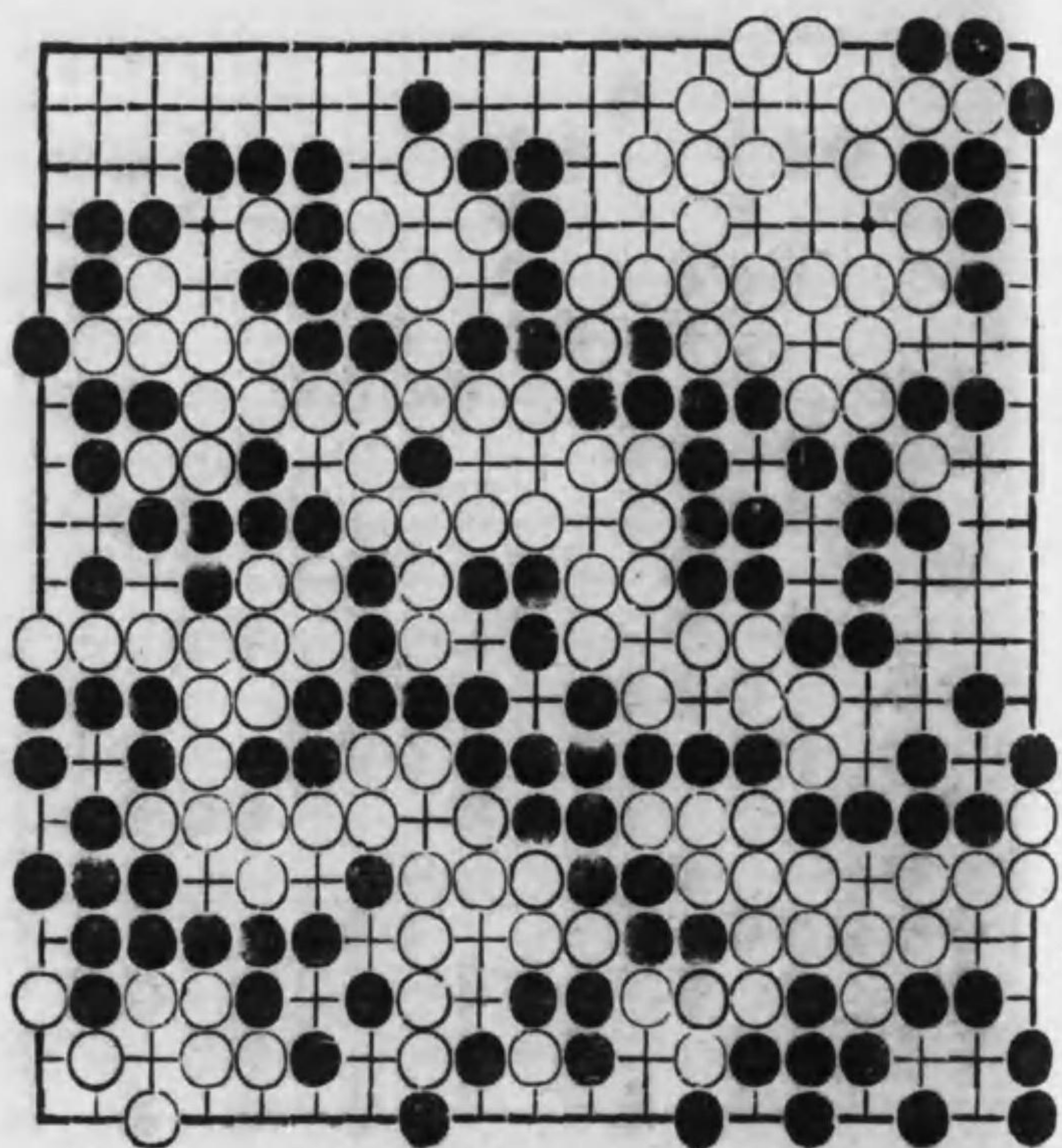
なほ白勝ち明瞭に本圖を
添えたもの。

千變萬化の跡を觀賞せら
れよ。

そして後の笑話に丈和は
本局開始前後に鰻を二兩食
べた。

この經濟戦も、苦戦だつ
た。とある。

次譜も兩先生の對局の



黒二十が巧い手所、次に白(5)――

なら黒(ろ)白(は)黒(に)。

で白の出を止め黒二十は捨石である。

捨石である。

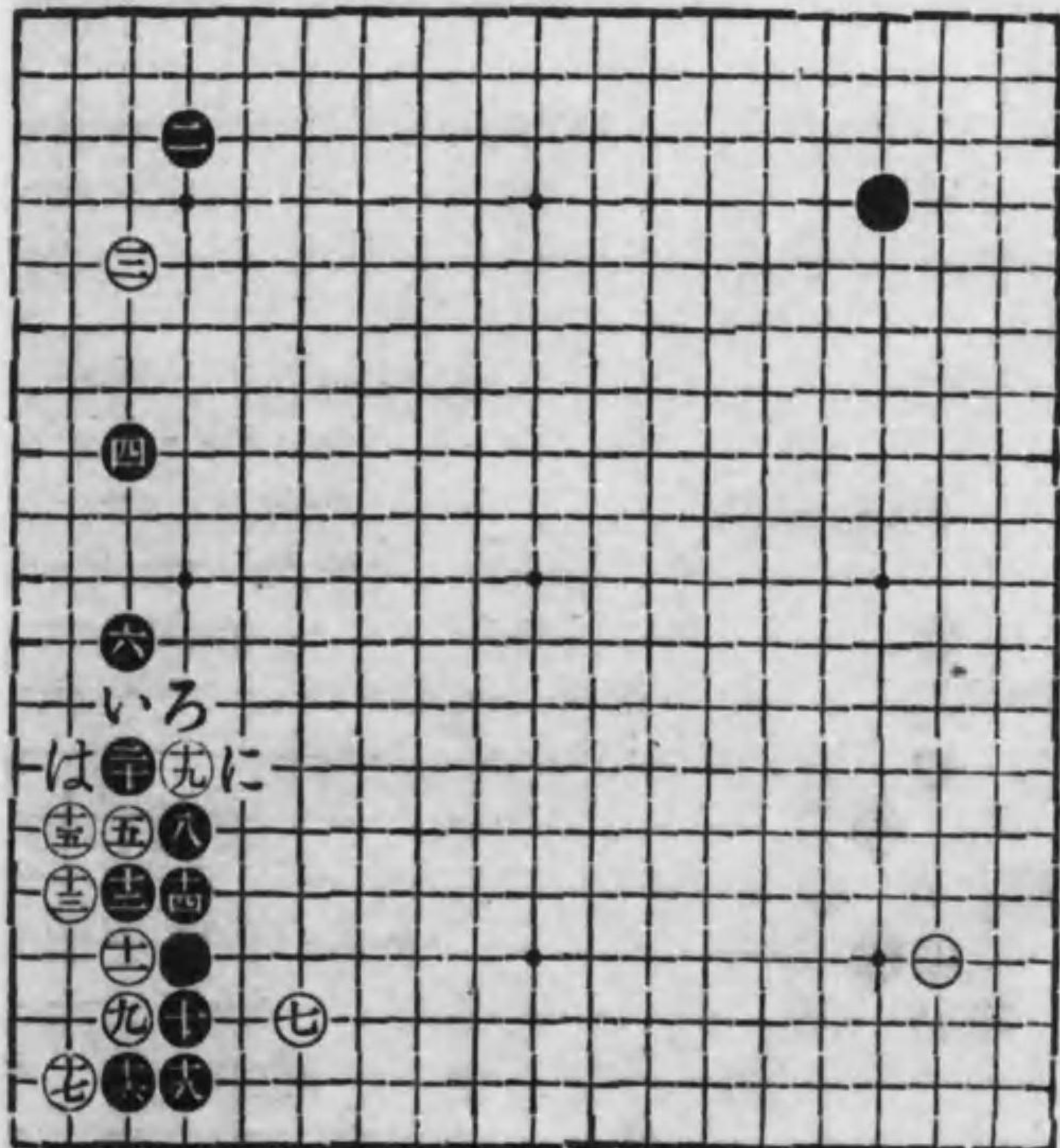
先づ黒二十の切りが打て

初段達成。

次に白九を十九、そして

黒二十だと、以下どう成る

よく現はれる場面である。



本圖は前譜白九を一に變

へ――

そして黒二だと以下白十

三と成つて――

次に黒(い)は言ふまでも

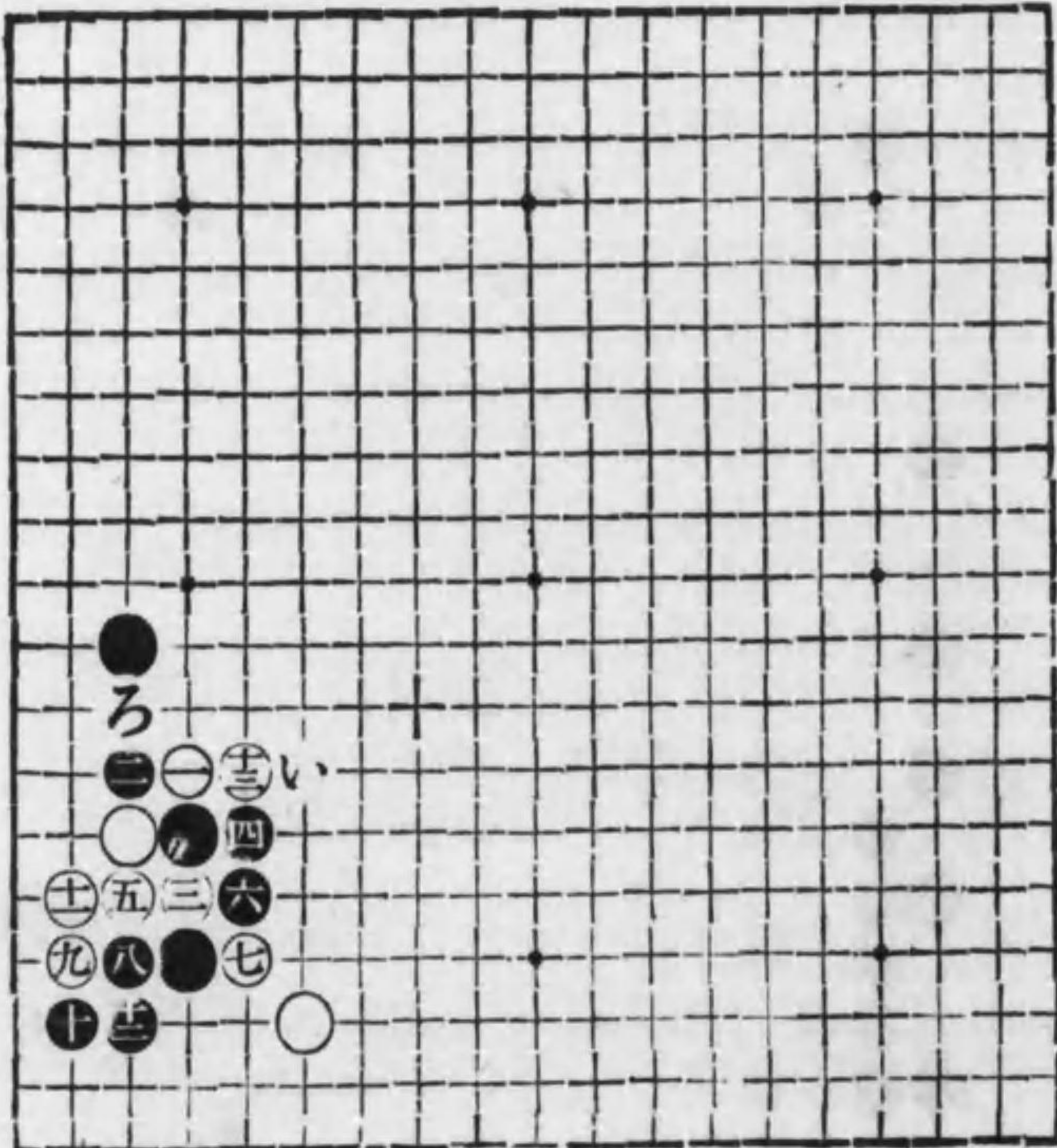
ない白(ろ)で黒悪果。

要するに白一の時黒二は

無謀の一手。

そんな所で一舉敗亡、白

九と十一が巧い手所である

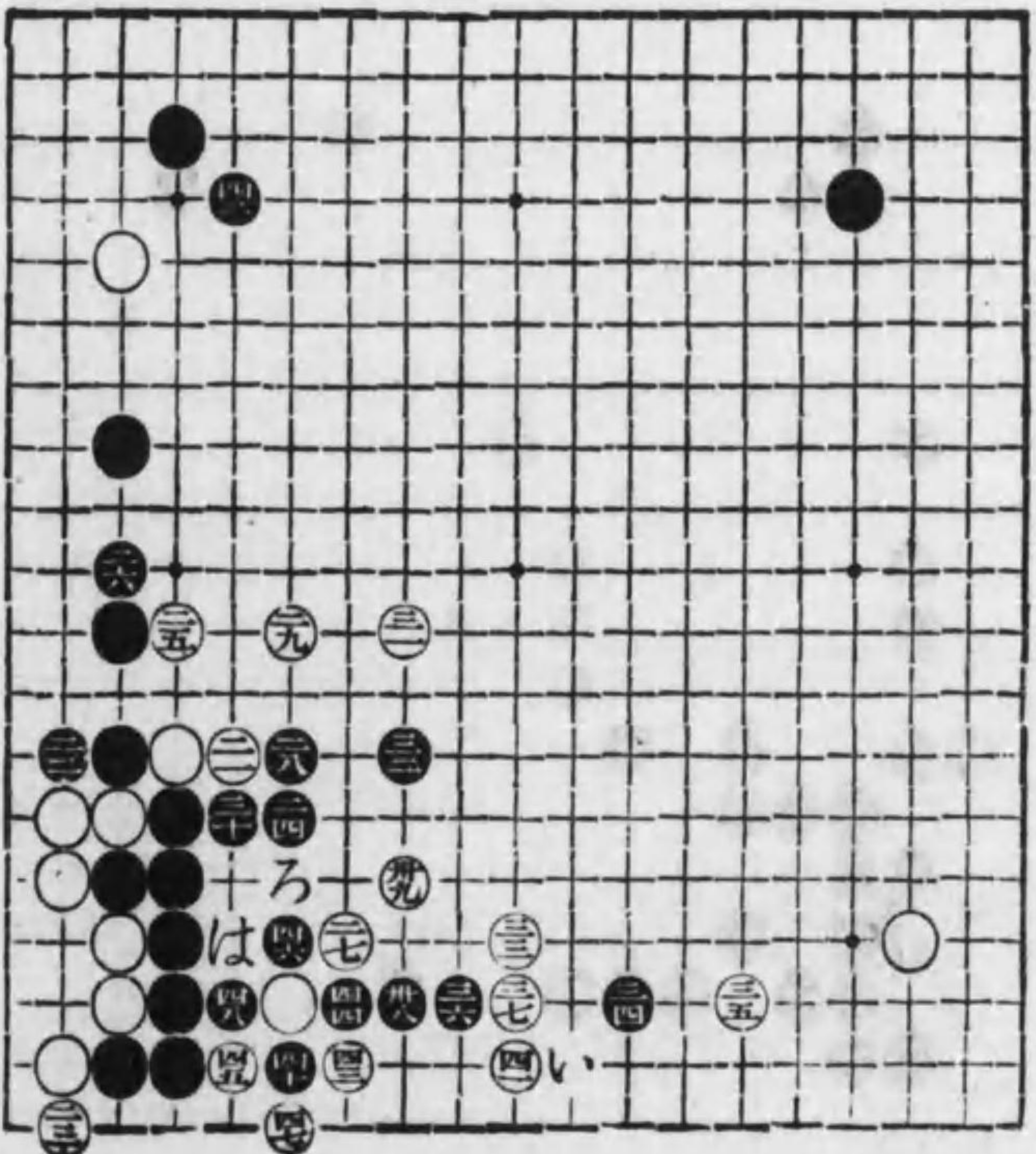


さて本譜の観點は先づ黒三十八に――

白三十九を四十四だと黒四十一白(い)黒三十九。それが黒三十八の意味。

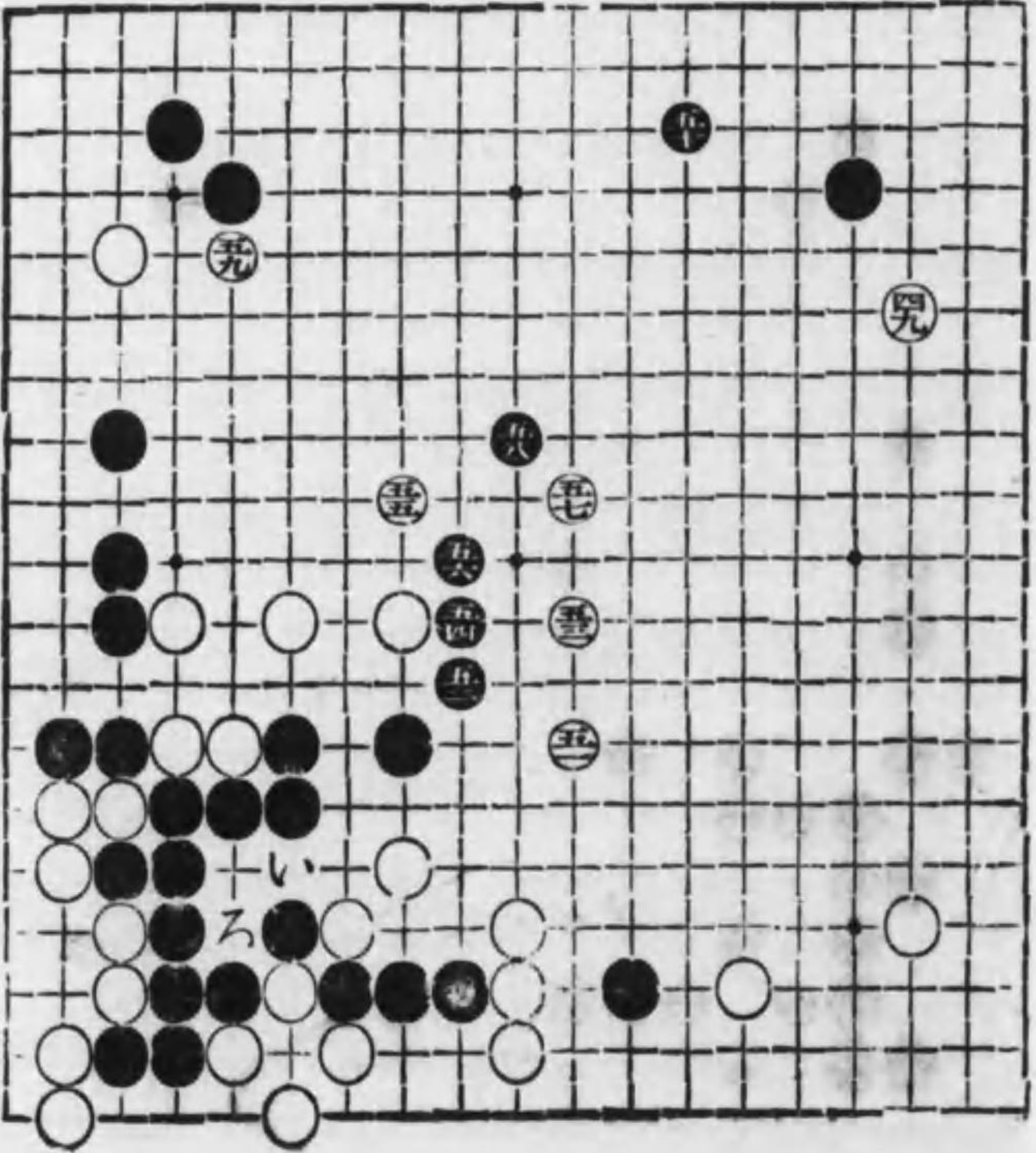
次は白四十三より四十七で、白そのままは時機を見て――

白(ろ)黒(は)を無論劫争で待望。その含みに黒は大困りの態。



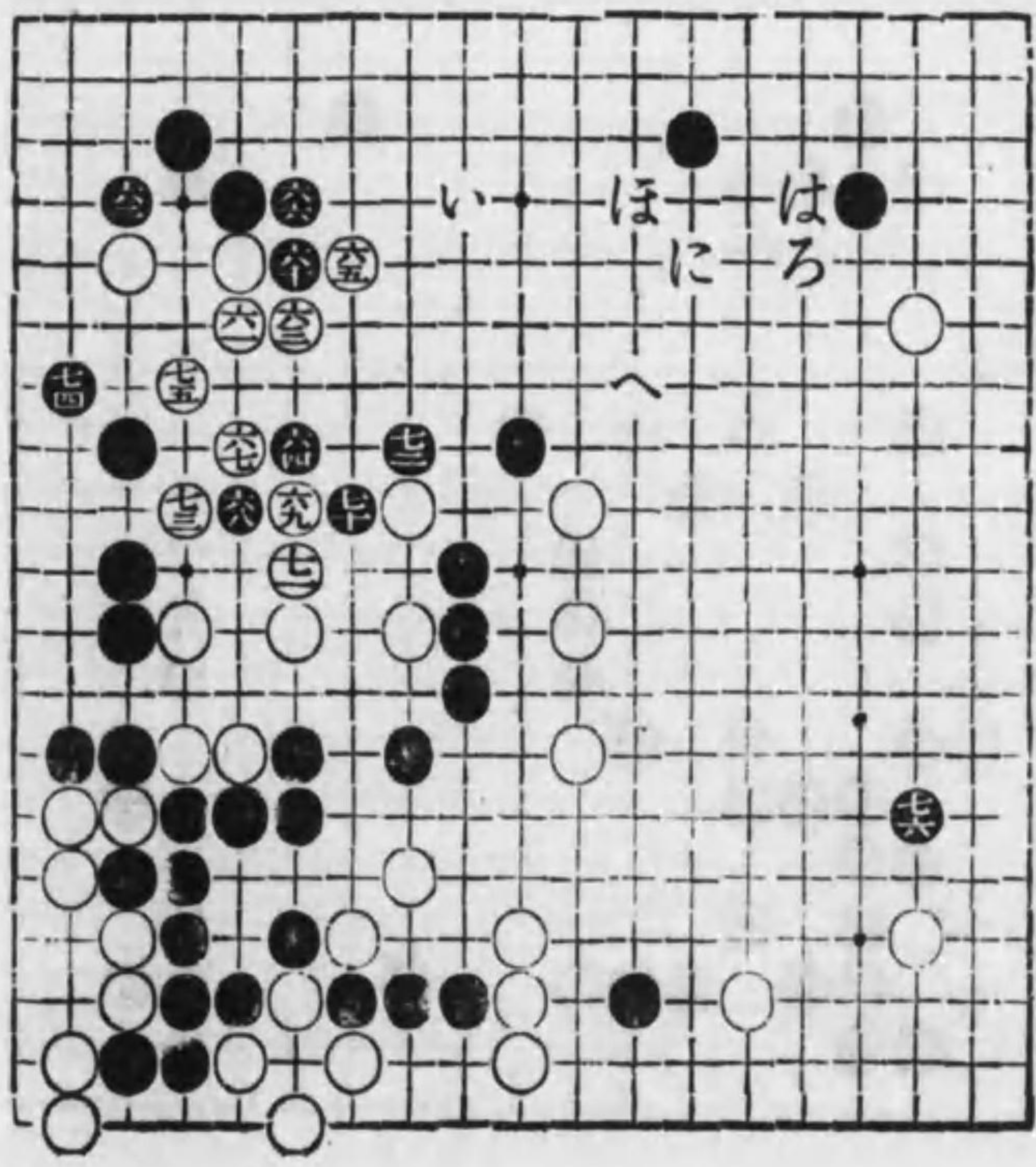
更に白(い)黒(ろ)の含みで先づ白五十一、そして以下白五十七と黒を追撃、何と右側、大巾廣に大規模。即ち前譜白四十三より四十七までの白四子捨石が絶妙の手所。

然し白五十七で右側確定白地ではない。が黒は一寸度膽を抜かれた形勢。



果然黑七十六と打込み、ジツトしてはゐられぬ當面。例へば黒七十六で上面(い)だと——

次に白(ろ)黒(は)白(に)黒(ほ)そして白(へ)と白に圍はれ明瞭黒敗。無論白六十五の方も問題外として觀られ度い推移である。

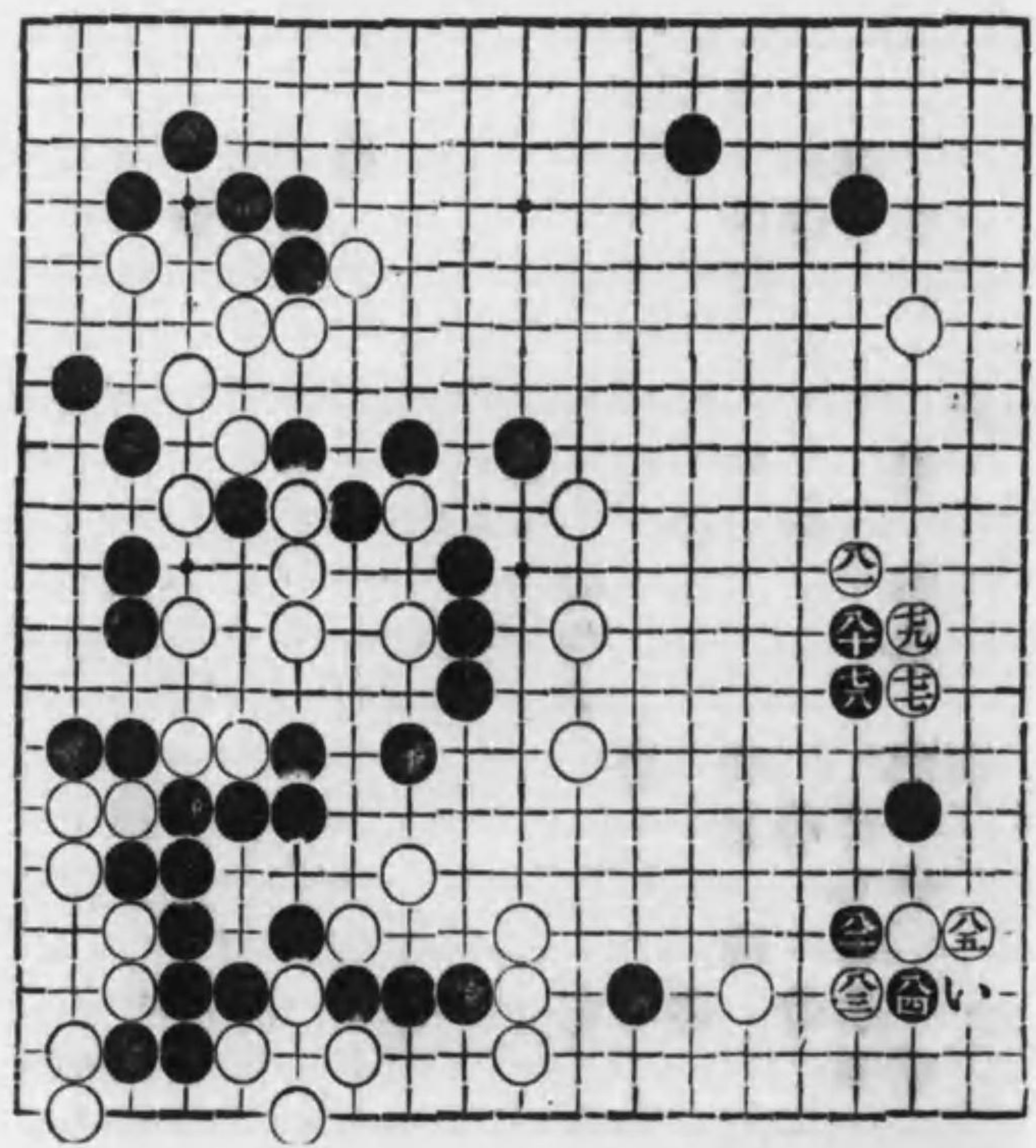


本局は白八十五で白投了中押敗とある。

斯様に黒はアツサリ負けされた事もあつて五段に落第、四段を許され歸國とある。

が相手は丈和で力戦の本家發賣、黒はよく戦つた。ともある。

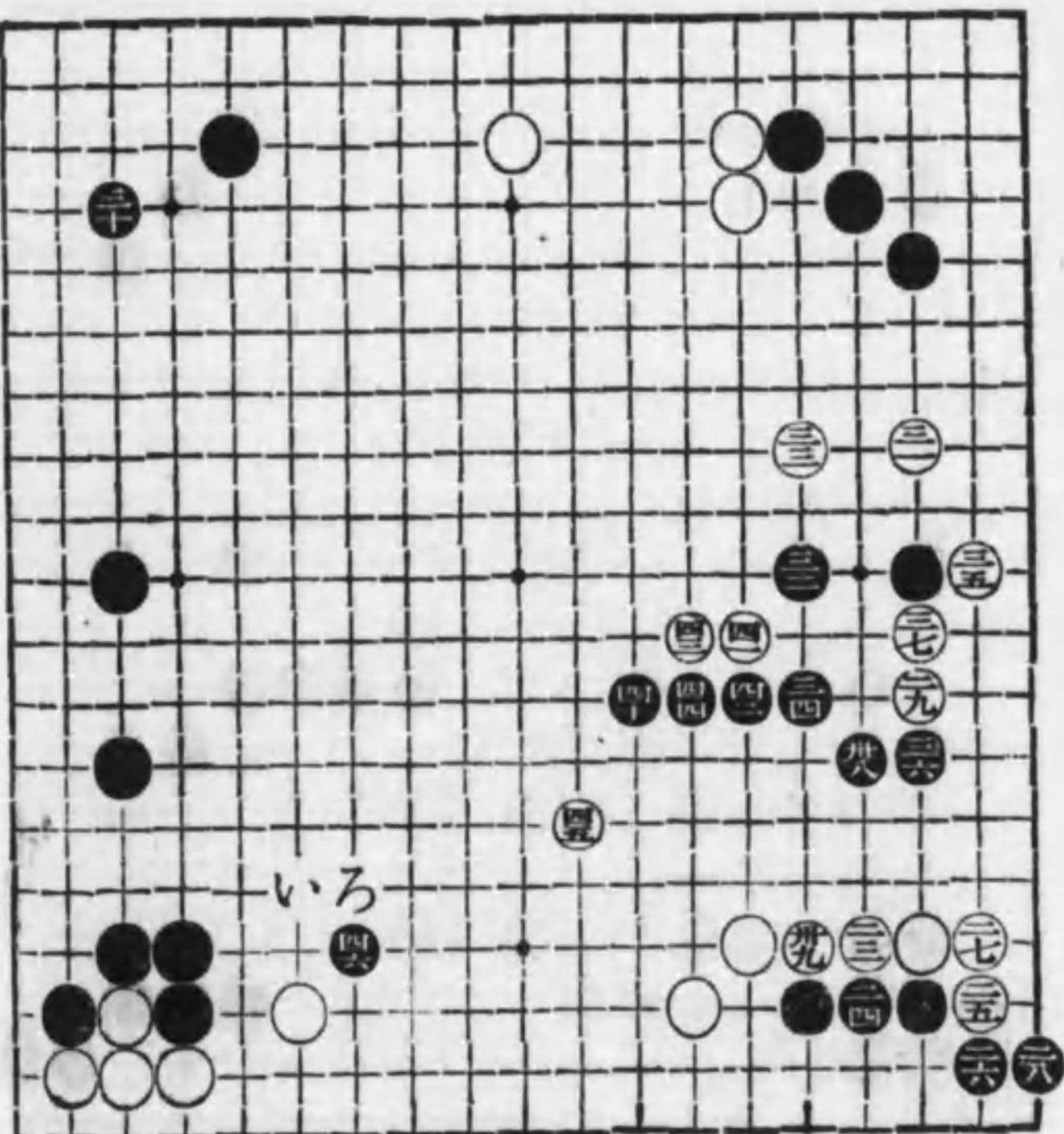
白八十五の次に——黒(い)だと一寸問題であらう——



白四十五は、即ち黒四十
六を(い)なら白(ろ)。

では白地が大きいから黒
四十六を豫想し、次譜に見
られる展開策である。

殊に二子碁は無事に治つ
ては容易に白が勝てないか
ら、ゴタ／＼待望。そこが
白の妙手腕である。

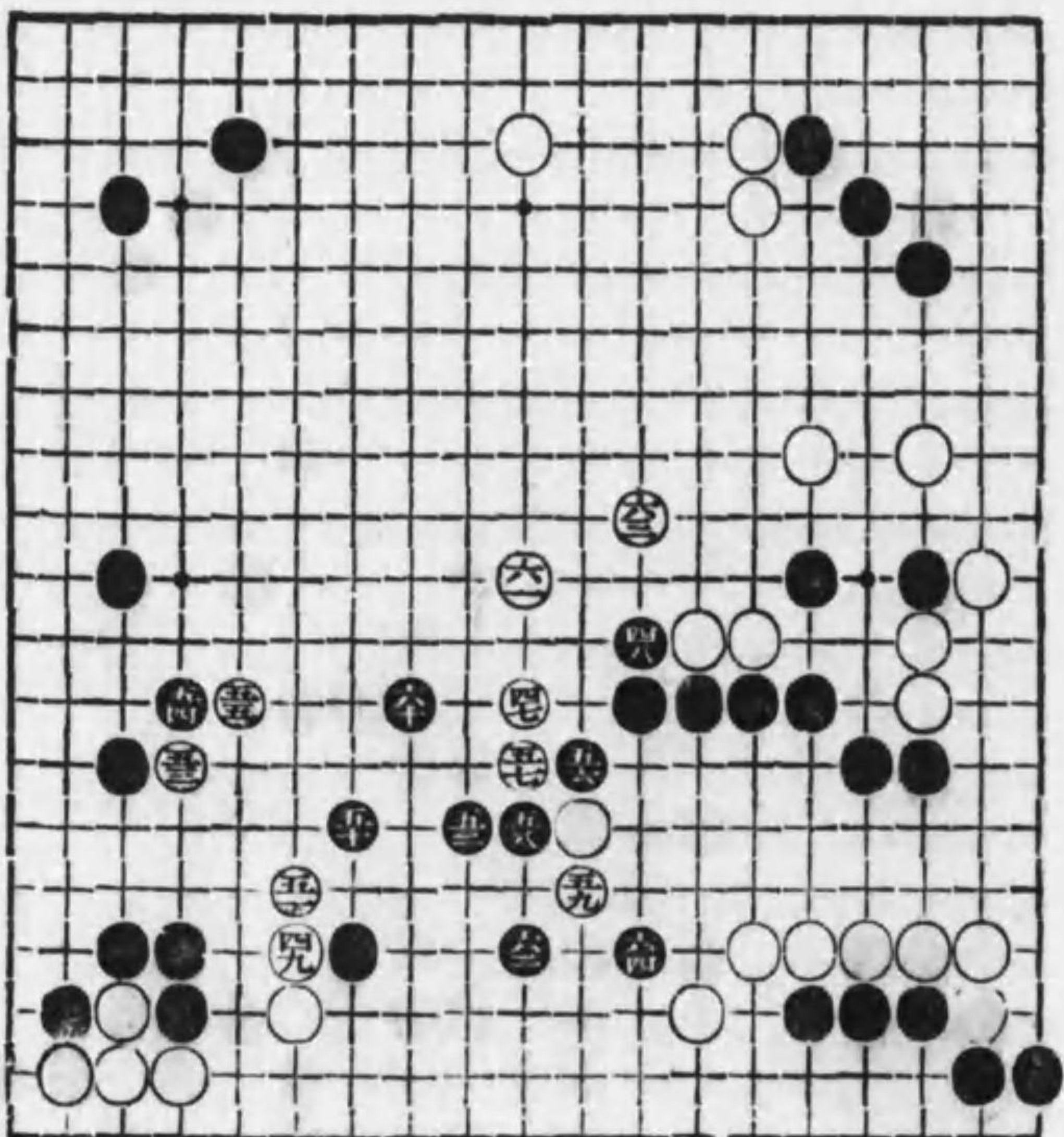


観られよ先づ白四十七以
下六十三と成つて――

左右の黒は容易に治まら
ない。

併し黒六十四に、此處が
観點である次譜白六十五の
巧い手所。

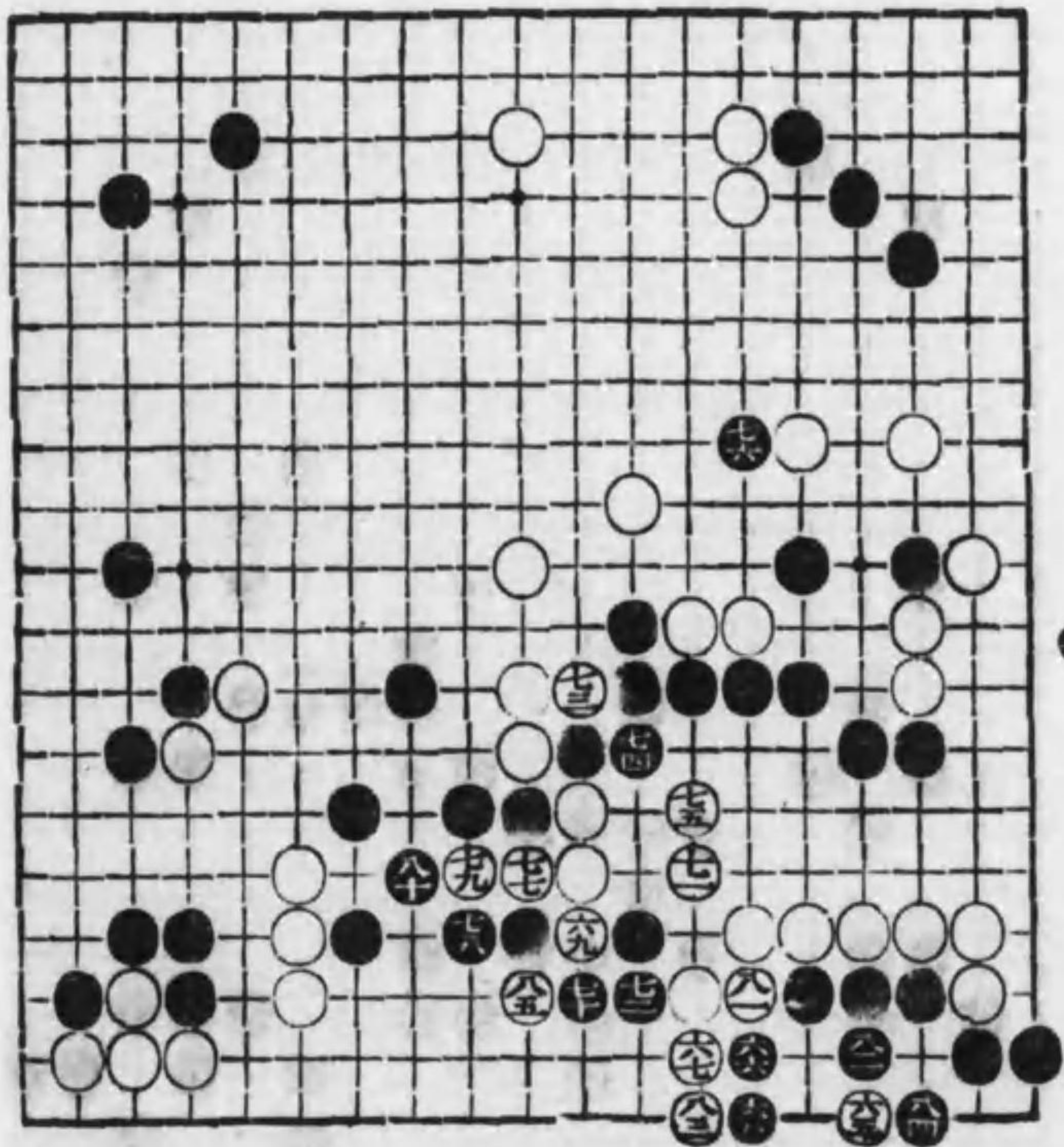
その利用に黒は閉口の態
である。



即ち白六十七黒六十八と替つて、以下白七十五で白五十九の其白二子を危険突破。

なほ白六十五の一手は八十一、八十三も利いて甚だ妙である。

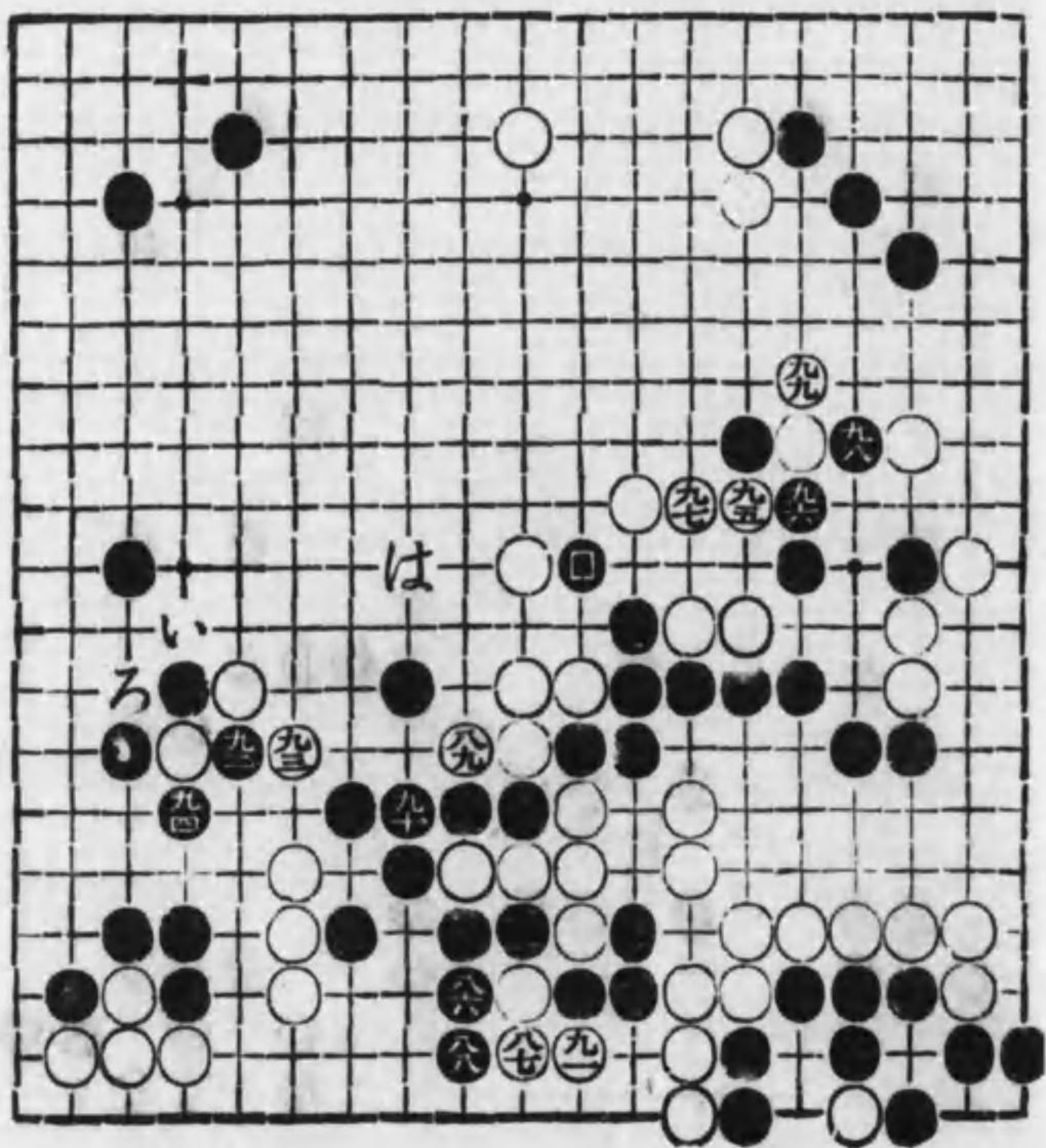
即ち白八十五と切りも残つて。



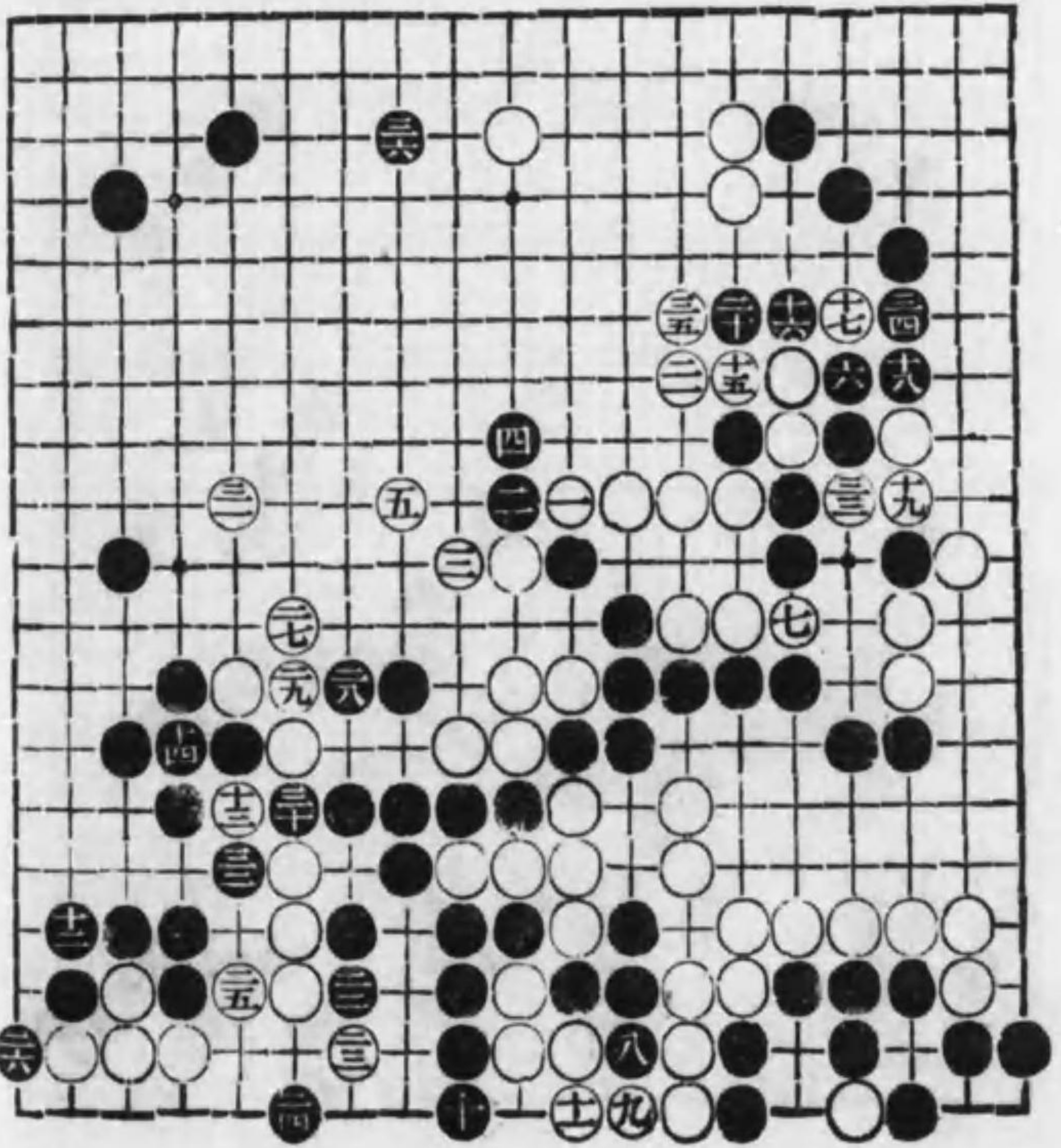
白八十五には以下白九十一までと、黒の立場は三子捨てる他は無い。

その白八十九は黒九十と替るがよいからである。

そして黒九十二を例へば九十六だと白(い)、黒(ろ)白(は)で此方の黒が大危険

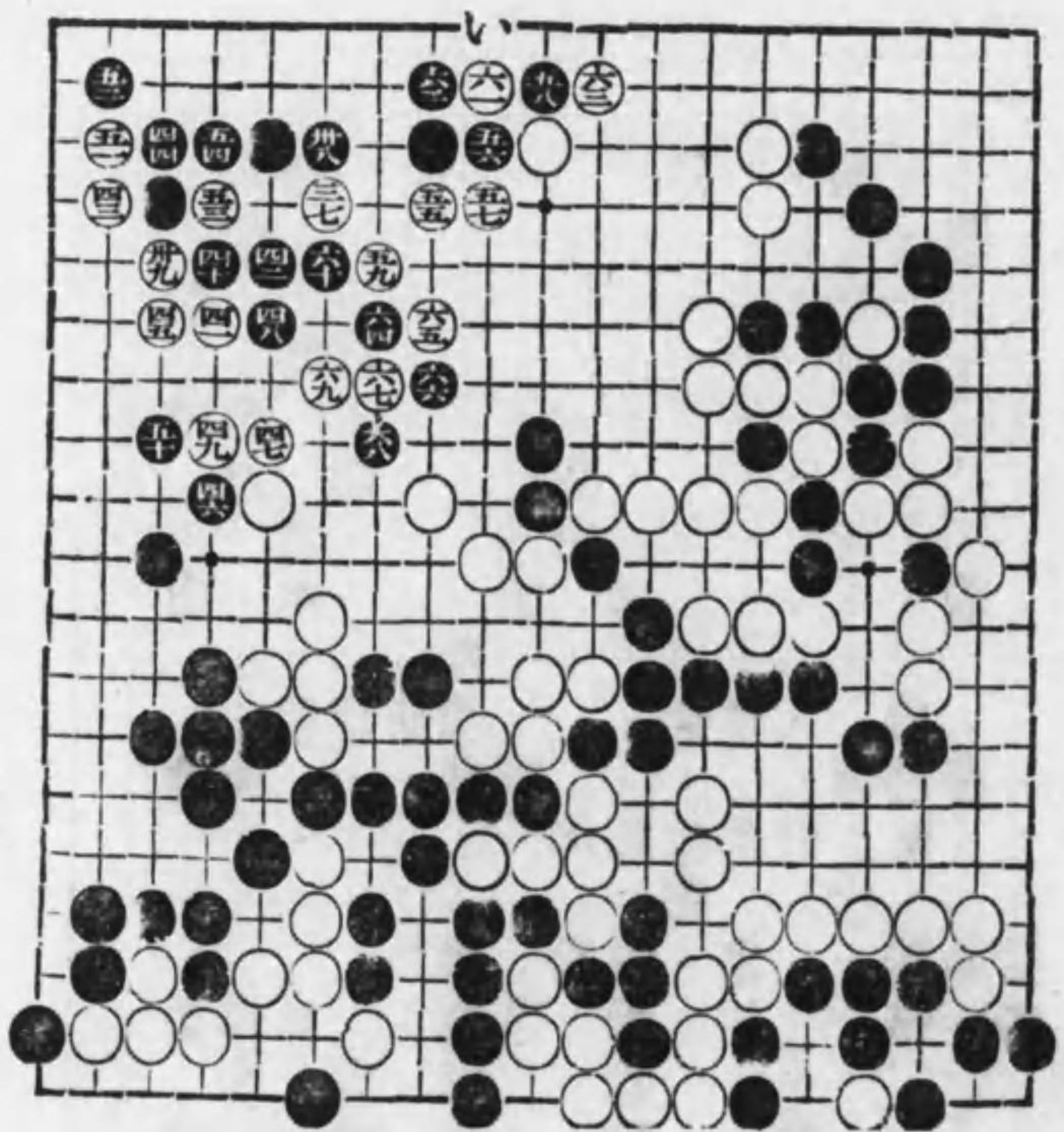


本譜は白一から、そして黒六を七だと白六で黒は全滅である。
 夫れが以下先づ黒十二と成つて、白十五を二十六だと此方白活きだが――
 白十五は其點に備へて即ち以下黒三十二と其方を捨て大勢白に悪くない見透しである。

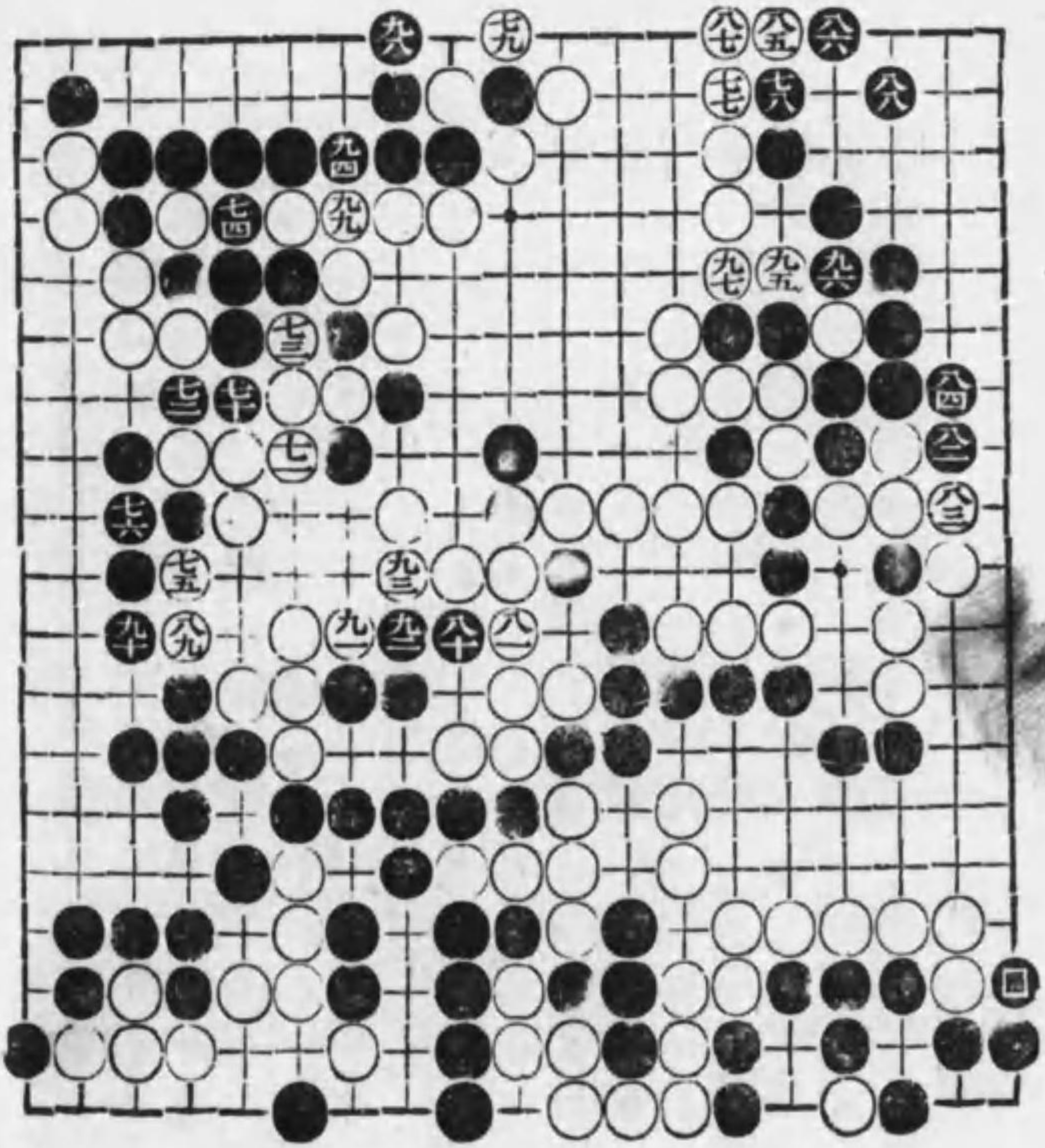


本譜は白三十七から、そして白四十五と成つた白四十三なども巧い黒地削減の場所。

次いで白六十三に黒六十四を(い)だと白六十七で黒確定敗。
 と見透しの黒六十四以下の手段も道に黒は強いもの夫れは次譜に現はれる。



本譜は黒七十から、此七十、七十二で即ち白五子奪取なんと巧い手所。
 斯くて以下は侵分戦に入つて勝敗不明に見えたが、白勝ち一目。
 その白一目勝ちの決勝点見透しは次譜――

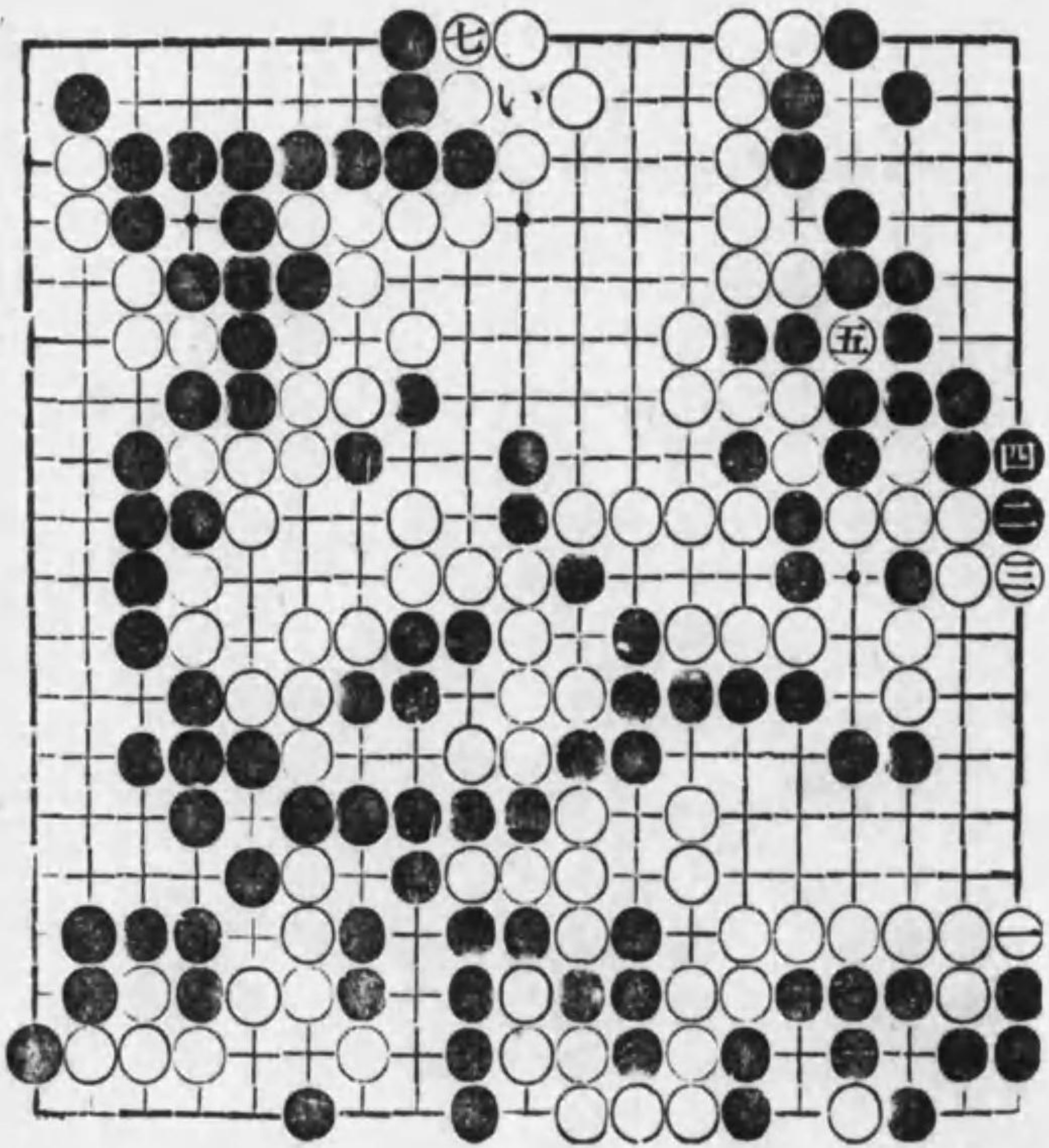


白五に黒六は白五を取返して、次いで白七が最後の手止り。

例へば黒二を七だと白五で黒(五)の劫争も白に劫立て多いから此れは黒二目敗の結果となる。

黒二を七に白(五)だと持碁である。

等の點が黒に恵れない實に決勝點であつた。



378
153

昭和十一年十月一日印刷
昭和十一年十月五日發行
昭和十二年九月十日再版

園基圖解 奥付

定價 一圓

著者 八段 高部 道平

發行者 武藤 平重郎
東京市淺草區小島町二ノ三一

印刷所 天野印刷所
東京市荒川區三河島町五ノ九三

不許複製

東京市淺草區小島町二ノ三十一

發行所 金竜堂書店

電話淺草四三五〇番
振替東京一三三二番



終